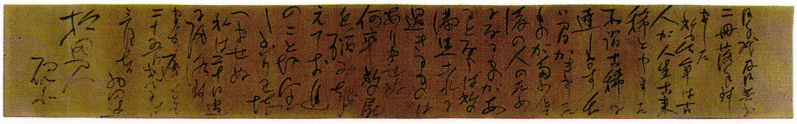
学習院大学史料館収蔵資料目録　第18号

西田幾多郎関係資料

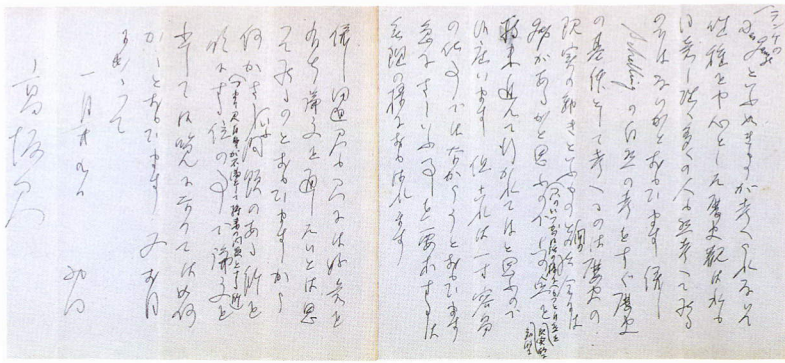
－付　全集未収録書簡－

学習院大学史料館

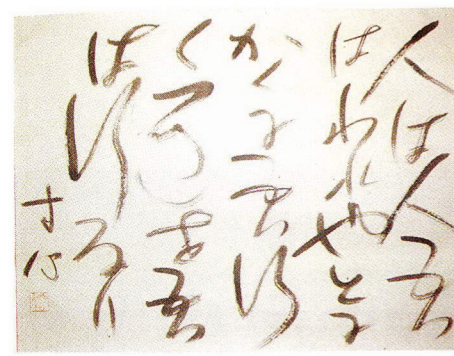
西田幾多郎写真［昭和３年］（資料番号Ｇ－11）



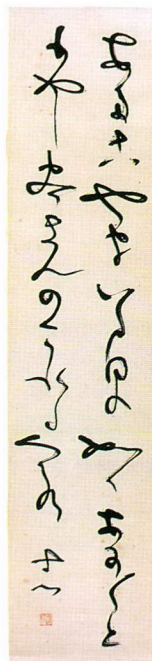
西田幾多郎差出書簡　柳田謙十郎宛　昭和14年３月７日（資料番号Ｒ－１）



西田幾多郎差出書簡　高坂正顕宛　昭和12年１月29日（資料番号Ａ－18）



「人は人吾はわれ也とにかくに
吾行く道を吾は行なり」
（資料番号Ｃ－２）



「あたご山いる日の如くあかあかと
もやし尽くさんのこれる命」
（資料番号Ｍ－２）

刊行にあたって

西田幾多郎は、明治42年（1909）７月から明治43年７月までの１年間、旧制学習院独文主任教授として教鞭をとった。

また昭和24年（1949）に西田の孫西田幾久彦氏が新制学習院大学第１期生として入学して、同28年卒業した。

これらの縁により、幾久彦氏は、昭和43年に父外彦氏の図書を学習院大学理学部に寄贈され、また昭和51年には鎌倉の遺宅を学習院に寄贈された。

学習院ではこの遺宅の名称を「西田幾多郎博士記念館（寸心荘）」とし、開館に向けて西田幾多郎関係資料の収集を呼びかけた。この結果、学習院には相当量の資料が集まった。

当館では、平成６年（1994）に本資料群の仮目録を作成し、同10年から本格的な整理と目録作成のための調査、研究を開始した。翌11年以降はスタッフを増員して調査を進め、目録の確度をあげるように努めた。

平成13年度・平成14年度は、本資料群の整理・研究を当館の特別研究の課題とし、成果の集成として本目録の刊行、および特別展示・講座の開催を行うこととした。

さて、本目録は、解説・目録本文・付録によって構成される。解説・付録は、いずれも目録本文との一体性を重視し、資料を利用する際に参考となる情報を掲載するように努めた。

したがって、西田幾多郎と学習院との関係をいま改めて振り返るならば、当然触れられてしかるべき人達、たとえば安倍能成、天野貞祐、三宅剛一等について、本目録中では必ずしも十分には触れることができなかった。この点については、平成14年６月開催予定の特別展示「西田幾多郎と学習院」において、できるかぎり補う所存である。

最後に、本資料群の整理・研究をすすめるにあたり、多くの方々にご協力を賜った。ここに記して深く感謝申し上げる。

平成14年３月

学習院大学史料館

目　次

口　　絵
刊行にあたって
解　　説
1　『西田幾多郎関係資料－付　全集未収録書簡－』について（長佐古美奈子）…… 7
2　西田幾多郎・全集未収録書簡について（酒井　潔）…… 13
3　学習院 西田幾多郎博士記念館（寸心荘）について（岡野　浩）…… 29
4　書簡の年代推定（田村　航）…… 41
目 録 部
凡　例
目　録
Ⅰ　書　簡（西田幾多郎差出）…… 58
Ⅱ　書　簡（西田幾多郎宛）…… 78
Ⅲ　書　簡（西田幾多郎以外：関係者から関係者）…… 80
Ⅳ　原　稿　…… 88
Ⅴ　メ　モ　…… 90
Ⅵ　書　…… 90
Ⅶ　写　真　…… 92
Ⅷ　証書・賞状・辞令など　…… 94
Ⅸ　履歴書　…… 96
Ⅹ　領収書・請求書など　…… 96
Ⅺ　その他文書　…… 100
Ⅻ　モノ資料　…… 100
ⅩⅢ　書　籍　…… 102
付 録 部
翻　刻　…… 109
本目録主要人物関係図　…… 163
本目録関連年表　…… 167
参考文献　…… 185

解　　説

『西田幾多郎関係資料 —付　全集未収録書簡—』について

長佐古美奈子

1．西田幾多郎関係資料について

本目録には学習院大学史料館収蔵西田幾多郎関係資料の目録および一部翻刻、それに関する解説を掲載した。

「西田幾多郎関係資料」とは学習院が各方面から収集した、現在出所が明らかな８ヶ所の資料群他からなる。内容的には（1）西田幾多郎の書簡、原稿、書、領収書など直接西田が作成・授受した資料（写真等を含む）と（2）それ以外に西田の関係者がやり取りをした書簡などである。

（2）の関係者間の書簡を本目録に掲載する理由は、以下の２点にある。１つは資料群のなかから西田の資料のみを引き抜いて目録に採録することは史料学的に不適切であること、２つめに大きな理由として、この関係者同士の書簡は、西田哲学に関することや、西田の消息が大半を占めており、内容からも西田が直接作成・授受した資料とあわせて検討する意味があると考えられる点があげられる。おそらく資料群からは同時代を生きた関係者たちが、西田哲学をどのように考え、受容し、また反発してきたか、西田の人となりをどのように感じてきたかが詳細にわかるであろう。現在まで当該資料は未公開であったため『西田幾多郎全集』（岩波書店、1947年初版、1987～89年増補改訂第４版：以下全集と記す）など西田に関する書籍や、関係者の著作、例えば『鈴木大拙全集』（岩波書店、1970年）などにも採録されたことはない。

今回目録部には簡易な内容も付し、すべての書簡を採録した。付録部には西田差出の全集未収録書簡（146件）と西田宛の書簡（10件：うちＡ－34－２は西田差出書簡に配列）、近衛文麿宛（１件）のみではあるが、翻刻を掲載した。多くの方々に利用していただきたい。

2．学習院大学史料館への伝来の経緯

昭和48年（1973）４月19日に西田幾多郎夫人琴氏が死去した後、昭和51年に鎌倉の旧宅が西田の孫幾久彦氏より学習院に寄贈された。これは幾久彦氏が学習院大学の第１期卒業生であり、同期に当時哲学科の教授であった加藤泰義氏がいたこと、同科の下村寅太郎教授が西田の弟子であったことなどが縁となっている。

旧宅は昭和52年（1977）４月に西田幾多郎博士記念館（寸心荘：以下寸心荘と記す）として開館、学習院教職員の研究の場とすることとなった[29頁「学習院 西田幾多郎博士記念館（寸心荘）について」参照]。

寸心荘が開館したことで、哲学科教授陣が西田幾多郎に関する資料を収集し、研究をすすめようとの呼びかけをした。その結果かなりの資料が収集されたと推察されるが、資料の寄贈・受贈に関して書類の受渡しがなかったこと、資料が院長室に収蔵され、その後院長室が平成４年（1992）に

改組となったことなどから、収集された全資料の点数・内容は把握できていない。

院長室改組に伴い資料は寸心荘の所管部署である管理課に移管された。その後平成6年（1994）12月6日に管理課と史料館の話し合いにより資料の保存と活用面を考慮し、西田幾多郎関係資料500点余を史料館が受託することとなった。

受託後、当館では学内での関係資料の所在調査を行った。これは前述のとおり院長室時代には資料授受に関する書類の作成がなされていなかったため、史料館受託資料以外に関係資料が存在する可能性が考えられたからである。

調査の結果、平成12年（2000）9月22日に本部地下倉庫より「平成4年2月24日柳田節子氏寄贈資料群」の一部である額2点を発見した。

さらに、平成11年（1999）11月には柳田節子氏が上記日に資料群を寄贈する際に創文社（千代田区麹町）において資料の全点コピーを行っていたことが明らかになったため、そのコピーを借用した。その結果、現在史料館には移管されていない「西田幾多郎原稿」のコピーがあることがわかり、平成12年（2000）10月25日にこの原稿コピーを創文社から柳田氏を通じて、史料館へ寄贈していただいた。

さらに平成12年（2000）6月13日、受託であった資料を管理課より保管転換（所蔵権移譲）し、資料は史料館所蔵となった。

また、古書店にて販売されていた葉書8点を平成7年（1995）と平成12年（2000）の2回にわたり購入した。

平成7年（1995）には柳田節子氏より図書『西田幾多郎の妻』の寄贈を受けた。

史料館では以下の8資料群他を一括し、資料群番号42、資料群名「西田幾多郎関係資料」とした。現在の総件数は557件である。このうち当目録には院長室時代の整理用封筒6点を除き、551件を採録した。

西田幾多郎関係資料の出所一覧

出所	関係	資料概要	点数	伝来時期	資料No.
上田　久	西田幾多郎孫	書簡、写真など	73	昭和57年（1982）12月13日 昭和60年（1985）6月15日	E1～52 F
高坂　時生	高坂正顕夫人	書簡、原稿	210	寄贈時期不明	A・B・E53
柳田　節子	柳田謙十郎次女	掛軸、書簡、書籍、写真、額、コピーなど	222	昭和58年（1983）2月頃 平成4年（1992）2月24日 平成11年（1999）11月	M4 C・D・G・L・P・Q・R
永積　昭	三木清長女洋子夫	掛軸、色紙、書籍	7	昭和52年（1977）5月頃	M1・M2 F3・I12 K7・K10・K16
阿部　正雄	西田弟子久松真一に師事	掛軸	1	寄贈時期不明	M3
下村寅太郎	西田弟子	書籍	14	寄贈時期不明	K
中込　忠三	西田琴甥	西田琴懐中時計	1	昭和52年（1977）4月	J
玉　英　堂	古書店	書簡	8	平成7年（1995） 平成12年（2000）	N・O

この他に出所不明のものが21件ある。

3．西田幾多郎と学習院の関係

西田幾多郎は、明治３年（1870）に現在の石川県河北郡宇ノ気町に生まれ、金沢の第四高等中学校（中退）、帝国大学文科大学哲学科選科を修了、山口高等学校教授等を経て、第四高等学校教授となった。その後、明治43年（1910）に京都帝国大学文科大学助教授となるが、その前年の明治42年（1909）７月より明治43年（1910）７月までの１年間、旧制学習院に独文主任教授として在職している［167頁「本目録関連年表」参照］。

この明治42年は学習院にとっても、四谷より目白に校地を移転し、新キャンパスを建設した記念すべき年であった（現在史料館として使用している建物は、その当時に図書館として建築されたものである）。

西田の学習院在職はわずか１年であったが、その間に『学習院輔仁会雑誌』第八十号（明治43年３月発行）に「宗教論」を掲載した（のちに『善の研究』に収載）。また、西田が学習院を去った後には学生有志により「西田先生の本院を去らるゝを惜む」という文が『学習院輔仁会雑誌』第八十二号（明治43年11月発行）に寄せられている。

その後西田は前述の通り京都帝国大学に移るが、学習院出身の近衛文麿、木戸幸一、原田熊雄、上田操等が京都帝国大学に入学した（上田操は長女弥生の夫となった）。また、恩師北条時敬は学習院長を勤め、親友の鈴木大拙・山本良吉らも教授として在職し、西田と学習院との縁は浅からず続いた。

昭和24年（1949）新制学習院は大学を新設する。その際の創立メンバーは安倍能成、天野貞祐であった。その後哲学科には三宅剛一、下村寅太郎、淡野安太郎、久野収等が教授に就任し、金子武蔵、務台理作等が講師を勤めた（このほかロベルト・シンチンゲルがドイツ文学科教授に就任）。『学習院新聞』（昭和25年４月28日）の記事には「（前略）当研究室は天野貞祐教授の「実践理性批判」をはじめ種々なるゼミナールを開き、また学生の研究発表会も数回開き、現在二階にある一室（現在の西１号館213号室）を中心として活動してきた。今年からはゼミナール及研究発表会を更に強調し、京大の西田哲学と並び称される様な学習院大学の哲学を生み出さんものとしている。」とある。

その後昭和43年（1968）には幾多郎の次男西田外彦氏の蔵書（634冊）が学習院大学理学部に西田幾久彦氏より寄贈され西田文庫として活用され、西田家と学習院の関係は続いている（現在は図書館所蔵）。

4．目録の編集方法

資料整理にあたっては、史料館受入時のかたまりごとにアルファベット（前掲「西田幾多郎関係資料の出所一覧」の資料No.欄を参照）を付し、かたまりのなかは物理的に上から下へ順番に番号を付した。資料番号順に配列しなおすことで史料館受入時の状態を復元できる。

［目録部］

目録は項目分類を行った後、その中を年代順に配列した。項目はⅠ書簡（西田幾多郎差出）Ⅱ書簡（西田幾多郎宛）Ⅲ書簡（西田幾多郎以外：関係者から関係者）Ⅳ原稿 Ⅴメモ Ⅵ書 Ⅶ写真 Ⅷ証書・賞状・辞令など Ⅸ履歴書 Ⅹ領収書・請求書など Ⅺその他文書 Ⅻモノ資料 ⅩⅢ書籍とした。

年代順としたのは西田差出の書簡を年代順で検索する利用者が一番多いと想定したためである。

なお、年不詳のものや全集版の年代比定に疑問点があるものについては、改めて年代推定を行った。その根拠については41頁解説「書簡の年代推定」を参照していただきたい。

書籍は、西田の蔵書ではなく、主に西田の著作本である。

[付録部]

全集未収録の西田幾多郎差出書簡全てと、西田幾多郎宛書簡についてはコピー資料2件を除き全ての翻刻を行った。

また「本目録主要人物関係図」「本目録関連年表」「参考文献」を翻刻の後に付けた。

以上の付録部分は本資料群の利用の便宜をはかるために作成されたものであり、目録と一体のものとして使用していただきたい。

5．資料の内容

資料の年代は嘉永元年（1848）から昭和61年（1986）までである。

以下、項目分類ごとの概要を記す。

＜書簡（西田幾多郎差出）＞資料群の主だった部分であり、298件を占める。そのうち全集未収録のものが半数の146件である［13頁「西田幾多郎・全集未収録書簡について」参照］。

＜書簡（西田幾多郎宛）＞11件。西田は受け取った書簡はその場で破り捨てたといわれているため、いままで西田宛の書簡を目にする機会はほとんどなかった。本資料群に占める西田宛書簡は数量的には少ないが、その意味において重要であると判断し、これも翻刻した。

＜書簡（西田幾多郎以外：関係者から関係者）＞121件。「関係者」とは漠然とした表現であるが、西田の弟子から弟子が主である。内容的には本の受取礼状、西田哲学に関すること、西田の消息が大半を占めているが、それ以外に柳田謙十郎の文部省教学官就任をめぐっても盛んなやりとりがある。

＜原稿＞4件。このうち「記亡友川越君事」は全集未収録である。

＜メモ＞7件。草稿のようなものから走り書きまでを配列した。

＜書＞西田の書幅中、もっとも有名な「あたごやま…」の原本、京都哲学の道にある石碑「人は人吾はわれ也…」の原本が含まれる。

＜写真＞四高時代、藤岡作太郎らと撮影した「不成文会々員写真」などがある。

＜証書・賞状・辞令など＞卒業証書、辞令などである。

＜履歴書＞明治20年代の西田の毛筆による履歴書3件である。

＜領収書・請求書など＞本、税金、生命保険等の領収書である。

＜その他文書＞12件、上記のどこにも分類しかねる資料を配列した。

＜モノ資料＞時計、プレートがある。時計は琴夫人が最初の留学中にアルバイトをして買ったウォルサムの金時計で、後に幾多郎が講演などの際に愛用したものである。

＜書籍＞西田の著作本で主に下村寅太郎氏、永積昭氏よりの寄贈である。

6．関連資料の所在

西田幾多郎関係資料の整理を行うにあたり、関連資料の所在を出来うるかぎり調査したいと考えた。現在までの調査で資料の所在が確認できたのは以下の機関である。なお、詳細な内容については別途報告の予定である。

宇ノ気町立西田記念館、松ヶ岡文庫、石川近代文学館、小田原市立図書館

京都大学文学部図書室（蔵書）、学習院大学図書館（蔵書）

本目録のデータ作成は、長佐古美奈子、田村航が行い、酒井潔、岡野浩からの助言をうけた。

最後になったが、本目録の作成にあたり、西田幾久彦氏、上田薫氏、上田閑照氏、故加藤泰義氏、高坂節三氏、柳田節子氏、宇ノ気町立西田記念館館長西村弘氏、同館猪谷一雄氏、同館奥野良雄氏、石川近代文学館館長井口哲郎氏、松ヶ岡文庫伴勝代氏、創文社久保井正顕氏、黒岩秀行氏、小田原市立図書館、京都大学文学部図書室、学習院大学図書館・五十年史編纂室・学習院院史資料室・施設部管理課にひとかたならぬお世話になった。

末筆ながら深くお礼を申し上げる次第である。

西田幾多郎・全集未収録書簡について

酒　井　　潔

学習院大学史料館収蔵西田幾多郎関係資料とは、鎌倉姥ヶ谷（現在神奈川県鎌倉市稲村ガ崎３－10－１）の西田幾多郎博士遺邸が、昭和48年（1973）４月19日琴夫人の逝去後、昭和51年嫡孫西田幾久彦氏によって学校法人学習院に寄贈されたのを機に、その後さらに寄贈され、また収集された書簡・掛け軸・書籍・写真等、現在まで判明している分で総計557件に及ぶ資料群である。それらの資料は異なった複数の出所をもつ。学習院への寄贈ないし収集に至った経緯等については、本目録の長佐古美奈子氏の解説に詳しい。平成６年（1994）法人側から学習院大学史料館への全面的な委託を受けて、同館による本格的な調査・整理が開始されたのである。その結果総数557件のうち、430件を書簡が占めること、またその内訳は、西田幾多郎差出書簡（分類項目Ⅰ）が298件、西田幾多郎宛書簡（分類項目Ⅱ）が11件、そして西田以外の関係者から関係者（多くは弟子相互）へ宛てた書簡（分類項目Ⅲ）が121件を占めること、しかも298件の西田幾多郎差出書簡中、現行の『西田幾多郎全集』の書簡部分に当たる第18、19巻（岩波書店、増補改訂第４版、1989年、以下全集）に未収録のものが半数の146件にのぼり、そのなかには内容的にもきわめて注目すべきものが含まれること等、が明らかとなった。(1) さらに西田幾多郎宛書簡、関係者相互の書簡に至っては上記全集では収録の対象とすらされていないのである。

本目録の作成にあたっては、それらの全430件の書簡について、項目分類（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）ごとに作成年順に配列したうえで、それぞれにつき年月日、差出、宛名、内容、形態、全集収録の有無、備考（主に消印）を確定し、一覧表形式に整理して表記した。そして項目分類Ⅰ（西田幾多郎差出書簡）のうち全集未収録の146件のすべてと、項目分類Ⅱ（西田幾多郎宛書簡）に属する11件のうち９件について、田村航氏及び長佐古美奈子氏が翻刻作業を行なった。項目分類Ⅲ（関係者から関係者への書簡）については、今回は考察対象を西田個人に直接関わる資料という狭義の意味に限定して織田から近衛文麿宛１件のみ翻刻し、他は目録への収載にとどめた。それらの翻刻の掲載公刊ならびに各内容の検討等については他日を期す。

本目録は、一次資料の確定と公表に努め、研究者や関心をもつ人達に客観的資料を提供することを趣旨としている。以下の「解説」の及ぶ範囲も、体系的解釈や思想史的評価よりは、むしろそれらの資料から直接読みとることのできる年譜や人間関係等等にかかわる最小限の範囲に限られる。以下において、まず項目分類Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの概要を紹介する。次に、項目分類Ⅰの西田差出書簡のうち全集未収録の書簡を２件、また項目分類Ⅱからは内容的にとくに注目すべき書簡を２件選び、各全文を引用したうえで、西田幾多郎研究の視座からいくつかの点について、紙幅のゆるすかぎりで述べる。

1．学習院大学史料館収蔵西田幾多郎関係書簡の概要

項目分類Ⅰ：西田幾多郎差出書簡298件について

内訳は、高坂正顕宛書簡206件（出所：高坂時生氏（高坂正顕夫人）、寄贈時期不明）、柳田謙十郎宛81件（出所：柳田節子氏（柳田謙十郎次女、元学習院大学文学部史学科教授）、寄贈時期昭和58年（1983）２月、平成４年（1992）２月24日）、務台理作宛７件（そのうち昭和11年（1936）３月23日付葉書の出所のみ高坂時生氏、他は平成７年（1995）、平成12年（2000）に史料館が玉英堂より購入）、三土興三宛１件（出所：高坂時生氏）である。

西田幾多郎差出書簡の形態のその内訳は、葉書（ペン書）194件、葉書（毛筆）13件、封書（ペン書）67件、封書（毛筆）21件、その他３件となっている。封書は便箋など１、２枚のものが43件、３枚のものが24件、４枚のものが15件。５枚のものが４件、６枚のものが１件（高坂正顕宛昭和16年（1941）２月８日付：全集№1546）、最長は７枚のもので１件（柳田謙十郎宛昭和18年（1943）８月24日付：№1810）。便箋４～５枚の長い封書は柳田宛のものに比較的多い。とくに昭和13年（1938）と翌14年の両年では、西田は柳田に便箋４枚以上の封書を８件も出している。この内７件は全集既収録であるが(№1200、1215、1278、1310、1317、1349、1385)、昭和14年（1939）１月25日付書簡は全集未収録である。

上記書簡の作成時期について見ると、最も早期のものは、大正12年（1923）３月13日付の高坂宛葉書〔全集未収録〕である（高坂の京都帝国大学卒業は大正12年３月）。以後も昭和20年（1945）５月19日付封書まで高坂宛に書簡が出されている。これに対し、柳田宛書簡が見えるのは昭和10年（1935）９月19日付葉書〔未収録〕からである（ちなみに柳田が初めて西田を訪ねたのは昭和12年（1937）２月15日である）。全298件のなかで最も遅く書かれたものは、西田逝去（昭和20年６月７日）の僅か10日前の昭和20年（1945）５月28日付柳田宛葉書〔未収録〕である。

本項目分類Ⅰに属する西田差出書簡全298件のうち、高坂時生氏寄贈の209件と柳田節子氏寄贈の81件は、複数の束（A、B、D）にまとめられていた。そのため本目録では、それらの束に従ってグループ分けし、各束に入れられていた封書や葉書に上から順に番号を付して「資料番号」としている。このグループ毎の順番による「資料番号」によって明らかになったことがある。それは、西田が高坂正顕や柳田謙十郎に宛てた書簡の各束に入っていた封書や葉書は当時の全集編集者（安倍能成、天野貞祐、和辻哲郎、山内得立、務台理作、高坂正顕、下村寅太郎）がこれを、おそらくは全件閲覧したであろうこと、そしてそのうえで全集の書簡集に収録する書簡の或る選定が編集者によってなされたに違いないことである。一例を西田差出高坂正顕宛書簡のうち昭和12年（1937）に書かれた21件にとろう。これら21件の書簡はA（封書の束）に入っている封書６件、B（葉書の束）に入っていた葉書15件からなる。Aに含まれている６件とは、資料番号ではA－18、21、22、17、24、37であり、このうちA－18、22、17、24が全集に収録されており〔№1071、1075、1087、1120〕、A－21とA－37が未収録である。Bに入っていたのは計15件の葉書であり、B－50、51、52、54、85、61、60、59、62、58、57、56、55、53、150である。このうち、最初のB－50、B－51だけが収録分であり〔№1064、1065〕、それ以外はすべて全集未収録なのである。

封書群Aにおいて、全集に収録されなかったA－21とA－37（次節で引用する）に共通する性格

は何であろうか。即断は控えたいが、少なくとも、第三者についてネガティヴな言及が為されている。A－37（昭和12年11月15日付）では、田辺が名指しで批判されている。けれども田辺批判を示した同時期の手紙であっても、西田がA－37と殆ど同様の文言で田辺への失望感を露にし、そのうえ一層執拗に田辺を批判した、務台理作宛書簡（昭和12年11月22日付）は全集に収録されているのである〔№1168〕(2)。Bの葉書群はすべて身辺事にかんする短信である。しかし全集に収録されたB－51、52だけは、ランケの引用にかんする問い合わせを趣旨とするものである。

項目分類Ⅱ　西田幾多郎宛書簡　11件について

西田自身は封書や葉書を数多く書いたが、しかし、西田に宛てた書簡は、西田は読み終えると自分で破り捨てるのが常であり、残存するものはごく僅かしかない。上田薫氏（父：上田操、母：西田弥生（長女）の長男）の証言によれば、西田は手紙類を残したくはなかった。それを三女静子が時折屑箱から拾いあげて残しておいた（そのなかには田辺からのものもあった由）。そのようにして静子はかなりの西田の遺品を所持していたし、独身だった静子は西田没後も、京都百万遍近くの家に一人で住んでいた。静子が亡くなったとき、その遺品を上田薫氏が引き取られたのである。

学習院大学史料館収蔵の西田幾多郎宛書簡11件の出所は上田久氏（上田薫氏次弟）となっており、上田薫氏の上に言われた伝来を示唆する。それら11件の差出人内訳は、西田得登（西田幾多郎実父）1〔得登からの最後の手紙〕、藤田豪之輔1、鈴木大拙4、瀧澤克己2、大津勉1、柳田謙十郎1、道津雪門1。いずれも全集未収録である。そのうち瀧澤克己から西田へ宛てた2通の書簡は、便箋6枚からなる昭和14年（1939）3月11日付と、便箋4枚からなる昭和15年10月4日付のいずれも長文の封書であり、内容的にも田辺哲学への批判を開陳した注目すべきものである。さらに柳田謙十郎から西田幾多郎へ宛てた便箋4枚の昭和15年8月29日付毛筆封書も、西田によって同年8月岩波講座『倫理学』第二冊誌上で発表されたばかりの論文「実践哲学序論」へ言及するとともに、田辺哲学への批判を含んだ注目すべき内容である。

上田家寄贈の西田宛書簡11件のうち最も初期のものは、道津雪門差出明治36年（1903）8月24日付のもの〔E－73〕である。この書簡は宛名が不明なうえに、後半が欠けている。しかし内容から判断して本目録では西田宛に分類することにした。ただし当史料館に在るものはコピーであり、原資料は収蔵されていないため今回の翻刻の対象からは外した。

なお、上記の上田久氏伝来の西田幾多郎宛11件以外に、もう1件の西田宛書簡が、すなわち、鈴木大拙から西田幾多郎宛の昭和16年3月15日付の便箋1枚に毛筆でしたためられた書簡が存する。内容は鈴木大拙が西田に、高野山大学における西田哲学の講義に高坂正顕を推挙してほしいというもので、これも全集未収録である。そしてこの書簡は、まったく同一の日付をもつ西田差出高坂正顕宛のペン書便箋3枚の封書（西田が高坂に高野山大学への出講を依頼している）〔A－34－1〕に同封されていたのである。それゆえこの大拙差出西田宛書簡にはA－34－2という資料番号が付せられた。後者のみならず前者の西田差出高坂宛書簡〔A－34－1〕も全集未収録である。このなかで西田は、「君（＝高坂）が御迷惑なら彼（＝柳田）が如何かであろう」と記している。当時、西田哲学の紹介や解説を求められた場合の適任者として、弟子筋のなかでは高坂正顕が、大拙にも

見なされていたこと、また西田は高坂のそれとならんで柳田謙十郎の西田哲学理解にも信頼を置いていたことが窺われる。

項目分類Ⅲ　関係者から関係者への書簡121件について

西田幾多郎本人以外の、関係者から関係者への書簡は計121件を数える。そのうち７件、すなわちＥ－71（実父西田得登ほかから石川県県令桐山佳孝宛明治10年７月５日付）、Ｅ－21（織田から近衛文麿宛昭和１年12月26日付）、Ｄ－148－２（三浦広吉から木村素衛宛、日付不明）、Ｄ－104－１（柳田謙十郎から柳田不二、陽一宛昭和15年５月16日付）、Ｄ－104－２（Ｄ－104－１に同封されていた柳田謙十郎から柳田陽一宛）、Ｄ－107（臼井二尚から柳田陽一宛昭和15年７月13日付）、Ｄ－144－２（務台理作から木村素衛宛昭和16年２月13日付）を除けば、すべて柳田謙十郎宛書簡であって、次女柳田節子氏から学習院に寄贈されたものである。寄贈者は、Ｅ－71、Ｅ－21は上田久氏、それ以外はすべて柳田節子氏である。

柳田謙十郎宛書簡114件のその差出人別内訳は、次のとおり：木村素衛から40件、務台理作から35件、鈴木大拙から16件、田辺元から15件、山内得立から４件、高坂正顕、篠原助市、小島祐馬、田辺寿利から各１件。

内容は、柳田謙十郎の新刊書（フィヒテ論、『弁証法的世界の倫理』）や柳田から送付された論文への礼、感想、批評、批判、そして柳田と各差出人とに共通の師である西田の思索、田辺の対西田批判、田辺に対する柳田達の批判、或いは柳田の文部省勅任教学官就任の件（昭和14年（1939）１～２月、昭和15年６月[3]）、柳田の学位論文計画、共通の知人の消息、新しい出版物、その他身辺の細かな事項等等、多岐にわたっている。

なかでも、務台理作が自分と西田の思想的親近性を柳田に述べた昭和14年（1939）12月30日付、同15年８月12日付の長い書簡〔Ｄ－94、89〕、同じく務台が田辺への批判を柳田に述べた昭和12年11月３日付、同16年２月13日付の書簡〔Ｄ－78、85〕、さらに務台が田辺・高橋論争に触れた昭和11年12月31日付書簡〔Ｄ－76〕等が注目される。また「表現」をめぐって木村素衛が田辺を批判した昭和14年10月13日付書簡〔Ｄ－117〕等も興味深い。さらにまた、田辺が柳田に向かって自説に触れた昭和15年５月７日付書簡〔Ｄ－4〕、あるいは高坂正顕の新著『歴史的世界』（岩波書店、昭和12年）に言及した木村素衛差出昭和12年11月17日付書簡〔Ｄ－125〕、及び務台差出昭和14年７月９日付書簡〔Ｄ－93〕なども、当時の西田周辺、あるいは京都学派内部の相互影響や全体としての思想的傾向等等を知るうえでも示唆に富む。

既述のように、本目録の（狭義に解せられた）範囲と趣旨にしたがって、今回はこの分類項目Ⅲの翻刻掲載は見送ったが、これはなるべく早期に実現したい。それにより、最近とみに関心の高まっている西田およびその後継者たちによる、いわゆる「京都学派」の人間群と思想運動の解明、具体的には西田哲学受容の過程とその特徴と、そこに析出され得る西田哲学の根本的立場とその射程についても、重要な寄与をなしうるはずである。

2．全集未収録書簡から―引用と解説―

学習院大学史料館収蔵の西田幾多郎・全集未収録書簡のうち、項目分類ⅠとⅡのなかから、内容的に注目に値すると思われる計４件を選び、それぞれについて全文を引用し、書簡成立背景、当時の事実関係、思想史的意義その他について若干の解説を試みる。

（１）西田幾多郎〔京都市田中飛鳥井町三二〕から高坂正顕〔東京市小石川区大塚町六八〕宛、昭和12年（1937）11月15日付、封書便箋３枚ペン書き〔消印左京〕〔元所有者：高坂時生氏〕〔Ａ－37〕

本文：

御手紙拝見いたしました　その後お変りも御座いませぬか　御健康いかゞです　又御令室も

御著「歴史的世界」は大変評判がよいので私もこの上なき喜に存じます　どうか層一層深く進んて（ママ）ゆかれんことをいのります　歴史的身体とかポイエシスといふ如き問題が歴史的なものの本質を掴むに先ず深く鋭く考ふべきでせう

私は人間的存在といふ題（ダイ）にて私の哲学の立場からドストエフスキーの様な世界を描いて見ようと思つてゐますがはじめはどうも旨くゆきさうもない

田辺君哲研十月号にて私の考にふれて居る所は何だかなさけなく思はれた

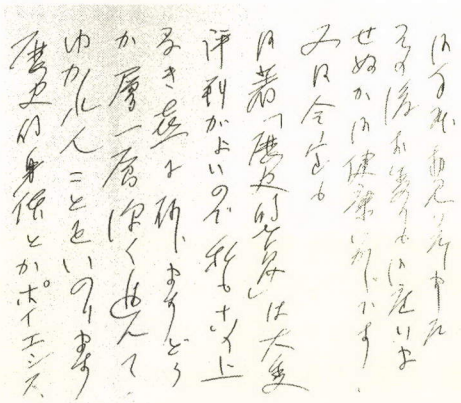
とにかく君の著書にてこれまて（ママ）我国に何もなかつた歴史哲学らしいものが現れたのだ

併し何處までも深く鋭く自己の考に對する問題を避けない様に何處まで問題を作り最もむつかしい問題を戦ふ様に

務台君にもよろしく

解説：

西田から高坂正顕宛封書、昭和12年11月15日付〔Ａ－37〕、部分



西田と高坂の関係　西田からの高坂宛書簡は計206件（全集に収録されているのは90件）。大正12年（1923）３月13日付（項目分類Ⅰのうち最も早期の書簡）から昭和20年５月19日付にいたるまで本資料群の見出される全時期に渡っている。すなわち高坂が京都帝大を卒業した年から西田逝去の19日前までの22年間に及ぶ。内容も本の注文、身内の件、鎌倉や京都へのそのつどの到着出発の予定・消息、進路の相談、他の弟子への連絡依頼、自宅への招待、西田自身の研究の現状、高坂の著作への（好意的）批評その他きわめて多岐にわたり、西田が高坂に全幅の信頼を置いていたことが窺える。一例を挙げると、昭和８年（1933）７月下旬鎌倉姥ヶ谷の新居を得た際にも、すでに同年７月14日、同28日、８月１日と矢継ぎ早に葉書〔いずれも全集未収録〕を出し、新居への道順を示し、高坂の訪問を重ねて促している。また昭和７年４月12日付葉書（消印聖護院）などのように、「昨夜は遅くなつて電車はいかゞでした　それに雨がふり出して帰路いかゞであつたかとおもひます」〔全集未収録〕と、前日夕来訪した高坂を気遣うためのものもある。また高坂はこの手紙の前年昭和11年（1936）４月東京文理科大学助教授（昭和15年まで）として上京していた。そして、こ

の頃次第に鎌倉滞在が長くなっていった西田との行き来を密にした（務台理作はさらにその前年昭和10年４月同じ東京文理科大学教授に着任していた）。西田は高坂をたいへんかわいがり、目をかけ、手紙も多く書いた。孫上田薫氏が昭和17年京都帝大哲学科に入学したとき、他の弟子たちにはとくに紹介しなかったが、高坂の所へだけは西田が自分で薫氏を連れて行った、と伝えられる。(4)

歴史哲学との取組み　さて、本書簡の全体を通じて西田は、高坂が昭和12年10月25日刊行したばかりの『歴史的世界―現象学的試論』に対して大きな喜びと賞賛、そして激励の気持ちを表明している。最初カント研究から出発した高坂（西哲叢書『カント』弘文堂、昭和14年刊は不滅の金字塔である）だが、金融恐慌、満州事変等の時局の急展開にも刺激され、歴史の問題との取組みを強める。そして昭和７年１月『思想』に論文「歴史的なるもの」を発表したのである。西田の反応が良かったことが高坂を励まし(5)（その前年昭和６年10月に西田の同志社における講演「永遠の今」を聞いた高坂は、自分が恩師とほぼ同じ歴史哲学を目指していることを知り、わが意を強くしていた)(6)。

西田の高坂宛書簡にも昭和11年（1936）頃から歴史や歴史哲学にかかわる内容が目立つようになる（例：昭和11年12月７日付葉書〔全集№1061〕、昭和12年３月11日付封書〔全集№1075〕）。西田自身も、すでに「歴史」（岩波講座『哲学』第１回、昭和６年11月）や「弁証法的一般者としての世界」（『哲学研究』第219, 220, 221号、昭和９年６，７，８月）を発表していたが、さらに昭和10年代には歴史哲学論文を次々と発表する。「世界の自己同一と連続」（『思想』第152, 153, 154号、昭和10年１，２，３月）、「種の生成的発展」（『思想』第182号、昭和12年７月）、「歴史的世界に於ての個物の立場」（『思想』第195, 196号、昭和13年８，９月）。柳田に宛てた同時期の書簡でも西田は歴史についての自らの見方を述べている（例えば昭和13年２月22日付、全集№1200）。西田は歴史哲学の根本に、身体やポイエシス（ポイエシスについても、西田は論文「ポイエシスとプラクシス」（『思想』第223号、昭和15年12月）を発表する）、あるいは形成作用を見定めているのであって、この点にまた高坂のさらなる注意を促している。高坂への本書簡は、昭和10年代初頭の本邦学界における、「歴史」への哲学者たちの共通した関心の高まりを表し、かつ西田やその弟子たちの問題関心の方向を窺わせる一級の資料である。

昭和10年（1935）からの10年間は、哲学と歴史とが最も接近した、日本では他に類を見ない時期であった。(7)和辻の『風土』（昭和10年）等にしてもこの波に属している。高坂哲学の（カント研究に続く）第二時期と西田の昭和10年代とは、歴史哲学との対決への一種の使命感にも似た関心を共有するといえよう。西田が本書簡中、自分も「ドストエフスキーの様な世界を描いて見ようと思う云々」と述べているが、高坂も後に自著のなかで「ドストエフスキー」に言及する。(8)昭和12年夏の西田は「弁証法的世界」としてのドストエフスキーへ殊の外傾倒していたらしく、それがまたさらに柳田や瀧澤などにも伝播してゆく。(9)これは一例に過ぎないが、このように自分のアイディアや構想を惜しげもなく弟子達に提示することによって、テーマや関心が共有され、そして一層深められてゆく経緯をも西田の書簡はよく表わしている。

西田の多彩な弟子達は、西田の著書、論文、講演、議論、書簡などを通じて、絶えず師の発想や概念を、それぞれの仕事のなかに採り込んで行ったし、西田自身もそれをまったく自然のこととし、

弟子たちに受容され、あるいは変容された自分の思想表現を通じてこれらを取り入れさらに自己理解を練り上げ、洗練させ深化させていった。西田と弟子たちのあいだのそのような自由自在な往復的、あるいは螺旋的ともいうべき相互影響関係はさながら「ネットワーク」とも、「工房」とも称せられよう。[10] またフッサールが標榜した「作業哲学」Arbeitsphilosophieとも通ずる部分があろう。

高坂正顕のこの『歴史的世界』に結晶する歴史哲学もまた西田の同じ時期の歴史哲学に積極的に影響され、鼓舞されている（もちろんそれは同書の独創性を減じるものではないが）。例えば、『歴史的世界』の「跋」における西田の「永遠の今の自己限定」や「時は非連続の連続である」というような言い方を、高坂は西田とほどんど共有している（例えば西田の上に掲げた昭和６年11月発表の論文「歴史」）。高坂はこの後も『歴史哲学と政治哲学』（弘文堂、昭和14年）、『神話』（弘文堂、昭和15年）、『象徴的人間』（弘文堂、昭和16年）、『民族の哲学』（岩波書店、昭和17年）、『歴史哲学序説』（岩波書店、昭和18年）と、彼の歴史哲学の考察を次々と発表する。

田辺との関係　さて本書簡の後半に、西田は田辺の批判を「何だかなさけなく思はれた」と述べている。ここで西田が指す田辺論文は、『哲学研究』第259号（昭和12年10月）掲載の「種の論理の意味を明にす」である。田辺の西田への批判はすでに昭和５年５月に発表した論文「西田先生の教えを仰ぐ」（『哲学研究』第170号）に始まるとされる。[11] 田辺は、西田の直観の立場が「静観諦視」の「宗教的」直観にならざるを得ぬとして批判する。この「種の論理の意味を明にす」においても、田辺は彼の弁証法の立場から、「「行為的直観」といふ概念は、其の意味で私には矛盾概念と思はれる」（第259号62頁）と切り込む。田辺によれば、「行為と直観は否定的に対立する」のであり、「行為は直観の否定せられる所に始めて起るのである」とされる。

「何だがなさけなく思う」と西田が心情を思わず吐露した相手である高坂は、昭和５年前後あたり、すなわち田辺が自らの「種の論理」の立場からマルクス主義とも取り組もうとしていた頃から、田辺哲学を（その「種の論理」を多としつつも）批判する。そしてむしろ西田的な「直観」を支持する立場を明らかにしていた。[12]「今日の田辺哲学は、現実弁証法、行為弁証法、絶対弁証法等々色々な名前で呼ばれ得る立場に立つものであるが、それは畢竟広義における弁証法の立場に立つものと言ってよいであろう。（中略）一言弁証法に対する私の態度を語っておくならば、私は弁証法の意義を認めると共に、それに制限を置きたいと考えるものなのである。（中略）弁証法は自らを否定して却って直観に転ずるのではないか」。[13]

とはいえ、高坂は西田のみならず、田辺にもその学恩に感謝の念を懐き続けた。『歴史的世界』の「跋」でも、西田の「永遠の今」を原点としつつ、同時にまた田辺の「種の論理」を歴史的世界を動かすものと見てこれを活かす旨を述べている。[14] 人望のあった高坂はまた田辺にも好感をもたれていたようである。[15]

（２）西田幾多郎〔神奈川県鎌倉市姥ヶ谷五四七〕から柳田謙十郎〔浦和市常磐町八ノ二高校官舎〕宛、昭和20年５月28日付、葉書、消印鎌倉〔元所有者：柳田節子氏〕〔D－13〕

本文：

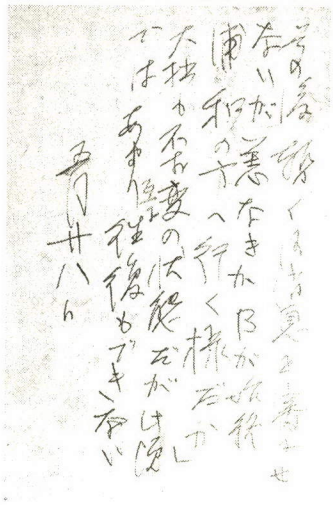
その後暫く御消息を審にせないが恙なきか　Bが始終浦和の方へ行く様だか（ママ）」大拙も不相変の状態

だが此頃ではあまり互に往復もできない

解説：

学習院大学史料館収蔵の西田差出柳田宛書簡計81件のうち、比較的多くの54件は全集に収録されている。とくに思想的内容を帯びた封書はほぼすべて収録されている。しかし身辺の事を記した短い葉書が資料として重要でないと断定することもまたできない。その意味で改めて注意すれば、上の葉書は西田が亡くなる10日前のものであり、少なくとも柳田への最終書簡である（全集収録分の書簡でも、この日付より後のものは2件しかない[16]）。さりげない文面のなかにも、柳田の消息に対する西田の気遣い、大拙の近況、戦況の深刻化がうかがえる。Bが誰であるかは、特定することはできない。

西田から柳田謙十郎宛葉書、昭和20年5月28日付〔D－13〕



田辺哲学への見方　柳田は西田・田辺論争に際しては、高坂同様、明確に西田の立場に立つ。その旨を表明した、柳田差出西田宛（鎌倉市姥ヶ谷）昭和15年8月29日付封書〔E－25〕も重要である。その中で柳田は、「田辺博士の、西田哲学からは当為といふものの道徳的意義が見られなくなるといふ批評は別に深く省みらるべきほどの重要さをもつたものではないと思ひます、先生の哲学が當為を無視した單なる直観の哲学ではなくて、むしろ當為の根柢を更に深く探求することによつてその歴史的現實的意義といふものを眞に具体化した哲学であることは、先生の御論文を忠實によむものの何人もが卒直に承認せざるを得ない明々白々な事實であると存じます　恐らくは田辺博士御自身もこの頃はよほど自己反省的になつて来てゐられるのではないかと思ひます、最近御目にかゝつた模様で何となくさういふ気がしてなりません」と書いている（同書簡の全文については、巻末の付録部における「翻刻」を参照）。

実践や倫理の問題　柳田謙十郎（1893～1983）は、中学教員などを経て、大正11年京都帝大哲学科撰科（倫理学）入学、同14年卒業。最初フィヒテ、現象学、シェーラーなどを遍歴した柳田がようやく「西田哲学に魂の故郷ともいうべきものを見出し得たのは1935年の頃」である。当時柳田は台北帝国大学助教授の職にあったが、昭和11年（1936）9月『台北帝国大学年報』第3輯に発表した「知と行」が西田の目にとまり、西田から手紙をもらっていた。翌昭和12年（1937）2月15日柳田は西田にはじめて鎌倉姥ケ谷で面会し、西田に「生涯における最大の恩師」を見出す。既に44歳であった柳田だが、以来「全身全霊をあげて傾倒した」[17]。柳田は『哲学論文集』第一～第五、『一般者の自覚的体系』、『無の自覚的限定』などの西田の諸著作について、抜粋をノートに丁寧に書写し、それに赤鉛筆で傍線を引きながら、「ひたすらに師の道を歩もうとした」。ただ、柳田が西田の弁証法理解には鼓舞されながら、その唯物論批判には或る物足りなさを既に当初から懐いていたらしいことは、「西田哲学ノート」と表記されたこの抜粋ノート群からも看取される[18]。

また柳田は昭和16年（1941）4月、それまで12年間勤めた台北帝国大学助教授を突然辞して京都に帰るが、高坂の世話で同じ月には高野山大学講師となる。昭和19年には浦和高等学校教授となり、関東に移る。本目録収載書簡の関わる時期（昭和10～20年）に属する著書としては『弁証法的世界

の倫理』（岩波書店、昭和14年）、『日本精神と世界精神』（弘文堂、昭和14年）、『行為的世界』（弘文堂、昭和15年）、『歴史的形成の倫理』（近藤書店、昭和18年）等がある。[19] 戦後柳田は西田哲学から距離をとるようになり、昭和25年唯物論的弁証法への立場変更を宣言したことや、その際京都の京都学派の面々と「まさつの感情が生じた」こと等が知られているが、[20] 本目録収載書簡該当年代（昭和20年５月まで）よりも後の事項であるので、本解説は立ち入らない。

昭和10年西田との交渉が始まった当初から、柳田の関心は、他の弟子たちに較べ、明らかに実践、道徳、行為といった問題系に集中していた。西田の特徴の一つとして、彼が弟子達の固有な関心を受けとめ、それぞれの方向へ伸ばすよう促したこと、しかしまたそれでいてそれらは西田の同じ哲学的モティーフから奏でられる変奏曲でもあった、という点が挙げられる。例えば三宅剛一には数理哲学を、高坂には歴史哲学をというように。柳田に対しても西田は、「実践」をテーマとする自分の道を行くように勧めている。歴史的世界の論理的構造についても考える必要はあろうが、「君には君にそれでよい所があると思ふ」。しかし同時に、西田は柳田がともすれば「体験の叙述」に傾きがちな点を注意し、「論弁的に証明するという様に」努力し、「自分で自分に対し批評的であることが必要だ」と諭してもいる。[21] このように弟子のテーマや方法の個性や特徴を誉め、その特色をむしろ生かす方向への研究を求めると同時に、またそれぞれの欠点や短所を的確に指摘し、可能な改善を促すという、教育者としても優れた西田の一面を書簡はよく伝え得ているように思われる。

（３）瀧澤克己〔山口市樋ノ口〕から西田幾多郎〔神奈川県鎌倉町姥ヶ谷〕宛、昭和15年10月４日付、封書、便箋４枚、ペン書〔元所有者：上田久氏〕〔Ｅ－24〕

本文：

九月三十日附けの御便り　まことに有難う存じました。東京宛の御手紙も、廻送されてまゐりまして、たしかに拝見いたしました。

“日本評論”は始めから差上げるつもりでしたのに、そのことをはつきり書きませんでしたゝめ、却つて御手數をおかけして　恐れ入りました。本日早速　別便にて　お送りいたしますから　何卒御納め下さいまし。

“実践哲学序論”の別刷が出来ましたとのこと、既に拝読はいたしましたが、お序での拆一部お頒け頂けますれば幸せに存じます。たゞあの辺は局にも遠いことですし、わざわざお送り願ふのも大変ですから、この次にお目にかゝります拆にでも結構でございます。

田辺博士の思想につきましては、最近の“厂史的現實”についての御講演など拝讀いたしましても私にはどうも事實の觀察や分析が足りない—根本的には意識からの物の見方を脱しない—やうに思はれてなりません。あれでは、哲学的には固より、社會科学的（或いは一般に科学的）にも眞に人間の意志から獨立な現實的法則といふものは結局理解出来ないのではないでせうか。博士は人間の意志から独立な法則と言ひますと　すぐ神秘的な超越主義とか機械的な因果觀とか　いふものと同じに考へてしまはれるやうですが、そこの区別をはつきりさせませんと、却つて、政治的意志の経済的法則に対する支配—国家学・政治学の経済学に対する優位—といふやうな誤つた思想に陥る危険があるのではないかと存じます。この場合にも博士は無論政治と経済との“辯証法的な相互限定”

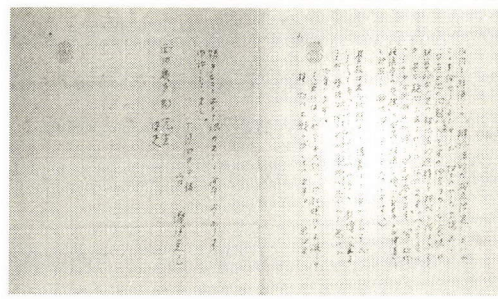
といふことを仰せられるでせうが、博士のやうな立場から“日本文化の問題”その他で先生の仰言るやうな意味の現實的な厂史の辯証法的過程を理解し得るかどうか、甚だ疑問であるやうに存じます。（この点についての戸田武雄の批評―「日本評論」七月号、「シュパン　現代経済学の危機」の“國家と経済”の項（三笠書房　戸田譯著）―と対照して興味深いことだと存じます。）

學校は未だ試験中で講義は十一日からですがいろいろと考えさせられることのみ多く　教壇に登ることが、時拆は大げさな言ひ方ですけれども、何ですか屠所に曳かれる思ひで御座います。
先生にはくれぐれお大切に、御壯健にてお過しの程、切にお願ひ申し上げます。　思はず勝手なことばかり認めまして何卒あしからず御許し下さいまし。

解説：

本収蔵資料中には11件しかない西田宛書簡の一。上田久氏から学習院に寄贈された。

瀧澤克己から西田宛封書、昭和15年10月４日付〔Ｅ－24〕、部分



瀧澤克己（明治42年（1909）～昭和59年（1984））は昭和６年（1931）九州帝国大学哲学科卒。昭和７年８月頃から西田哲学の研究を開始する。昭和８年８月瀧澤が『思想』135号に発表した論文「一般概念と個物―西田哲学の発展の一齣―」を西田は高く評価し、早速同年８月22日付の手紙〔全集№782〕をしかも西田のほうから瀧澤に出した。[22] こうして両者の交流が始まった。ドイツ留学にあたっても瀧澤は西田の示唆により、カール・バルトに弁証法神学を学んだ。昭和11年には瀧澤の『西田哲学の根本問題』が刀江書院から出た。昭和13年（1938）から昭和22年まで山口高等商業学校教授、昭和25年には九州大学文学部哲学科教授。西田とバルトにならって瀧澤は、自己成立の根底を自覚的に問い、生死の事実によって限界づけられている人間存在を「絶対矛盾的自己同一」や「インマヌエル」として捉えていた。

上田薫氏によれば、西田は瀧澤克己を評価していたという。[23] 昭和12年瀧澤が、山口への赴任が決まったことを西田に報告したとき、西田は同年３月14日付書簡のなかで「周囲に刺激のないのは遺憾に思いますが又、静かに読書静思大に自らを養うには適するならんと存じます。山口は四十年前旧知の地、今いかになり居るか懐旧の念に堪えず」[24]と、この少壮のキリスト教神学者を激励している。また戦局悪化の昭和19年７月20日付書簡では、「できない中にも御勉強、他日の用に供せられんこと切望の至りに堪えませぬ。哲学の方にても今後何とかして日本に雄大な日本哲学が発展せねばならぬと存じます」と書き送っている。[25]

「実践哲学序論」は西田が昭和15年岩波講座『倫理学』に発表したものである。キルケゴール『死に至る病』の「パトス的」な深い自己洞察に触発された西田は、「絶対矛盾的自己同一」としての自己の、その実存的な性格―すなわち意志や行為―に論及している。瀧澤は早速これを読んでいる。田辺の弁証法こそ「事実の観察や分析が足りない」とか、「根本的には意識からの物の見方を脱しない」と結論した瀧澤のこの昭和15年10月４日付書簡〔Ｅ－24〕は、「歴史」、「実践」をいよ

いよ重視し、とりわけ「行為的直観」の概念の構築に一応の見通しをつけた西田にとって、好感できるものであったであろう（その４年前の昭和11年３月11日付書簡（全集№1010）では西田はまだ瀧澤に対し、「今少し『行為的直観』という如きことを突きこんで考えています」と書いていた）。

（４）鈴木大拙から西田幾多郎宛　昭和16年３月15日付、封書、便箋１枚、毛筆〔Ａ－34－２〕

西田から高坂正顕宛昭和16年３月15日付の封書中に同封されていたもの。それゆえ資料番号はＡ－34－２とする。

本文：

今日は天気もよし、御窺ひしたいと思へども、碧岩の校正が重なつて居て失礼致候、先日高野山大学の学長さんが来て、君のお弟子中（出来るなら高坂さん）にて、高野へ来て四十時間ほど、西田哲学を講じてくれぬかとの事に候、即ち四月五月六月九月十、十一、十二月のうち毎月二回で六時間づゝ、総計四十時御願ひ出来れば仕合との事に候、君から先方へ申やつて下さるれば結構千万との事に候、御迷惑ながら、右の次第、高坂さんへ御傳下されまいるや、何だか持つてまわつた咄に候も、よろしく願上候、

三四日中に何れ御窺しますが、当用まで不取敢　早々

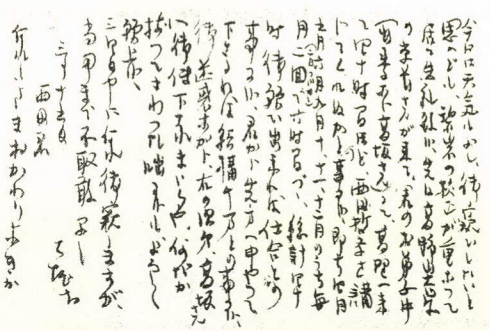
三月十五日　　大拙拝

西田君

何れもさまおかわりなきか

解説：

鈴木大拙から西田宛封書、昭和16年３月15日付〔Ａ－34－２〕



本書簡は、西田宛の書簡であるから本来は項目分類IIに属すはずであるが、西田から高坂宛同日付（昭和16年３月15日）封書に同封されており、内容的にも同じ案件（高野山大学での西田哲学の講義を高坂に依頼する件）に関わるものであるところから、資料番号はこの西田幾多郎〔鎌倉〕から高坂正顕〔京都市左京区下鴨泉川町五三〕宛書簡（封書、便箋３枚、ペン書）〔Ａ－34－１〕〔全集未収録〕と同じとし、枝番号２を付し、Ａ－34－２とした。

書簡〔Ａ－34－１〕の全文を以下に引く：

鈴木大拙からかういふ手紙をよこしたので困る、君には御迷惑のことゝ思ふ、併し一度御耳に入れないで返事する譯にもゆかぬのでとにかく御紹介だけ申上げる　若しお願に上つたら御隨意に御返事下さい

柳田が台湾をやめて京都に居ると云ふが君が御迷惑なら彼が如何かであらう

河合の子供入学できたよし　それはよかつた　私の孫も今度武蔵へ入つた

もうそろそろ帰りたいが　外彦の家族がこちらへ轉宅するのでどうも今月一杯はゐなくてはならない

高野山大学講義の依頼者が大拙であり、それに関わる用件だからといって、西田が大拙からの私信を同封して高坂に送るのは、西田が高坂をきわめて信用している証左でもあろう。高坂は、本書簡の前年昭和15年京都帝国大学教授に転任となり、東京から京都に移転している。本書簡のまもなく、昭和16年５月死去した九鬼周造に代わって、翌17年４月より西洋近世哲学史講座を担当する。ところで大拙からのこの依頼を高坂は承知したのであろうか。高坂は依頼を受けたものの、（あるいは柳田を気遣ってか）辞退したようであり、実際講義を担当したのは柳田であった。５日後の昭和16年３月20日付西田から高坂宛葉書〔Ｂ－120〕〔全集未収録〕には、「柳田君の事難有う、大拙の方へさう返事致します」とある。柳田は自らのいわば実存的決断から昭和16年４月突然台湾帝国大学助教授を辞し、生計のあてもないまま京都に引き上げるが、たちまちのうちに高坂からは高野山大学講師、大拙からは大谷大学教授の口を世話されたのである。いずれにせよ西田は、自分の哲学を解説する講師として、高坂をベストと見なし、また柳田も適任と見なしていると言えよう。ただし、西田は自分の立場の単なる代弁者を望んでいたわけではない。柳田にも「西田哲学などと云っても私の所有物ではないのであるから取るべき所があらば御取り下さってよし、捨つべき所は御捨て下さってよし　間違った所には十分御批難下さってよし　全然尊兄の独自な自由の立場からお願い致したい　それは西田哲学ではなく柳田哲学のつもりでおやりになる様望ましいと思ふので御座います」〔Ｄ－167〕[26]とまで書き送っていた。

左より西谷啓治、高坂正顕、高坂時生、高山岩男、鈴木大拙
鈴木成高、三宅剛一、下村寅太郎、鎌倉松ヶ岡文庫にて
昭和41年（1966）（『妙時集』より）

３．総括―全集未収録書簡の性格と意義をめぐって

それでは、項目分類Ｉに属する146件は、何故全集に収録されなかったのだろうか。既述のように、高坂家、柳田家から全集編集作業に提供された西田差出書簡の束は、当時ほぼ全部が閲覧されたものと推される。では、収録されなかった書簡は、何故収録せずと決定されたのであろうか。全集の異なる四つの版における収録書簡数については本解説の註１に示したとおりだが、例えば昭和41年（1966）の全集18、19巻増補改訂第２版の編集作業では、新たに600通以上を収集したが、その際も今回のわれわれの目録に収められている全集未収録書簡は依然収録されなかった。ちなみにその際収録された600余通の内最多のものは、田辺元（1885－1962）宛書簡の204通である。同じ増補改訂第２版全集19巻末の下村寅太郎による「後記」によれば、「重要な内容の期待される書簡で、その受信者が物故されたため散失したり、戦災で焼失したり、或はその他で入手し得なかったものが相当ある、という。これら以外にも調査の及ばなかったために洩れたものがあると思われる。なお本巻に収録したものも我々が収集し得たものの全部ではなく、若干の選択がなされている。余りに私的なもの、トリヴィアルなものなどは除外されている」（全集19巻（1966）、735頁）。しかしながら今回のわれわれの調査で明らかとなったように、高坂時生氏を出所とする高坂正顕宛書簡206

件中の未収録書簡のなかには、本解説 2 －（1）で引用したA－37のように、「あまりに私的」で「トリヴィアル」であるどころか、歴史、社会、行為など京都学派にとってのみならず当時日本の思想界に共通の問題に言及し、かつ思想史として西田、高坂、柳田、木村、大拙等の相互関係を考察するためにも重要である書簡が含まれていたのである。全集編集者は、A、B、D等の書簡束のなかで、A－37も閲読し、筆写も行なったものと推される。しかし収録にまで至らなかったのは、高坂歴史哲学への西田の破格なまでの好意的表明に配慮してのことか、あるいは高坂へ、西田が身内に漏らす本音であるかのように述べられた対田辺批判を憚ってのことかもしれない。田辺が没したのは、周知の如く昭和37年（1962）であり、だからこそ昭和41年の増補改訂第2版には田辺宛207件が補遺の中心として収録されたのであった。しかし高坂や柳田宛の書簡群が再吟味されることはもはや無かったようだ。安倍能成を除いては直接の西田・田辺に最も近い弟子であった編集者達のあいだには、西田・田辺関係にはできれば触れたくない、という一般的な気分があったとも伝えられる。[27] また全集第1版、2版の編まれた第2次大戦直後から昭和30年前後を経て40年代に至る実存主義やマルクス主義の優勢な時代にあって、あるいは哲学と歴史が再び分裂した戦後学界の風潮のなかで、歴史哲学をめぐる西田と高坂の共同的思索の経緯や、あるいはマルクス主義転向以前の柳田の西田への絶対的な「随順の態度」[28]を示しうるような書簡資料は、このときそれほど重要視されなかったのかもしれない。しかしいずれも推測の域を出ず、未収録の理由は不明である。

また項目分類Ⅱに配した西田宛書簡は、数としては僅か11件でありながら、本解説 2 －（3）で引用した瀧澤克己差出書簡〔E－24〕や、（2）の中で一部を引用した柳田差出書簡〔E－25〕ように、西田・田辺論争が何であり、それがどのように〔広義の〕京都学派の若き後継者たちに思想として受けとめられていったかを示すドキュメントである。とくに京都帝大定年（昭和3年）そして鎌倉生活開始（昭和7年、姥ヶ谷昭和8年7月）以降の西田の、「行為的直観」、「絶対矛盾的自己同一」、「場所」などの思想的発想に共鳴し、共有した知性集団は、狭い意味での“京都学派”にとどまらなかった。少なくとも西田にとって地域、組織、人脈等を広く自在に越境した知的サークルであった。これらの書簡に明示されているような瀧澤や柳田の親西田哲学・反田辺哲学の立場表明や、また彼らへの師西田の学問的・個人的信頼は西田哲学の受容と射程を改めて考える上で示唆的であろう。

またそのような意味でも、今回は資料目録の主題の範囲を超えるために見送られた項目分類Ⅲに属する関係者相互の書簡121件の翻刻が待たれる。とくに師西田との往復書簡に並行して、務台[29]、田辺、大拙、木村素衛等とも縦横に書簡を交わした柳田の〔昭和10年から西田の逝去した昭和20年までの〕位置・役割とその思想史的意義について照明が当てられるであろう。そのことは西田および西田哲学と、所謂京都学派との関係を再考し、そして京都学派そのものの内包と外延を再測定することに資するはずである。いま誤解を恐れず見通しをいえば、西田は地域・人脈を横断し縦断しあるいは越境し、「京都学派」の外延を自在に開いていったが、まさにその無尽ともいえる「開け」の只中で西田の哲学的発想は深化され、その精度と射程を高め、求心力を形成したのである。

昭和7年西田は4月16日から11月3日までを鎌倉・扇ヶ谷の借家で過ごし、さらに翌8年7月に姥ヶ谷に自宅を入手した。以降、毎年春夏秋に鎌倉に住むようになり、京都と鎌倉を行き来する生

活が始まったが、そのことは東京やその近辺在住の京都帝大卒業生や金沢三三塾の卒業生にとっては朗報だった、と遊佐道子氏は言う。[30] 実際、初年から三木、戸坂、谷川、三宅、務台が来宅している。[31] 東京各校での講演も増える。[32] また四高関係者や学習院関係者、そしてさらにこれらを通じて、広く哲学、学問、政治、軍事関係者とも関わって行く。例えば、昭和8年3月には、鎌倉滞在中の西田は、学習院から京都帝大法学部に進み、当時貴族院副議長だった近衛文麿宅に呼ばれ、木戸幸一、原田熊雄、織田信恒の学習院卒業生と会食した。[33]

以上の諸点を確認したとき、学習院大学史料館収蔵資料のその少なからぬ部分は、「学習院と西田」、ないし「東京における西田」という視点からの研究（歴史研究、思想史研究）が、西田哲学そのものの広がりと深まりをあらためて考察するためにも、今後生産的で有り得るということを示していると思われる。

註

（1）『西田幾多郎全集』は現在まで岩波書店から四版を重ねているが、書簡部分（初版：別巻第5、6巻、第2版以降：第18、19巻）は版毎に相当数の書簡が新たに追録されている。その過程は以下の通りに整理される：

西田幾多郎全集　第1版　1947年（昭和22）（書簡部分1953年）最終書簡№2230（補遺を含む）
〃　増補改訂　第2版　1965年（書簡部分1966年）最終書簡№2650
〃　増補改訂　第3版　1978～80年（書簡部分1980年）最終書簡№2716
〃　増補改訂　第4版　1987～89年（書簡部分1989年）最終書簡№2855

学習院大学史料館収蔵の西田差出全集未収録書簡146件は、最も後に出た増補改訂第4版においても未収録のままである。

（2）西田差出務台宛昭和12年11月22日付封書〔全集№1168〕：「田邊君の議論は精密だが抽象的にて何だかいつまでもカント認識論の立場をはなれないで歴史的世界といふものに入ることはできまいと思ひます。……十月号の私の考えに対する批評の如き何だか情けない様な感がいたします」。A－37、すなわち高坂宛昭和12年11月15日付封書（全集未収録）にも、「田辺君哲研十月号にて私の考えにふれて居る所は何だかなさけなく思はれた」とある。

（3）柳田謙十郎『わが思想の遍歴』（創文社、1951年）、122～123頁。

（4）上田薫氏御自身の証言による（2001年7月16日学習院大学史料館第2回館内研究会）。賜った多くの貴重な御教示に御礼申し上げる。

（5）高坂節三『昭和の宿命を見つめた眼　父・高坂正顕と兄・高坂正堯』（PHP研究所、2000年12月）、67頁以下

（6）高坂節三、前掲書、103頁以下。

（7）鈴木成高「『歴史的世界』とその前後」（『高坂正顕著作集』第1巻「歴史哲学」（理想社、1964年1月）、月報）。

（8）高坂正顕『歴史的世界』（『高坂正顕著作集』第1巻）、342頁。

（9）柳田謙十郎宛昭和12年10月24日付書簡〔D－157〕〔全集№1158〕、瀧澤克己宛同年11月19日付書簡〔全集№1167〕。

（10）竹田篤司『物語「京都学派」』（中央公論新社、2001年）、281頁以下、岩城見一編『木村素衛　美のプラクシス』（燈影舎、2000年）、259頁以下参照。

（11）遊佐道子『伝記　西田幾多郎』（『西田哲学選集』別巻1（燈影舎、1998年））、353頁以下。

（12）高坂節三、前掲書、105頁参照。

(13) 高坂正顕「田辺哲学とマルクス主義」(西谷、高坂、高山、下村他『田辺哲学とは』(燈影舎、1991年))、49頁。
(14)『高坂正顕著作集』第1巻、261～268頁。
(15) 西田差出高坂宛昭和12年4月2日付書簡〔A－17〕〔全集№1087〕参照。上田薫氏の証言(2001年7月)にもよる。
(16) 下村寅太郎宛昭和20年5月30日付書簡〔全集№2209〕、布川角左衛門宛同年5月31日付〔全集№2210〕。
(17) 柳田、前掲書114～123頁。
(18) 小田原市立図書館柳田文庫にて、調査を2000年10月11日実施した。
(19) この他にも、柳田は昭和15年4月には「日本思想の現在及び将来」を世界精神史講座『日本思想』(理想社出版部)、同年6～8月に「行為的基体」を『哲学研究』第291～293号に発表。
(20) 柳田、前掲書200頁以下、『柳田謙十郎著作集』6(創文社、1967年)「序」。
(21) 西田差出柳田宛昭和13年2月22日付、及び同年8月14日付書簡〔D－160, D－190〕〔全集№1200、1262〕。
(22) 西田差出瀧澤宛昭和8年8月22日付書簡〔全集№782〕「啓　未だお目にかかった事もないのに突然手紙をさし上げることを御許し下さいませ　……私はこれまでこれ位よく私の考えをつかんでくれた人がいないので大なる喜びを感じました　はじめて一知己を得たようにおもひました……」。
(23) 上田薫氏の証言による。
(24) 全集№1079。
(25) 遊佐、前掲書、105、474頁。
(26) 西田差出柳田宛昭和14年2月9日付書簡〔D－167〕〔全集№1317〕。
(27) 上田薫氏の証言に基づく。
(28) 柳田、前掲書123頁。
(29) 務台については、戦後の所謂「第三ヒューマニズム」問題が知られているが、本学習院大学史料館収蔵資料群の属する時期の範囲外である。
(30) 遊佐、前掲書、394頁以下。
(31) 例えば、西田差出高坂宛昭和7年7月21日付書簡〔A－9〕〔全集№741〕参照。
(32) 例えば、昭和7年6月4日法政大、同8年10月3日～7日慶應、同9年2月22日日本神学校、10月1日～3日文理大学。昭和13年9月20日には学習院で講演した。遊佐、前掲書、年譜。
(33) 遊佐、前掲書、400頁。

学習院 西田幾多郎博士記念館（寸心荘）について

岡　野　　浩

1．学習院 寸心荘とは

鎌倉市稲村ガ崎３の10の１（かつての神奈川県鎌倉町外極楽寺村字姥ヶ谷547番地）、江の電稲村ガ崎駅から江ノ島方向に進むことおよそ五分、海沿いの国道134号線から山側にほんの二百メートルばかり入った谷戸奥の高台に、今もひっそりと建つ一軒の日本家屋がある。

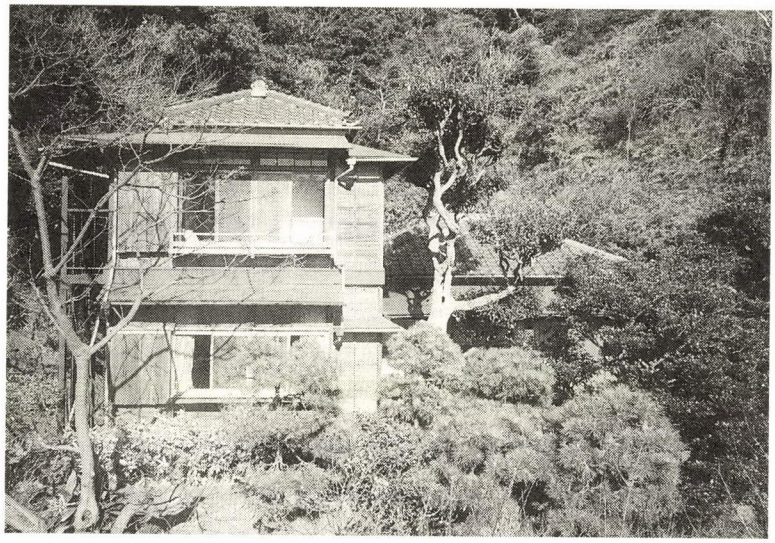
木造瓦葺き一部二階建、敷地面積約二百二坪、松、椎、もっこく、そして梅等の木々に囲まれ、二階南側窓からは相模湾を隔てて三浦半島を望むこの家は、哲学者西田幾多郎が晩年、特に冬と夏とを過ごし、昭和20年（1945）６月７日、七十五年に渉る生涯を閉じた家である。この建物が「故西田幾多郎博士の文化的偉業を記念し、かつ学習院の教育研究、文化施設として使用すること」を目的に、数ある校外施設の一つに加えられ「学習院 西田幾多郎博士記念館（寸心荘）」として開館されたのは、西田没後三十二年、昭和52年（1977）春のことである。

2．西田幾多郎の鎌倉の家

昭和３年（1928）、親族の一人に宛てた手紙に「～鵠沼辺りか或は鎌倉か何処か東京近在の閑静な所に住んで見たいと思います。静の健康などにもよかろうから静でもつれて極静な生活を送ってみたいと思います。」（全集書簡集№484）とあるように、西田は京都帝国大学を定年退職（昭和３年８月）する頃から、家族と共に気候温暖で東京にも近い湘南地方に移り住み、静かな暮らしの中で著述に専念したいと考えるようになっていた。知友、親族を頼みしきりに周旋を依頼した結果、この年の冬には鎌倉町乱橋材木座368番地に仮寓を得て、以来毎年冬と夏とを鎌倉で過ごすことになる。もともとの候補地として考えられていたのは鵠沼のようであったが、四ヶ月に及ぶ滞在によって、鎌倉の地は西田にとって、何か「無限なるもの」の動いている海と、三方を取り囲むように連なる山々との豊かな自然に加えて、その「～骨肉相疑い、同族相戮し、猫額の地に人間の罪悪の歴史が集められて居るが如き感がする」（「鎌倉雑詠」の詞書きより）歴史的風土においても、強く心引かれる生涯の地となっていったようである。また鎌倉は、鈴木大拙、堀維孝など多くの知友の暮らす地でもあり、彼等との交流が可能であることも西田がこの地を選んだ大きな理由であろう。その後数年は、円覚寺如意庵内楽々庵、同黄梅院、同正傳庵、扇ヶ谷要山435番地の家、津田塾別荘等、市内各所に滞在場所を求めた西田が、近衛文麿、岩波茂雄らのはからいで極楽寺村字姥ヶ谷547番地の家（現在の学習院 寸心荘）を得たのは昭和８年（1933）７月のことである。

この家の当時の間取りは、南向きの八畳、六畳と四・五畳の納戸、三畳の女中部屋、そして台所と風呂場の平屋建てで、裏山の頂には離屋の茶室（現在は遺構を留めるのみ）をも備えた誠に風雅なものであった。当初はこの離屋を好んで書斎として使っていた西田も、松の根や草の生い茂る急

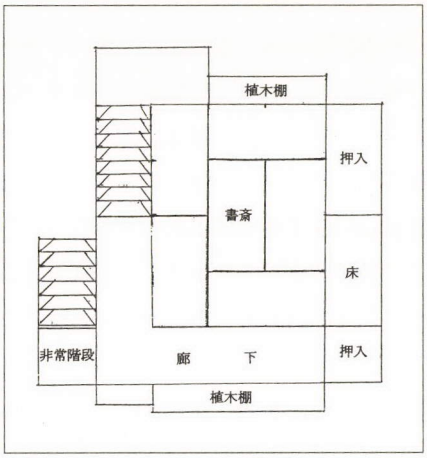
現在の寸心荘



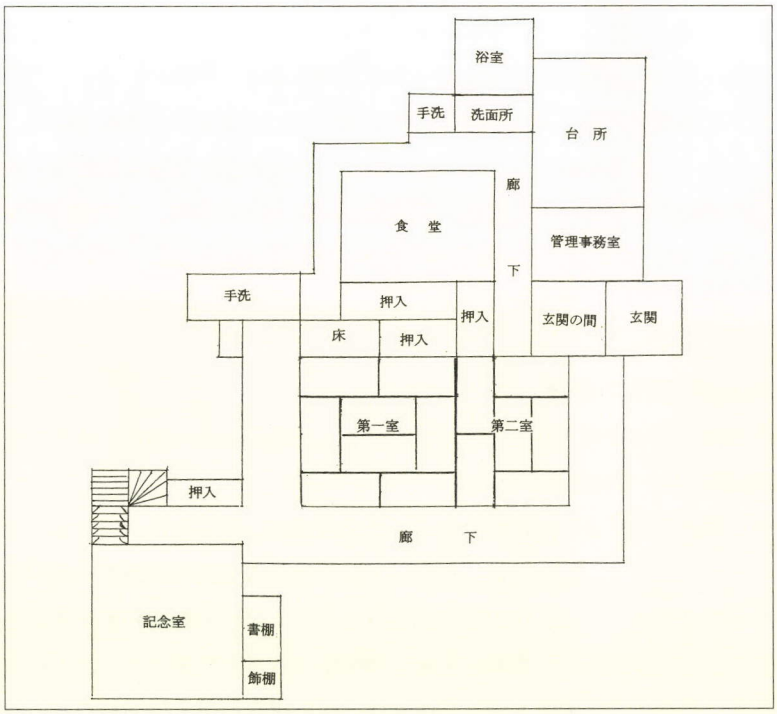
（正　面）

（裏　側）

寸心荘平面図



二階（記念室上部）



一　階

坂の上り下りにはさすがに閉口したようで、この年の秋には母屋の西側に現存する二階建部分を増築（施工は、当地大工職 平井藤三郎）、二階を寝室兼書斎として、一階を応接室として使用するようになった。またこの地は奇しくも、昭和６年（1931）に夫人となった山田琴と始めて引き合わされた稲村ガ崎音無川ほとりの津田塾別荘から、僅か山一つ隔てた所であった。

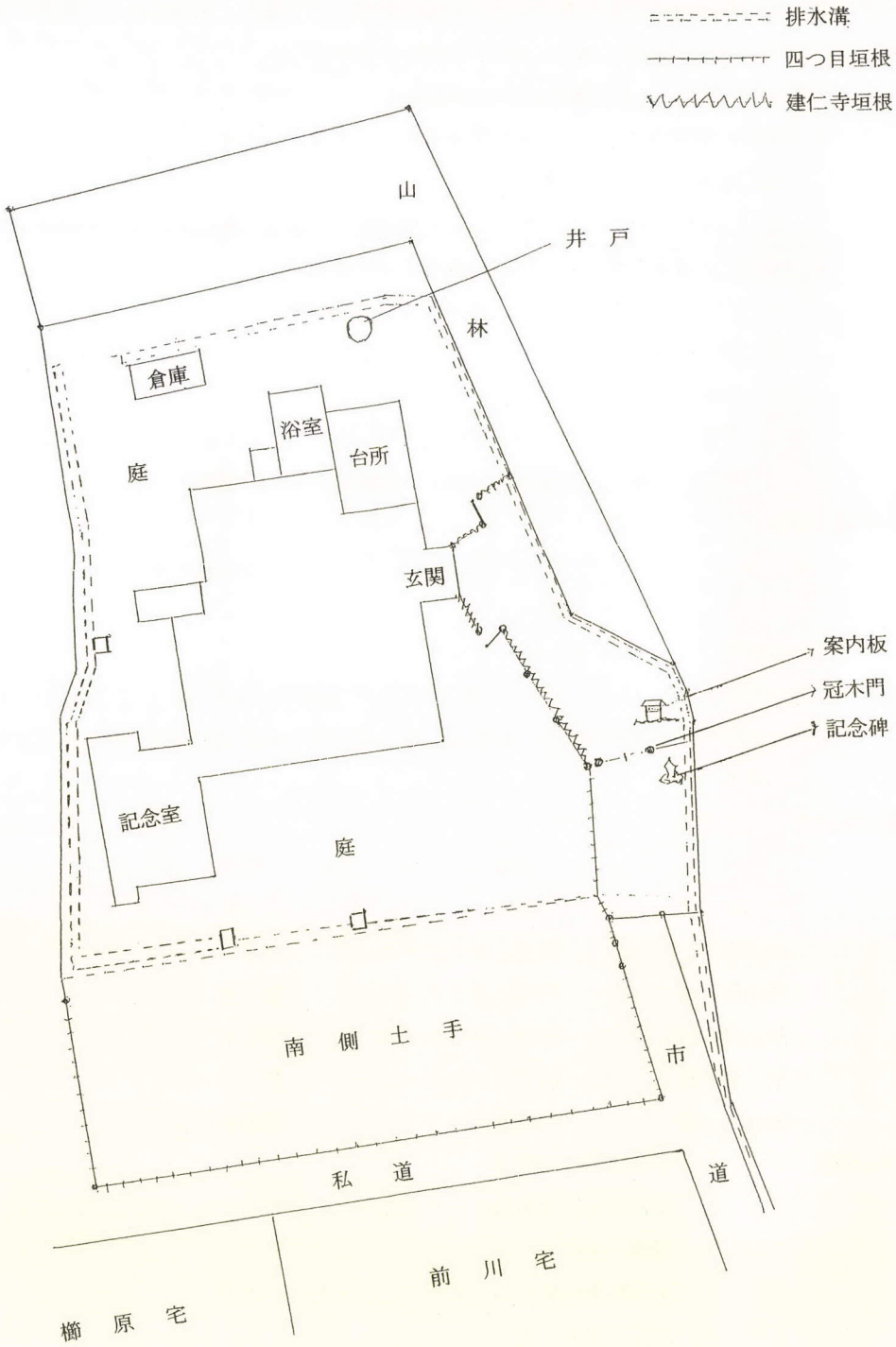
この「鎌倉の家」での西田の暮らしは、この地の気候風土のためか、厳しき中にもどこか伸びやかで、ゆったりとしたものであったようである。毎日、朝の内に四百字詰め原稿用紙一～二枚の仕事をし、午後は訪問客を迎え歓談するか、付近を気の向くままに散歩するのが常であり、時には七里ヶ浜から江ノ島、あるいは鎌倉山にまで足を伸ばしている。

昭和８年（1933）に西田がこの地にやってきてから、昭和20年（1945）６月に没するまで、この家には各界、各分野、実に様々な人々が訪れている。当時の日記をたよりに主な訪問客をあげてみると、稲村ガ崎に別荘を持っていた前出の岩波茂雄をはじめ、友人の鈴木大拙、堀維孝、また三木清、務台理作、三宅剛一、高坂正顕、高山岩男、西谷啓治、下村寅太郎等の京大時代の高弟達、和辻哲郎、九鬼周造、谷川徹三等の哲学者、作家の安成三郎、評論家の唐木順三、小林秀雄、或は画家の有島生馬、政界からは学習院出身の近衛文麿、細川護貞等、まさに絢爛たるものがある。

西田は、若干の例外を除き毎年決まったように、１月20日頃には鎌倉に移り、４月上旬に京都に戻り、また７月10日頃には鎌倉に移り、10月上旬に京都に戻るという暮らしをほぼ十年余り続ける中で『哲学の根本問題』［昭和８年（1933）］をはじめ多くの著作を世に出していった。しかしこうした鎌倉と京都を往復する暮らしも、昭和19年（1944）５月から６月にかけての帰洛を最後に、それ以降は本土空襲に伴う交通機関の悪化によって不可能となる。戦局がいよいよ悪化し、横須賀に海軍基地をひかえた相模湾に敵前上陸の恐れも囁かれるという緊迫した状況の中で、西田はあくまでこの地に踏み止まって仕事を続けようとしていた。しかし周囲の熱心な懇願をいれ信州への疎開を決意した矢先の昭和20年（1945）５月末、突然倒れ、６月７日未明、この鎌倉の家の一階六畳間（現在の寸心荘、第二室）で琴夫人と六女の梅子のみに見守られて永眠、その七十五年に渉る波乱の生涯を閉じることとなったのである。

３．学習院 寸心荘 誕生の経緯

西田幾多郎亡き後、この鎌倉の家を守っていた琴夫人が昭和48年（1973）４月に死去（享年八十九歳）、以後数年間は夫人の秘書兼お世話係として長年同居していた橋本享子氏がこの家に居住、管理していたが、同氏の高齢に加え建物自体の老朽化も進み、西田家においてもこの建物の維持が大きな問題となった。そこで、昭和51年（1976）７月、西田幾多郎令孫幾久彦氏が学習院大学旧文政学部第一期卒業生であり、また、西田幾多郎自身も生前学習院教授を努めた経歴を持つことから、同幾久彦氏より、西田幾多郎門下で当時学習院大学文学部哲学科教授であった下村寅太郎氏を介して、同哲学科加藤泰義教授（学習院大学旧文政学部で西田幾久彦氏とは同期であった）にこの建物を寄贈したいとの申し入れがなされた。これを受けて学習院では、科長会議等での説明、審議を経て受諾の方向で諸手続きを開始し、学習院理事会・評議委員会において受け入れ（不動産取得）が承認された。昭和51年（1976）10月18日に学習院顧問弁護士 河村卓哉氏を代理人として、西田幾


排水溝
四つ目垣根
建仁寺垣根
山
井戸
林
倉庫
浴室
台所
庭
玄関
案内板
冠木門
記念碑
記念室
庭
南側土手
市
私道
道
前川宅
櫛原宅

寸心荘敷地図

久彦氏と学校法人学習院との間で借地権付き建物寄付契約が、また、共保土地株式会社と学校法人学習院との間で、同地の土地貸借契約がそれぞれ成立することとなった。同年11月17日の科長会議において当時の教研審議室長（文学部哲学科加藤泰義教授）より提出、承認された「旧西田幾多郎邸 管理・使用に関する基本方針（案）」は以下の通りである。

名称　　学習院 寸心荘　－西田幾多郎博士記念館－

目的　　1．同所を思索の場とした故西田幾多郎博士の偉業を記念する。

　　1）記念館全般の保存維持

　　2）西田幾多郎博士の史料ならびに関係史料の収集・保存およびその調査・研究

　　2．学習院の研究教育ならびに文化施設として使用する。

　　1）学習院の教職員の研究、共同研究および研修会

　　2）学習院専任教員による学習院大学学生、大学院学生および女子短期大学学生のためのゼミナール実施

　　3）学習院専任教員による学習院高等科、女子高等科、中等科、女子中等科生徒、初等科児童、幼稚園園児に対する校外教育活動の実施

運営・組織　館長　　1名

　　副館長　　2名（内1名は経理部長、1名は当分の間教研審議室長）

　　事務主任　　1名　管理人

　　事務嘱託　　1名　賄い等

事務分担　　目的中1－1）、2－1）、2）、3）については経理部が担当、1－2）については当分の間教研審議室が担当。ただし、史料保存等の業務は大学図書館に委託することが出来る。

各部屋の用途ならびに呼称

	用途	呼称
一階洋間八畳	記念室	記念室
二階六畳	研究、ゼミナール	書斎
一階南側八畳	研究、ゼミナール	第一室
一階南側六畳	研究、ゼミナール	第二室
一階北側六畳	研究、ゼミナール	第三室
一階北側三畳	管理室	管理事務室

使用者の範囲　　1．学習院専任教職員

　　2．学習院専任教職員の行うゼミナールに参加する大学、大学院学生、女子短期大学生

　　3．学習院専任教員の引率する生徒・児童・園児

　　4．館長の認めた者

使用条件　　1．学習院専任教職員が各自の研究、共同の研究、および研修会等を行う場合

2．学習院専任教職員が責任者となって学校関係者その他と共同研究を行う場合

3．学習院が定めた学事日程により使用する場合

4．学習院の設置する学校のゼミナールその他教育課程の一部もしくは、それに準じて使用する場合

5．その他館長が特に許可した場合

使用申し込み手続き　管理課へ申し込み、所要手続きをとる
（小人数の場合、賄可能、宿泊可能）

使用目的の制限　1．楽器類の持ち込み禁止（近隣の迷惑になるような騒音を禁止すること）
2．海浜利用（遊泳、釣等）のための記念館使用の禁止

◎以上に伴う学則改正

学習院大学学則	第57条	7校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）
学習院高等科学則	第30条	1校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）
学習院女子高等科学則	第30条	1校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）
学習院中等科学則	第29条	1校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）
学習院女子中等科学則	第29条	1校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）
学習院初等科学則	第29条	1校外教育施設	八幡平松尾校舎（八幡平）

以上の次に、それぞれ「学習院寸心荘－西田幾多郎博士記念館－」を加える。

以上

＊現在では「学習院 西田幾多郎博士記念館」の維持・運営は、施設部管理課が担当し、西田幾多郎関係資料の調査・保存は、文学部哲学科（担当は、酒井 潔教授）との緊密な連携の下で大学史料館が行っている。施設の目的、利用規定等に関しては特に変更された点はないが、現行の運営体制は、館長（平成10年度より、未定）、副館長一名（施設部長が担当）、管理人一名（平成10年度より、アルバイト一名）となっている。

この基本方針の下、校外施設としての使用に向け同年12月16日には改修計画案が決定され、併せて当地在住で生前の西田幾多郎夫人とも親交の深かった前川清一氏に管理人就任を打診、また記念館に設置する西田博士のブロンズ像および銅板製プレート（寸心荘坂下に設置）の製作については彫刻家高田博厚氏に正式に依頼することになった。（これら二点は共に高田氏のご厚意により学習院に寄付された。）明けて昭和52年（1977）、前年作成の「基本方針（案）」についての更なる検討を経て、同年2月9日の科長会議で「学習院西田幾多郎博士記念館（学習院寸心荘）」管理規定案が提出了承（正式制定は昭和52年4月1日）され、改修工事も本格着工（その詳細については次節参照）の運びとなった。必要な備品等も調い、3月中旬には改修工事も完了、昭和52年4月1日、初代館長には文学部哲学科磯部忠正教授、副館長には堀岡正雄経理部長、法学部遠藤浩教授、管理人には前川清一氏が就任、4月16日には西田家、学習院関係者はもとより、鎌倉市長をはじめ多く

の招待客を招き盛大な開設式（同様に同月24日には開設披露）が催された。

かくて西田幾多郎が人々と語り、思索し、時に寛ぎ、そして多くの著作を残した「鎌倉の家」は、多くの人々の保存への熱意と努力が実り、ここに「学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）」として新たなる一歩を歩み始めることとなったのである。

4．主たる補修・改築工事の概要

旧西田邸の現状を可能な限り保存し、博士生前時の屋敷の面影を後世に残すことは、西田家よりこの家を譲り受けるにあたっての一つの申し合わせ事項であった。しかし建築後既に五十年以上を経過し、随所にかなりの傷みの生じている老朽家屋である以上、多くの訪問者を迎え、また教職員、学生の宿泊研修可能な校外教育施設として運営する為には、安全面、衛生面等を考慮して必要最低限の補修、改築工事を行うことは避けられなかった。庭園、及び建築部分に分けて外観上多少の変化を与えることとなった主たる補修、改築工事を挙げれば以下の通りである。

①庭園

昭和52年（1977）２月～３月（開館に向けて）…四つ目垣、裏木戸等の整備、入り口内右手説明版の設置

昭和54年（1979）11月…寸心荘正門右手に記念碑設置（碑文は、下村寅太郎氏）

昭和55年（1980）12月…冠木門（正門）の改修

昭和57年（1982）３月…敷地内排水溝敷設工事

昭和59年（1984）４月…土砂の流失による地盤の悪化や風害等を避けるため、庭園南側土手部分に梅七本、松五本、桜二本を補植

平成７年（1995）５月…正門木戸の改修

②建築部

昭和52年（1977）２月～３月（開館に向けて）…屋根、玄関庇部分の補修、土台（南側の下がっていた箇所）の補修、一階廊下床板を張り替えカーペット敷きに、一階廊下ガラス戸を全てサッシに、二階南側窓を大きなサッシ窓に、記念室床板を張り替え絨毯敷きに、西側手洗いに男子小便器、また浴室入り口に洗面所を新設、そして全館の畳替えを実施。（施工は、堤工務店）

昭和52年（1977）７月…宿泊研修用に浴室を二倍の広さに増築、及び台所改善工事

昭和54年（1979）10月…台風により破損した二階南側庇及び記念室南側戸袋の補修

昭和55年（1980）10月～12月…建物全体の倒壊を防ぐため、昭和８年秋に増築した二階建て部分に鉄骨を通し、西側外部には非常階段様の支えを、また東側は幅約二尺程の増築を施した。増築部分については若干以前の建物の趣に変化を与えざるを得なかったが、一階、二階それぞれの部屋の東側に飾り棚、押し入れ、床等を設け極力違和感無きようにした。併せて屋根の葺き替え工事を実施。（施工は、

補修・改築工事前（二階建て部分）

東　側

西　側

補修・改築工事後（二階建て部分）

東　側

西　側

山品建設株式会社）

昭和56年（1981）11月…平屋部分の壁の塗り替え（京壁、漆喰壁、ベニヤ板壁等）

昭和57年（1982）8月…台風により破損した二階西側庇及び雨樋の補修

昭和57年（1982）11月…強風により落下破損した二階南側庇全面及び西側庇の一部の補修

昭和59年（1984）4月…玄関廻り（六面）、廊下廻り（三面）、管理室側（二面）、六畳側（二面）襖の張り替え、第一室及び第二室の畳替え

平成7年（1995）5月…外壁下見板及び記念室出窓袖壁の補修、二階窓手摺の取り替え

平成10年（1998）4月～6月…一階廊下庇部分の全面葺き替え、記念室床板の張り替え、記念室南側窓のサッシ化、台所窓のサッシ化、勝手口扉の取り替え、管理事務室窓のサッシ化、第一室床の間床及び天井部分の張り替え、全館の壁の塗り替え、東側和式トイレ便器の取り替え。（施工は、高久工務店）

以上である。

5．これまでの運営実績と現在の運営状態

昭和52年（1977）の開館以来今日に至るまで、この施設では、西田哲学に関する研究会、読書会はもとより、ひろくは哲学全般、史学、美術史、教育学、さらには医療・看護学等に至るまで、国の内外を問わず実に様々な領域の研究者、学生が集い、それぞれのテーマで研修活動を行ってきた。昭和59年（1984）6月9日、10日の両日には、講師に下村寅太郎氏を迎え、第一回公開講演会が開かれ、西田家、学習院関係者のみならず、鎌倉市長をはじめ多くの招待客、一般見学者に施設及び西田幾多郎関係資料、遺品等が公開された（またこの時、記念館開設を記念して、西田幾多郎遺墨…掛け軸二点、色紙一点を複製、実費で頒布）。費用その他の関係で、こうした催しを定期的に開催することは出来なかったが、平成5年（1993）12月5日には西田没後五十年を記念した寸心会西田哲学研究会の一環として、上田閑照氏を講師に内外三十余人の研究者によって講演会ならびに研究会が開かれた。また西田の生地、石川県宇ノ気町教育委員会、西田記念館主催のセミナーや、西田哲学とは関係の深い信濃教育会主催の研修旅行など、時にはこの小規模な施設に四十人を越える見学者が訪れることもある。一般には原則非公開の施設として、観光案内等に掲載されていないにもかかわらず、突然の訪問者が後を絶たないこともまたこの施設ならではの特徴といえよう。その多くは西田哲学の熱心な研究者、愛読者、あるいはファンとも言える人々であり、時に彼等は、文字通り「拝観」という言葉が相応しいほどの敬虔さを持って、この建物を訪れるのである（こうした特別な訪問者に限っては、例外的に見学を許可する場合もある）。近年、西田幾多郎の生涯と思想に関し次々と新たな著作が出版される中、平成13年10月20日、21日の両日には、学習院大学文学部哲学科酒井潔教授主催で、「現象学と西田哲学」をテーマにワークショップが開催され、ハンス・ライナー・ゼップ博士（平成13年度本学客員研究員）をはじめ内外第一線の研究者により二日間に渉り白熱した議論が行われた。

このように日本国内はもとより、海外においても西田哲学に対する関心が高まり、各方面より寸

“西田幾多郎博士を偲ぶ会” での集合写真（昭和59年６月９日）

心荘についての問い合わせが増えつつある現状ではあるが、大学経営においても厳しい合理化が求められる中で、その運営は極めて困難な状況にあると言える。平成８年（1996）に満期（二十年）を迎えた土地貸借契約は、同年11月１日に更新されたものの、現在寸心荘は、平成９年度の文学部哲学科教授加藤泰義館長を最後に、館長未定のまま学習院施設部関係諸氏の懸命な努力によって、細細とその命脈を保っていると言うのが実態である（長年管理人をつとめられた前川清一氏が、平成９年度をもって引退、以降平成10年度よりは、アルバイト一名が管理業務にあたっている）。学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）設立の目的とその文化的意義、また、これに向けて奔走された関係諸氏の熱意と労苦を思う時、この施設が少しでも長く保存、運営されることを切に望まざるを得ない。

寸心荘歴代館長一覧

任　　期	館　長　名
昭和52年（1977）～ 昭和53年（1978）	文学部　磯　部　忠　正 教授
昭和54年（1979）	文学部　小　松　茂　夫 教授
昭和55年（1980）	文学部　加　藤　泰　義 教授
昭和56年（1981）～ 平成６年（1994）	文学部　門　脇　卓　爾 教授
平成７年（1995）～ 平成９年（1997）	文学部　加　藤　泰　義 教授
平成10年（1998）～	未　　定

書簡の年代推定

田村　航

1．はじめに

学習院大学史料館に収蔵されている西田幾多郎関係資料は、書簡をはじめ、写真・原稿・書・履歴書や辞令のたぐいまでを含めて、総件数557である。なかでも書簡は西田差出・西田受取の分、および西田以外の主として弟子同士の分をあわせて430件にのぼり、その大部分を占める。

書簡には差出人と受取人とがある。両者の間で了解がなりたちさえすれば、書簡は十分にその役割をはたしたことになる。それゆえ書簡に日付が記されることはあっても、たいていの場合、年まで記されることはない。当事者同士にとって、年は自明のことなので、あらためて記す必要はないのである。もっとも第三者が書簡を史料として、すなわち歴史事実を再現する材料としてあつかおうとするときには、年記は欠くべからざるものとなる。書簡の作成年をあきらかにすることで、はじめてその記載内容および差出人・受取人の事跡を時系列に位置づけることを得るからである。明治4年（1871）、日本で郵便制度が確立されてから以降の書簡には消印が押されるため、そこからの年代の確認が可能とはなっている。しかし、消印がかすれたり、欠けたりして年記のはっきりしないことも多く、その場合は住所や記載内容から書簡の作成年を推しはかるしかない。

西田幾多郎関係資料には、このような作成年を明確にしない書簡が多い。しかし書簡を史料としてあつかい、また史料活用の手引きとしての目録の役割を考えた場合、作成年が明確ではなかったとしても、それを推定する必要が生じてくる。これは全くの想像でなされるわけではなく、確たる物証がないとはいえ、しかるべき根拠を要する作業である。目録部分に収められなかったこともあり、本稿ではこの推定作業の根拠をしめしておきたい。

2．推定の方法と取りあげる書簡

目録における書簡の作成年は消印を第一の典拠とした。消印は書簡を郵便局であつかったことの証明であり、まず年記が誤っているとは考えにくく、また事務的に押されるところから、恣意的な書きかえもありえないからである。ただし消印が不明確な書簡も多く、その場合は消印以外の、以下の諸点に典拠を求めざるをえなくなる。

（A）『書簡集』[1]における年代推定

（B）消印が不明確ゆえ、あらたに後人によって付された年記

（C）書簡の記載内容もしくは差出人・受取人の住所

（D）葉書・切手の金額

（A）

すでに触れたとおり、収蔵の書簡は西田差出・西田受取・西田以外の三種類に大別され、『書簡

集』にはこのうち西田差出の分が、すべてではないにしろ収録されている。配列が年代順におこなわれるため、作成年の確定された書簡はともかく、そうでないものは結局推測をしていくしかない。推測もまた相応の根拠を要する点でひとつの見識である。したがって『書簡集』の年代比定も重要な典拠たりうるだろう。ただ、遊佐道子氏のすでに指摘したとおり[(2)]、『書簡集』には年代の誤りや疑問点もあるため全面的に依拠することはできない。

（B）

書簡に直接書き加えられた年月日については、いつ、だれの手によるのかという問題が残されている。書簡の受取人か、家族などの関係者であろうことは想像に難くないものの、これが判明しない限り、年代推定の典拠とするには相当の慎重を要する。とはいえ、これに対する疑問もしくは誤りを指摘するだけの根拠もまたあるわけではないので、あきらかに誤っている場合をのぞき、さしあたりの典拠とした。

（C）

（A）（B）に該当しないもの、すなわち『書簡集』にも収録されず、後人の追記もない書簡に関しては、先ずその記載内容から年代をわりだしていくこととなる。具体的には、著書・論文の刊行年、講演をおこなった年、任官・退官の年、また引越・避暑・旅行などからである。引越・避暑・旅行に関しては書簡の内容以外の、差出人・受取人の住所が重要な手がかりとなる。差出人・受取人の住所や滞在先がいつのものかが判明していれば、おのずと書簡の作成年も推定しうるからである。

（D）

このほか、（A）（B）（C）いずれの切り口からも書簡の作成年が判明しない場合もある。このような場合は当時使用されていた切手・葉書の金額から年代をわりだすことができる。当該史料と重なる範囲に限ったが、それぞれの時期における金額は次のとおりである[(3)]。

封書

明治32年（1899）4月1日～	3銭
昭和12年（1937）4月1日～	4銭
昭和17年（1942）4月1日～	5銭
昭和19年（1944）4月1日～	7銭
昭和20年（1945）4月1日～	10銭
昭和21年（1946）7月25日～	30銭

葉書

明治32年（1899）4月1日～	1銭5厘
昭和12年（1937）4月1日～	2銭
昭和19年（1944）4月1日～	3銭
昭和20年（1945）4月1日～	5銭
昭和21年（1946）7月25日～	15銭

以上の（A）～（D）から、本稿でとりあげるべき書簡もきまってくる。消印の不明確ゆえに年

の判明しない書簡のうち、まず『書簡集』未収録のもの、『書簡集』収録のものでも推定年の誤っているもの、そして後人の追記が誤っているものである。『書簡集』未収録である以上、その年代推定に頼るわけにもいかず、また（A）（B）の誤りが書簡の記載内容や差出人・受取人の住所、さらに郵便料金で確認されるところから、結局のところ、（C）および（D）が最も確実な根拠ということになる。以下、各書簡に即して具体的に確認していきたい。まず目録の分類どおり西田差出・西田受取・西田以外に分け、各書簡の冒頭には目録中の資料番号を付す。主題が作成年の推定ということもあり、考証は年代順におこなうこととする。

3．各書簡の考証

（1）西田差出分

B－151

高坂正顕受取の葉書である。表に「大正十二年」の鉛筆書が見られるが、これをそのまま信用してよいかどうかは疑問がある。「朝永君がかいてくれれば深田君の方はよからうと思ひます」「朝永君には是非何か書いてもらひたいと思ひます」の書面は、高坂が原稿の依頼や雑誌の編集をする立場にあったことを思わせ、本人の記述ともまた合致する。

> 私は卒業して二年ほど務台博士のあとをついで「哲学研究」の編輯にあたつてゐた。西田先生が編輯委員であられたのである。もとそのやうなことの柄でない私は、やがて先生が編輯委員を深田康算博士に譲られるのを幸ひ、その任を解いて頂いた。(4)

高坂は大正12年（1923）３月に京都帝国大学を卒業しており、本人の記述にしたがうなら、これ以降の二年間は『哲学研究』の編集にたずさわったことになる。大正12年３月13日付の西田差出・高坂受取の書簡（B－63）中の「それではどうかよろしく御願いたします。万事務台君とお話してやつて見て下さい」も、『哲学研究』の名こそ出ないものの、大正12年３月という時期的な符号といい、務台理作との相談を命ぜられることといい(5)、おそらく編集業務の依頼に関する書簡である。実際、大正13～14年の西田差出・高坂受取の書簡を見ると、「藤井健君、来月の雑誌に続稿ができぬとか何とか、都合できますか」（B－154）、「もし九月早に私の原稿を要するなら」（B－153）、「岡野君よりシンチンゲルの論文を送つて参りました」（B－140）、「大脇君が何か書いてくれる」「十月号に必ず出し得る」（B－158）と、雑誌の編集業務に関する西田と高坂のやりとりが見られ、上の記述の裏づけとなろう(6)。高坂自身は「卒業して二年ほど」というが、書簡B－158によれば、少なくとも大正14年（1925）６月27日の時点では、まだ編集業務にたずさわっていたようである。また翌年の初夏には既にやめていたところから(4)、高坂がその任についていたのは大正12年３月から、最もおそくて大正15年初夏までということになる。以上から当該の葉書も、１月31日の日付もあって、大正12年ではなく、大正13～15年のものとするのが妥当である。この間に朝永三十郎が『哲学研究』に執筆したのは、大正13年５月の「カント生誕二百年記念会に際して」(7)と同14年12月の「カント哲学と数学的自然科学」(8)の二度であり、「朝永君がかいてくれれば」はこのいずれかを指す。後者は「京都大学夏期講習会講演「カントに至るまで」の一節」(8)で西田と高坂がわざわざ原稿を依頼したものとは思えず、また１月31日の日付とへだたるところからも、前者の方が適当だろう。し

たがって、大正13年の葉書である可能性が高い。

B－153

おなじく高坂受取の葉書である。消印が捺されていないため作成年が判明せず、結局書面からこれを推しはかるしかない。まず「大分前に医大の方へはがきを出して置いたが」と見える。高坂は京都帝大卒業後、大正12年（1923）に京都府立医科大学予科講師に就任しており、「医大」とは恐らくこれを指す。したがって大正12年以降と考えられるが、「もし九月早に私の原稿を要するなら、何時にても御上げいたします。無論九月に要せない様なら、いつでも原稿の不足の時に廻したがよい、私の方は何時でよい（ママ）、できて居るのだから」と続くところから、さらに時期が特定できるようである。西田は大正13年の３月・９～10月、『哲学研究』の第96号・102～103号に「内部知覚に就いて」を掲載している。このように何号にもわたっての掲載は、元々ひとつの論文を紙数の都合で分割したことを思わせ、「私の方は何時でよい、できて居るのだから」と符合しよう。「もし九月早に私の原稿を要するなら」「無論九月に要せない様なら」と、９月か否かという問題も当該論文の掲載時期とやはり符合する。そのうえ高坂の住所「区内　聖護院東側　洛陽館」は大正13年４月12日付・９月18日付・11月２日付の西田差出・高坂受取書簡（B－154・B－10・B－152）の宛先と一致し、ここからも大正13年とするのが妥当である。

「聖護院東側　洛陽館」は大正13年の書簡にしか見られず、前後の大正12年・14年ではそれぞれ異なる住所となっている。前に見たB－151の宛先は「洛西花園村妙心寺南門前七」となっており、これがもし大正13年のものならば、８月11日付のこの葉書と齟齬をきたしてしまう。ただ、高坂の住所が「洛西花園村妙心寺天球院」となっている大正14年の書簡や「今日は（筆者注・高坂は）尚妙心寺の老夫婦の処に居ると思ふが妙心寺の何処かも聞かなかつた」と記す西田差出・務台理作受取の書簡（『書簡集』№1014）から、高坂がしばしば妙心寺におもむき、しかもどうも近しい人物がそこに住んでいたことも察せられ、B－151の宛先もまたこれと関わるものと考えられる。B－151がしたためられたとき、たまたま高坂は妙心寺にいたのか、それとも大正13年３月まで妙心寺に住み、４月から「聖護院東側　洛陽館」に引っ越したのか判然としないが、いずれにせよB－151が大正13年のものだとしても差しつかえはないはずである。

B－82

これも高坂受取の葉書である。表の「？」の鉛筆書はおそらく後人の追記で、年不詳であったことを示す。しかし「京都市上京小松原北町五八」という高坂の住所、また文面の「「文学」を御送りいたします」「近く出す本の中に収める時訂正いたします」から昭和９年（1934）とするのが妥当だろう。当該の住所は昭和９年付の一連の高坂宛書簡と一致し、西田はこの年、『文学』第２巻第９号に「形而上学的立場から見た古代における東西の文化形態」を発表しており、また「近く出す本」は９月３日の日付から同年10月刊行の『哲学の根本問題 続篇』と符合する。このほか昭和９年９月４日付の西田幾多郎差出・和辻哲郎受取の書簡（『書簡集』№856）にも「私の柄にない文化論が「文学」に出ました」「少し訂正して今秋岩波全書の「哲学の根本問題」の続編の終に附加しようかと思つてゐます」と、同内容の記載のあるところからも昭和９年と判断できる。

B－85

高坂受取の葉書で、年不詳のものである。高坂は昭和11年（1936）４月から15年（1940）３月まで東京文理科大学に奉職しており、「東京市小石川区大塚町六八」の宛先住所もこの時期のものと合致する。また「手紙は四銭・葉書は二銭」の郵便局印が見られ、昭和12年（1937）４月１日に封書・葉書の代金がそれぞれ４銭・２銭へと改定されるところから、時期はさらに限定されてくる。

なお『書簡集』№1087の西田差出・高坂受取書簡では、高坂の論文審査および発表をめぐり、田辺元とのすれちがいが窺え、この葉書と内容的に関連するようである。もし、そうであるならば、昭和12年とする『書簡集』の推定を裏づけることにもなろう。

A－40

高坂受取の封書である。消印が不明確なため作成年がはっきりしないばかりではない。封筒には「一七年」の追記が見られ、ここから昭和17年（1942）と考えられるのだが、『書簡集』№1612では昭和16年と推定するため、このいずれが正しいのかを判断しなくてはならないのである。手がかりは書面の「講座の第九が来て早速尊兄の「祭り」をよんで見ました」にもとめられる。「講座」とは岩波講座『倫理学』のことを指し、この第９冊に高坂が「祭り」を発表したのは昭和16年９月のことで、ちょうど日付の「九月二十九日」とも符合する。したがって、追記の「一七年」が誤りということになる。

D－180

柳田謙十郎受取の封書で、『書簡集』№1836に収録されている。何を根拠としてか、『書簡集』は昭和18年（1943）とするが、これは誤りである。書面には「「国家理由の問題」およみ下さいました由にて、御感想お洩し下され難有御座いました」と見え、西田の「国家理由の問題」に対する柳田の感想への返事であることがうかがえる。これは「「国家理由の問題」お読下さつたら何でも御注意下さい。問題が問題故」の一文をもつ昭和16年（1941）９月25日付の西田差出・柳田受取書簡（D－36）と対応し、実際「国家理由の問題」がこの年の９月に岩波講座『倫理学』第８冊に発表されたところから、昭和18年ではなく、昭和16年とするのが適当である。柳田と同様、務台理作・和辻哲郎・木村素衛も同論文の感想を西田に送っており（『書簡集』№1610・1618・1619）、いずれも昭和16年９～10月のものである。このほか書面末尾の「十六日頃帰ります」は『書簡集』№1620・1621の「十六日頃帰るつもり」「明日（筆者注・15日付の書簡なので16日）帰洛致します」と合致するところからも、昭和16年でまちがいないだろう。[9] なお柳田の住所「京都市上京区紫野上柳町一〇」は台湾から帰朝したときのもので、やはり昭和16年以降であることを物語っている。

D－41

柳田受取の葉書である。消印が捺されていないため年不詳だが、「二銭」の葉書は昭和12年（1937）４月１日から昭和19年（1944）３月31日までのものと判断でき、７月６日の日付から投函の時期はさらに昭和18年以前にまで限定される。文面の「又秋にまゐりました時にお願いたし度。大拙はもう十日過に（筆者注・鎌倉に）帰るならん。私は少くも十四、五日までは（同・京都に）居る」は、西田の鎌倉行が７月半ばであることを示す。そこで昭和12～18年において西田が７月半ばに鎌倉に行った年を探せばよい。以下は『日記』[10]からの引用である。

昭和12年７月26日　　「フジにて鎌倉に来る」
昭和13年７月25日　　「カモメにて鎌倉に来る」
昭和14年７月26日　　「カモメにて鎌倉へ来る」
昭和15年７月25日　　「富士にて鎌倉に来る」
昭和16年７月23日　　「フジにて鎌倉へ来る」
昭和17年　　リュウマチスのため鎌倉に行かず[11]
昭和18年７月17日　　「フジにて鎌倉へ来る」

昭和３年（1928）12月以降、西田はほぼ毎年の夏冬を鎌倉で過ごした。夏は７月20日を過ぎてから鎌倉に行くのが大体のならわしだったようである。しかるに昭和18年（1943）のみは７月20日以前、17日に行っており、「少くも十四、五日までは居る」と最も近い時期にあたる。

D－40

年不詳の柳田受取の葉書である。先のD－180と同様、柳田の住所「京都市上京区紫野上柳町一〇」から、まず昭和16年（1941）４月以降であることが確認できる。さらに「二銭」の葉書の値段から、昭和19年４月に「三銭」に値上げされる前であることも確認できる。書面には「秋には又とおもひましたが、此頃の如き旅行不如意の状態についつい元気がでませぬでした。この秋は鎌倉あまり天気よろしからず。困りましたが、この数日来秋晴れのよい日がつゞきます」と見え、葉書が投函された「十一月二日」の時点で西田が鎌倉におり、また京都に戻りたくとも戻れなかったことも窺える。そこで昭和16年４月から昭和19年４月までにおける西田の足跡を追ってみよう。西田の『日記』によれば、昭和16年は10月17日に「熱海から夜汽車に乗込」み、翌朝京都に帰宅する。昭和17年は10月21日から翌年の６月16日までを、昭和18年は７月17日から翌年の５月４日までを帰洛することなく鎌倉ですごす。「十一月二日」に西田が鎌倉にいた年は昭和17年と18年で、葉書はこのいずれかの時期ということになる。「秋には又とおもひましたが」「此頃の如き旅行不如意の状態」から、秋に帰洛したかったのにもかかわらず、不可能であったことが察せられ、そのため10月21日に「ふじにて鎌倉へ来る」昭和17年よりは18年の方がふさわしい。「此秋はとうとう帰りませぬでした」（B－108）と高坂夫人にあてた西田の言葉が昭和18年11月20日付であるところからも、このことの裏づけがとれるはずである。

西田は翌年の４月半ばころより帰洛の予定をたてはじめたが、高坂正顕には「私は月末か来月始頃帰つて見ようかと思つてゐますが、汽車の都合がいかがかと心配して居ります」（B－95）とあて、また柳田には「私は今の処、来月四五日頃より二月程京都へ行つて来ようかと存じ居ります（但し汽車さい都合よくば）」（D－44）とあて、汽車の手配を心配していた。「此頃の如き旅行不如意の状態」とはこのことを指すのだろう。西田は結局５月はじめには帰洛する。しかし「旅行不如意の状態」は如何ともしがたかったらしく、当時の東京鉄道局長 河合好人が高坂の義兄にあたる関係[12]から、西田は特別に京都行の切符を手配してもらったようである。昭和19年５月７日付の西田差出・高坂受取の書簡には「今度は河合君に万端御世話に相成り、御蔭により心地帰洛致しました」（B－102）と見え、同年５月３日の『日記』にも「河合の秘書山田鈴太郎来訪、万事世話してくれる」と見える。「河合君」に世話になったとしか記されないが、おそらくこれは切符に関すること

である。昭和15年10月19日付のものではあるが、西田は高坂に「河合君には不相変切符の御世話になりました」（B－136）とあてており、「不相変」という言い方はこのとき一度に限らず、しばしば切符の世話になったことをうかがわせる。昭和19年４月22日付の書簡（『書簡集』№1934）で西田が高坂に汽車の座席の注文をしている点とあわせ考えると、やはりこの場合も同様のことを想定するべきであろう。

なお、昭和19年６月18日、帰洛してから一月半後に西田は鎌倉にもどった。そのさい高坂にあてて「名古屋で河合君に逢ひました。山田氏が鎌倉に送つて下され、具合よく帰りました」（B－93）としたため、このときも東京鉄道局長の河合好人とその秘書 山田鈴太郎が何らかのかたちで関わっていたことが確認できる。

A－4

西田の国体論がうかがえる高坂受取の封書で、『書簡集』№2173に収録されている。かすれた消印にペンで「20」と重ね書きがなされ、ここから昭和20年（1945）のものと考えられる。しかし、一方、封筒には「19年」という鉛筆書きがなされ、ここから昭和19年のものとも考えられる。結局、昭和19年と20年という二つの可能性がでてきてしまい、このうちのどちらが適切なのかを判断しなくてはならない。封筒には10銭の切手が貼られている。これまで７銭だった封書の郵便料金が10銭へと改訂された昭和20年４月１日以降のもので、しかも「四月八日」の日付から改訂直後であることが確認できよう。そのため昭和19年ではなく20年とするのが妥当である。『書簡集』もはたして同一の根拠にもとづいてかどうかは分からないが、昭和20年とする。したがって、この場合は『書簡集』の推定が正しく、「19年」という追記の方が誤っていることになる。

（２）西田受取分

E－27

西田の弟憑次郎の死亡および勲章年金に関する書簡である。差出人の大津勉は、「歩兵第七連隊補充大隊」の罫紙を使用しており、おそらく陸軍の所属である。宛先と差出は記されているのに、封筒も切手も消印もないため、本書簡は郵送とは別の手段で渡されたと考えられる。「十九日」と記される以外に、年月については一切わからない。ただ西田憑次郎は明治37年（1904）６月29日に出征、８月24日に旅順で戦死するので[13]、先ずこれ以降のものとなり、内容から察するに、それほど遠からぬ時期を想像させる。

A－34－２

鈴木大拙差出・西田受取の書簡だが、A－34－１の西田差出・高坂正顕受取の書簡と同封されたかたちで残されている。封筒がないため消印も分からず、書面にも年が記されていないので作成年ははっきりしない。A－34－１の「鈴木大拙からかういふ手紙をよこしたので困る、君にはご迷惑のことゝ思ふ、併し一度御耳に入れないで返事する訳にもゆかぬので、とにかく御紹介だけ申上げる」から、当該の書簡を同封したのが西田本人であること、そこには高坂に知らせたい情報の載っていること、二通の書簡がそれほど遠からぬ時期のものであることが窺える。大拙は「先日高野山大学の学長さん（筆者注・金山穆韶）が来て、君のお弟子中（出来るなら高坂さん）にて、高野へ

来て四十時間ほど、西田哲学を講じてくれぬかとの事に候」としたため、西田をとおして高坂に高野山大学の講義を依頼しようとしたのである。大拙が西田に書簡をあてたのは3月15日である。「四月、五月、六月、九月、十、十一、十二月のうち毎月二回、二日つゞきで六時間づゝ」と講義の開始が4月から予定され急を要するため、書簡を受け取るやいなや、西田はすぐにそれを高坂にあてたと思われる。高坂宛の書簡は昭和16年（1941）3月15日付の作成なので、当該の書簡もほぼ同時期のものとなろう。

なお、高坂はこの件を断ったようで、A－34－1の「柳田が台湾をやめて京都に居ると云ふが、君が御迷惑なら彼が如何かであらう」や同年3月15日付の西田差出・大拙受取の「此手紙と一緒に高坂へ手紙を出した　併し高坂は色々仕事あり　だめであらう　柳田謙十郎といふ者　これまで台湾の大学の助教授を務め居り（この四月より）今度家庭の事情によりやめて京都に居る筈　これがいかゞかとおもふ」（『書簡集』№1562）にあるとおり、最終的には柳田謙十郎がひきうけることとなった。柳田はその自伝で「高坂君のお世話で高野山大学の講師となったり」[14]と記しており、これは昭和16年3月20日付の西田差出・高坂受取の「柳田君の事難有う、大拙の方へさう返事致します」（B－120）と符合しよう。同年9月25日付の西田差出・柳田宛書簡にも「高野の方はどうなりました。まだお出かけにや」（D－36）と見え、実際に高野山大学で講義をおこなっていたことが窺える[15]。大拙が西田に話をもちこんでから、実に5日ほどで話がまとまったのである。

（3）西田以外の分

D－118

木村素衛差出・柳田謙十郎受取の封書である。「今迄のところ私に来た手紙では貴兄が最も細心の注意を以て拙作を御読下さつた事が明らかで」の文面から、木村の著作への感想に対して、さらに返事をしたためたものだということが分かる。「それに関説する権利を『意志と行為』に於ては持てなかつたのでした」とあるとおり、該当の著作は昭和7年（1932）5月刊の『意志と行為』である。6月23日の日付からも、著書の刊行→柳田の感想→木村の返事という時間的推移において整合性をもつだろう。

D－117

おなじく木村差出・柳田受取の封書である。木村の著書に対する柳田の感想への礼状で、書簡がしたためられた10月13日からほど遠からぬ時期に著書の刊行されたことがうかがえる。また「表現」をめぐり田辺元の論を批判するところからも、ここで話題となった木村の著書は、昭和14年（1939）9月に刊行された『表現愛』と考えられる。

D－104

柳田謙十郎差出の封書である。宛先は「柳田不二殿・同陽一殿」となっているが、中身は息子の陽一にあてた書簡二通のはいったもので、それぞれD－104－1・D－104－2と資料番号を付した。異なる便箋に書かれ、内容が連続するわけでもなく、前者は「陽一君　大分がんばつて居るらしいな。身体こはすなよ」と始まり、後者は「富士丸が欠航で一寸御無沙汰。昨日は改造、陽ちやんの手紙等到着」と始まるところから、両者は別々のものと考えた方がよい。D－104－2は差出・宛先どころか日付もなく、内容から作成年を推しはかることも難しい。柳田陽一は昭和17年（1942）

10月１日に死去するので、先ずそれより前のものと判断できる。さらに「陽ちやんは下宮にも鯵沢にも一切取りあはず、唯只管に学問に専念のこと」の一文は、柳田陽一が学徒入営する以前、すなわち昭和17年２月１日より前であることを思わせる。Ｄ－104－１の方は「お父さんが世界精神史講座（理想社）にかいた論文が田辺先生に対して相当深い影響を与へたらしく、別紙のような書信を受とつた」の一文が見られる。話題となっているのは柳田が世界精神史講座『日本思想』に発表した「日本思想の現在及将来」のことで、発表時期は昭和15年（1940）４月である。したがって書簡はこのとき以降のものとなり、「五月十五日」の日付は発表直後であることを示していよう。なお田辺元差出の「別紙のような書信」は同封されていない。

Ｄ－89

務台理作差出・柳田受取の封書である。消印がかすれているため、そこから作成年をわりだすことはできないが、柳田の住所と「岩波の倫理学の第二巻が昨日到着いたし、西田先生の論文を昨夜から今日へかけて通読した処でした」の書面から、昭和15年（1940）のものと判断できる。この年の８月、西田幾多郎は「実践哲学序論」を岩波講座『倫理学』第２冊に発表しており、書簡がしたためられた「八月十二日」の日付とも符合する。務台のいう「西田先生の論文」はこれを指すだろう。また昭和15年７月29日付、同年８月22日付の田辺元差出・柳田受取の書簡（Ｄ－１、Ｄ－11）では、柳田の宛先住所が「長野県小県郡別所温泉」となっており、これは当該の書簡とも一致する。この年の７～８月、柳田は別所温泉に滞在していたのである。Ｄ－191の消印不明８月19日付の西田差出・柳田受取の書簡も別所温泉宛となっているので、同様に昭和15年のものとして、『書簡集』の推定を裏づけることができる。

Ｄ－85

おなじく務台差出・柳田受取の、消印不明の封書である。書簡の前半は柳田『行為的世界』への礼と感想が述べられている。同書は昭和15年（1940）12月に刊行され、これ以降の書簡と判断できるが、「二月十二日」（封筒裏の投函日は「二月十三日」）の日付から、翌年の昭和16年となる。

Ｄ－69

鈴木大拙差出の、柳田『道徳的精神』への礼状である。同書は昭和16年（1941）12月に刊行されたが、１月30日の日付から、翌年の昭和17年の書簡となる。これは上のＤ－85の場合と同様である。

Ｄ－２

田辺元差出・柳田受取の、消印不明の葉書である。昭和15年（1940）５月７日に「京都市左京区岡崎真如堂前町一七」（Ｄ－４）だった田辺の住所は同年７月29日には「京都市左京区吉田下大路町四二」（Ｄ－11）に変わり、当該の葉書と一致する。Ｄ－11の「此間は測らずも引越で大兄と御令息（筆者注・柳田謙十郎と陽一）との御好意を辱くし感謝に堪へませぬ」「外出も億劫にて、転居以来一度も下駄を穿いて外に出たことなく」から、この年の７月中に田辺の転居したことがうかがえ、これ以降の葉書と判断できる。また柳田の住所「市内上京区紫野上柳町一〇」は台湾帰朝後のもので、昭和16年（1941）４月以降と更にしぼりこむことができる。葉書は「二銭」のものを使用しており、三銭に値上げされる昭和19年４月以前であることを物語っている。書面の「大兄始め皆様御喪中、特に御大事に祈ります」は、この間の柳田家の喪中を示しており、これはおそらく長

男陽一のことである。柳田陽一は軍務中の昭和17年（1942）10月１日に死去するが、これは当該葉書の「十二月三日」の日付とも符合しよう。

D－96

務台理作差出・柳田受取の封書である。消印不明だが、昭和18年（1943）５月に刊行された柳田の『歴史的形成の倫理』への感想が述べられており、６月６日の日付は刊行後まもないことを物語っている。

D－57

鈴木大拙差出・柳田受取の葉書である。「たまつて居た郵便物の中に『読書人』あり。御話しのもの満載、下らぬ批評（にあらず、罵言にすぎず）、読むに堪へず」と見える。これは昭和18年（1943）７月、『読書人』誌上における「特輯・哲学書批判」のことで、紀平正美・三井甲之など右派知識人による西田哲学批判がおこなわれた。７月14日という書簡の日付も『読書人』の批判と時期的に合致する。

D－97

務台理作差出・柳田受取の封書である。前半は柳田と金山穆韶の共著『日本真言の哲学』への感想で、同書は昭和18年（1943）７月に刊行された。また右のD－57同様、「例の読書人事件についてはまことに苦々しき限りにて、当地（筆者注・東京）でも心ある人々に却つて反効果を起こしてゐる様です」と、後半で『読書人』誌の「特輯・哲学書批判」に触れているところからも昭和18年のものである。

D－90

おなじく務台差出・柳田受取の封書である。切手部分破損のため、消印や切手の値段から投函時期を推しはかることはできない。封筒および書面末尾に「三月三十日」と記されるところから、かろうじて月日が分かるのみである。ただ、このときの日付と「浦和高校へ御奉職との御事は先般お聞きいたし」から作成年をわりだすことはできる。柳田は昭和19年（1944）３月に浦和高等学校教授に就任し京都から浦和市に移ったため、書簡はこのころに書かれたものと考えられる。「特に浦和の辺は武蔵野の気分もまだまだ有之。御生活の環境もこの時局では東京などよりずつと落付をうることゝ御安心申上げる様の次第です」の一文も、務台自身の居住地である東京の比較と同時に、柳田が浦和に越して来たばかりであることを想像させる。

D－66

鈴木大拙差出・柳田受取の葉書である。消印が欠けており、かろうじて20日の日付が分かるばかりである。「鈴木貞太郎」と記名された「昭和十一年元旦」の年賀状を、賀詞を墨で消して再使用しており、まずこのとき以降のものと判断できる。表には３銭分の切手が貼付されているので、葉書がこの料金となる昭和19年（1944）４月１日以降、それがさらに５銭に値上げされる昭和20年４月１日以前ということになる。「空襲頻繁、戦は益々身辺に近付いて来た」の書面も、この時期と符合するだろう。また「どこでも寒いので閉口、今冬は特に厳しいやうである」から、月が分からないとはいえ、昭和19年から20年にかけての冬という見当はつく。

D－63

「二月二十日」付の鈴木大拙差出・柳田受取の葉書である。柳田の住所「浦和市常盤町八ノ二」から昭和19年（1944）３月以降ということになる。また２銭の葉書に１銭の切手を貼り、上とおなじく合計３銭の郵便料金となっているところから、昭和20年（1945）４月以前ということになる。この期間における「二月二十日」なので、昭和20年とするのが妥当である。

D－68

鈴木大拙差出・柳田受取の、消印不明確により作成年が判明しない葉書である。「西田君昨暁四時頃、寧ろ突如として、鬼籍に入る」から、西田幾多郎の死後まもないことがうかがえる。西田の死去は昭和20年（1945）６月７日、午前４時ごろである。この葉書は「六月八日」にしたためられ、この時点での「昨暁四時頃」だから、時間的には十分な整合性をもつ。このように昭和20年のものと見てみると、「交通、通信の便すべて、不良の状態なので、諸方へ知らせること不相成」「何分医師の来診自由ならず」「どこもかも焼けるので、何が何やら、わからぬ」の書面にくわえ、使用済みの葉書に紙を貼付して再使用するところなどは、いかにも太平洋戦争敗戦直前の情況を感じさせる。

４．年代不明の書簡

ある程度の可能性は指摘しえても、仮定に仮定を重ねた結果でしかないため、やはり年代不明と判断した方がよい書簡もある。さしあたりの考証を示して後考をまちたい。

D－71－２

鈴木大拙差出・柳田謙十郎受取の書簡である。昭和18（1943）年12月20日付のおなじく大拙差出・柳田受取の封書に同封されていたもので、封筒がないため消印が分からず、書面にも年は記されていない。「九月二十一日」の日付だけが分かる年不祥の書簡である。唯一手がかりとなるのは、「来学年の宗教科の講義、何か特に御願申上度候」の一文で、確証のないものの、これは恐らく大谷大学のことである。「鈴木大拙先生の御心ずく(ママ)しで大谷大学の講義をひきうけたり」[14]と柳田自身が語っているところからも、その可能性は高い。柳田は昭和17年（1942）４月に大谷大学教授に就任している[16]。もし「来学年の宗教科の講義」が大谷大学のことであるならば、当該の書簡はこの時期以降のものとなろう。

E－26

ペン書された罫紙があるのみで、宛先も日付もいっさい記されず、封筒もなければ切手・消印もないため、作成年が判明しない書簡である。おそらく郵送に頼らなかったのではないか。末尾に「貞拝」と見え、これが鈴木大拙の本名貞太郎をさすところから、大拙差出の書簡と判断できる。宛先がいっこう記されないところから、はたして西田幾多郎宛とみてよいのかという問題はあるのだが、禅・仏教に関する内容、上田久氏を元所有者とする２点はＥ－18～20と共通し、まず西田宛とみて支障はないだろう。内容において、この書簡は前半と後半に分けられる。前半は『伝灯録』第10巻の抜書で、いわばメモ書きの如きものである。「平常心」の出典として南泉と趙州の対話がとりあげられ、「如何是道」とはじまる趙州の問いから「師言下悟理」まではＥ－18にも同文が引用されている[17]。Ｅ－18は昭和14年（1939）８月22日付であり、ここから同年のものとも考えられる

が、これだけを根拠とするのは心もとなく、さらに裏づけをとる必要がある。後半は色の異なるペンで「風害は大したこともなかりしか、其中又御窺したいと思ひます、一年中の好時節、行楽の余裕なきを憾む」と書かれ、追伸のごとき観をあたえる。この「風害」を手がかりとして、年を推しはかることができそうではある。実際E－18に記された「(水害もなかつたか)」は、元々ほかに害があり、その結果「水害」も起こりかねなかったという言い方で、実は「風害」とのかかわりは十分に想像できる。そのため昭和14年の可能性はおおいに強まるのだが、この年に「風害」のあったことは結局特定できなかった。8月22日以前に「水害」を伴うかもしれない害はあっただろうが、果たしてそれが「風害」なのかどうかまでは確認できないのである。月日が分からないのも原因で、「一年中の好時節」を8月と見てよいのかという問題もある。当然ながら、ほかの年に「風害」の起こったこともありえ、必ず昭和14年でなくてはならないわけでもない。以上から、この書簡は昭和14年の可能性があるものの、やはり年不祥とするのが妥当である。

5．おわりに

本稿の課題は書簡個々の作成年の推定である。結論に関しては目録部分に示したとおりで、むしろここで重要なのは考証の一々の過程である。とはいえ、おこなった考証は決して完全なものではない。作成年が必ずしも明らかとはならなかった書簡もあり、また誤った判断にもとづいたところもあるかも知れない。『書簡集』や後人が追加した年記に関しても、その誤りを見落としたものもまだあるかも知れない。その意味で本稿は、あくまでも現段階における中間報告のごときもので、今後さらなる検討を必要とする。書簡を史料として扱うさしあたりの手がかりともなれば、少しは役割を果たしえたこととなろう。

註

（1）『西田幾多郎全集』第18～19巻（増補改訂第4版、岩波書店、1989年）。

（2）遊佐道子「アメリカで西田研究を考える」(『思想』第857号、1995年11月)。

（3）本井晴信「近世～近現代「書状」と目録整理」(新潟県立文書館『研究紀要』第5号、1998年)。切手・葉書の図案についても触れており、ここから年代を推定する方法もある。このほか『日本切手百科事典』(普及版、日本郵趣協会、1974年）も参照。

（4）高坂正顕『西田幾多郎先生の生涯と思想』(弘文堂書房、1947年)、130～131頁。

（5）務台理作は少なくとも大正8年（1919）8月には、すでに『哲学研究』編集の任についていたようである（「京大来任当初の田辺先生」、『務台理作著作集』第4巻、こぶし書房、2001年、240頁)。大正7年7月の卒業であるため、高坂同様、卒業直後に編集業務を依頼されたとも考えられる。

（6）『哲学研究』に掲載された以下の論文は実際に各書簡と対応する。

大正13年（1924）

4・6月、藤井健治郎「人格主義としてのカント倫理」(B－154)

3・9・10月、西田幾多郎、「内部知覚に就いて」(B－153)

大正14年（1925）

5～7月、ロベルト・シンチンゲル「理念に就いての歴史的と非歴史的」(B－140)

6月、大脇義一「過渡的経験に就て」(B－158)

10月、西田幾多郎「働くもの」(B－158)

（7）『哲学研究』第98号。

（8）『哲学研究』第117号。

（9）遊佐道子氏もおなじく「国家理由の問題」の刊行年と西田の帰洛日から昭和16年の書簡と訂正する（註2「アメリカで西田研究を考える」）。

(10) 『西田幾多郎全集』第17巻（増補改訂第3版、岩波書店、1980年）。

(11) 昭和16年（1941）11月6日付の堀維孝宛書簡、「先月の始めから関節リュウマチスをわづらひ帰洛してからますますはげしくなり手と足がうごかなくなりました　今は府立病院に入院いたし治療を受けて居ります」（『書簡集』№1629）によれば、西田はこの年の10月からリュウマチスにかかっていた。同年11月から翌年5月30日までの空白期間を経て再開した『日記』には「マッサージ」の記事が頻出し、9月28日までつづく。この間、7月12日に死去した山本良吉の東京での葬儀にも出向けなかったほど影響が甚だしく、記述のないことと相まって、この時期の鎌倉行はありえなかっただろう。この点は上田久『続 祖父西田幾多郎』（南窓社、1983年）、213～215頁も参照。ただし10月21日以降は、D－40の示すとおり鎌倉におもむいている。

(12) 戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会、1981年）、515頁。高坂節三『昭和の宿命を見つめた眼　父・高坂正顕と兄・高坂正堯』（PHP研究所、2000年）、92、167頁。

(13) 西田幾多郎「余の弟西田憑次郎を憶ふ」（『西田幾多郎全集』第13巻、増補改訂第3版、岩波書店、1979年）、169頁。

(14) 柳田謙十郎『わが思想の遍歴』（創文社、1951年）、125頁。

(15) 柳田自身は高野山大学講師への就任を昭和17年（1942）のこととするが（『唯物十年　続・わが思想の遍歴』、創文社、1960年、200頁）、やはりこれは昭和16年とした方がよいだろう。

(16) 『唯物十年　続・わが思想の遍歴』（同前）、200頁。昭和17年3月21日付、鈴木大拙差出・杉平顕智受取書簡（『鈴木大拙全集』第29巻、岩波書店、1970年、№120）においても、大谷大学の講義に関して「柳田君は宗教の方で何かやつてくれるよし　それ亦結構である」と見え、また収蔵の大拙・柳田の写真（G－8）は裏に「1942年頃　於大谷大学」と記されている。しかし「（筆者注・台湾から）帰って来て見ると何とか道がひらけるもので……鈴木大拙先生の御心ずくし（ママ）で大谷大学の講義をひきうけたり」（註14『わが思想の遍歴』、125頁）と柳田がいうように、台湾からの帰朝後まもなく、すなわち昭和16年（1941）に大谷大学教授に就任した可能性もある。

(17) こうした西田と大拙とのやりとりは次の言葉からも確認できる（鈴木大拙「西田君の思ひ出二つ三つ」、『知と行』第7号、1946年）。

西田の論文には何だか等閑に引用せられたやうな文句が見えることもある。併し彼はその典拠については中々念入りに調べて居た。例へば大燈国師の「億劫相別、而須臾不離、尽日相対、而刹那不対」と云ふ句などでも、「どこに有つたかいな」と、よく尋ねた。「平常心是道」でも「擲剣揮空」でも、その通りで、その出処を確かに見ぬと承知しなかつた。それでよく本を持つて（ママ）居て、一一見せたものだ。

目　録　部

凡　例

1．本目録は、学習院大学史料館収蔵の西田幾多郎関係資料の目録である。

2．資料の分類

資料はⅠ書簡（西田幾多郎差出）　Ⅱ書簡（西田幾多郎宛）　Ⅲ書簡（西田幾多郎以外：関係者から関係者）　Ⅳ原稿　Ⅴメモ　Ⅵ書　Ⅶ写真　Ⅷ証書・賞状・辞令など　Ⅸ履歴書　Ⅹ領収書・請求書など　Ⅺその他文書　Ⅻモノ資料　ⅩⅢ書籍に分類し、その中で年代順に配列した。

3．作成年・西暦・月・日

作成年は年号で記し、西暦も併記した。

作成年は資料に記載されているものをそのまま採用し、記載がなく推定した場合には[　]を付した。

推定したもののうち、その根拠を解説（「書簡の年代推定」41頁）に記したものは＊を付した。

書簡の日付は差出人の日付を採用した。記載がなく、消印から判断した場合にはゴチック体で表記した。

年月日不詳のものに関しては空白のままとした。

4．差出・作成（Ⅶ写真 については撮影・差出）

差出・作成についてはフルネームを記した。署名をしていない場合も、推定できる場合にはフルネームを記した（例えば、「貞」とある場合には鈴木大拙とした）。

旧字は新字に統一した。

5．受取・宛名

旧字は新字に統一した。

6．内容

資料の内容を記した。

原則として資料の表記を極力採用することにつとめたが、読者の便を配慮し適宜直した部分もある。

7．形態

書簡

封書の場合には封筒の有無・用紙の種類、使用された筆記具の順番で記した（1つの書簡で異なる筆記具を使用している場合には（　）でその旨を記した）。用紙の種類は、便箋、原稿用紙、和紙、罫紙、無罫紙とした。

葉書の場合には葉書の種類、使用された筆記具の順番で記した。

書簡以外

書簡以外の場合には、和紙、原稿用紙、罫紙、無罫紙、印刷物、名刺、拓本、和紙綴などとした。

写真、書

写真、書の場合には大きさをヨコ×タテで記した（単位mm）。また、軸装の有無、箱の有無も記した。

以上についてコピーがあった場合にはその旨を記した。

8．数量

封筒付きの書簡の場合は、封筒の数量と用紙の数量を１・３のように記した。

9．備考

消印、全集との相違点、書き入れ、蔵書印等の情報などを記した。

なお、消印に標語が付属している場合はその標語を消印局・標語の順で表記した。

10. 資料番号

一資料に一番号を付与することを原則とした。ただし同一の封筒や箱などに別個の資料が保存されていた場合には枝番号を付した。

11. （Ⅰ・Ⅱ・Ⅳのみ）全集№

『西田幾多郎全集』（岩波書店、増補改訂第４版、1987～89年）に採録されているものについては、書簡は全集書簡番号を記し、原稿は採録されている巻数を記した。

12. （Ⅰ・Ⅱのみ）翻刻№

『西田幾多郎全集』（岩波書店、増補改訂第４版、1987～89年）に採録されていないものやその他未公開資料については、翻刻を行った（本目録翻刻109～162頁参照）。その番号を表記してある。

I　書簡（西田幾多郎差出）

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
大正12年	1923	03	13	西田幾多郎	高坂正顕	手紙への返事、すべて務台君と相談すること
大正12年	1923	10	05	西田幾多郎	三土興三	面会の申込み
*［大正13年］	1924	01	31	西田幾多郎	高坂正顕	朝永君執筆のこと
大正13年	1924	04	12	西田幾多郎	高坂正顕	三土君の書物の寄附、藤井君の執筆
*［大正13年］	1924	08	11	西田幾多郎	高坂正顕	原稿のこと
大正13年	1924	09	18	西田幾多郎	高坂正顕	広木君のこと
大正13年	1924	11	02	西田幾多郎	高坂正顕	訪問の催促
大正14年	1925	04	11	西田幾多郎	高坂正顕	ヘリゲル氏出迎えの誘い
大正14年	1925	04	19	西田幾多郎	高坂正顕	岡野君からシンチンゲルの論文を送付したこと
大正14年	1925	06	27	西田幾多郎	高坂正顕	原稿の執筆、大脇君への依頼
昭和3年	1928	02	10	西田幾多郎	高坂正顕	娘の縁談について、退官後著作に没頭したい旨
［昭和3年］	1928	10	23	西田幾多郎	高坂正顕	来訪の依頼
昭和4年	1929	05	23	西田幾多郎	高坂正顕	娘の縁談について
昭和5年	1930	10	17	西田幾多郎	務台理作	文旦の礼、腎臓の病について
昭和5年	1930	12	27	西田幾多郎	務台理作	果物の礼、大瀬氏撃退の件
昭和6年	1931	09	28	西田幾多郎	務台理作	務台の問題、自身の論文と文章について
昭和7年	1932	02	21	西田幾多郎	高坂正顕	Simmel『貨幣の哲学』の梗概を持っている者の問い合わせ
昭和7年	1932	04	12	西田幾多郎	高坂正顕	遅くなって電車に間に合ったか、雨が降ったことへの見舞
昭和7年	1932	04	17	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉滞在の知らせ、『思想』1月号の高坂論文を読んだ旨
昭和7年	1932	05	07	西田幾多郎	高坂正顕	「ゲーテの背景」の別刷送付の知らせ
昭和7年	1932	07	21	西田幾多郎	高坂正顕	「スピノーザに於ける思惟の位置」受取礼状、「私と汝」の執筆
昭和7年	1932	10	04	西田幾多郎	高坂正顕	月曜のことは問題なし
昭和7年	1932	10	19	西田幾多郎	高坂正顕	高坂のスピノーザ哲学論文への感想
昭和7年	1932	12	08	西田幾多郎	務台理作	ポンカンの礼
昭和7年	1932	12	19	西田幾多郎	務台理作	ポンカンの礼、自著到着の確認
昭和8年	1933	02	01	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の訪問への承諾
昭和8年	1933	02	07	西田幾多郎	高坂正顕	病気見舞
昭和8年	1933	03	15	西田幾多郎	高坂正顕	十日ばかり鎌倉滞在の知らせ
昭和8年	1933	03	27	西田幾多郎	高坂正顕	『理想』の高坂論文への感想

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		B-63	消印聖護院、表に「大正十二年」の鉛筆書あり	B	63	
葉書、ペン	1		B-2	消印聖護院、表に「大正十二年」の鉛筆書あり	B	2	
葉書、ペン	1		B-151	消印聖護院、表に「大正十二年」の鉛筆書あり	B	151	
葉書、ペン	1		B-154	消印聖護院、鉛筆による「13」の重ね書あり	B	154	
葉書、ペン	1		B-153	消印なし、表に「大正十三年か」の鉛筆書あり	B	153	
葉書、ペン	1		B-10	消印聖護院	B	10	
葉書、ペン	1		B-152	消印聖護院	B	152	
葉書、ペン	1	374		消印聖護院	B	141	
葉書、ペン	1		B-140	消印聖護院	B	140	
葉書、ペン	1		B-158	消印聖護院、切手部分切り取り	B	158	
封筒・便箋、ペン	1・2	470		消印聖護院	A	7	
葉書、ペン	1		B-44	消印なし、表に「昭和三年？」の鉛筆書あり	B	44	
封筒・便箋、ペン	1・3		A-6	消印聖護院・貯蓄あれば力あり	A	6	
封筒・便箋、ペン	1・2	639		消印聖護院、封筒表に「5.10.17」の鉛筆書あり	O	1	
封筒・便箋、ペン	1・2	654		消印聖護院、封筒表に「5.12.27」の鉛筆書あり	O	2	
封筒・便箋、ペン	1・3	689		消印聖護院、封筒表に「6.9.28」の鉛筆書あり	O	3	
葉書、ペン	1		B-41	消印聖護院・京都市への往信は新町名で	B	41	
葉書、ペン	1		B-39	消印聖護院・京都市への往信は新町名で	B	39	
葉書、ペン	1		B-40	消印不明、表に「昭和七年」の鉛筆書あり	B	40	
葉書、ペン	1	729		消印鎌倉・未納不足は先の迷惑、表に「昭和七年」の鉛筆書あり	B	38	
封筒・便箋、ペン	1・3	741		消印鎌倉	A	9	
葉書、ペン	1		B-42	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	42	
封筒・和紙、毛筆	1・1	751		消印聖護院	A	42	
葉書、ペン	1		N-1	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	N	1	
葉書、ペン	1		N-2	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	N	2	
葉書、ペン	1		B-33	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	33	
葉書、ペン	1		B-31	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	31	
葉書、ペン	1		B-30	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	30	
封筒・和紙、毛筆	1・1	771		消印聖護院？　封筒表に「七年？」の鉛筆書あり	A	11	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和8年	1933	07	14	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉の家の案内
昭和8年	1933	07	28	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉行の知らせ、鎌倉の家の場所説明
昭和8年	1933	08	01	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉の家の地図
昭和8年	1933	08	20	西田幾多郎	高坂正顕	手紙への返事、兼常君のこと
昭和8年	1933	08	24	西田幾多郎	高坂正顕	高坂・西谷・下村への返事
昭和8年	1933	10	15	西田幾多郎	高坂正顕	帰洛の知らせ
昭和8年	1933	10	18	西田幾多郎	高坂正顕	漢詩および和歌
昭和8年	1933	12	30	西田幾多郎	高坂正顕	ジード『狭き門』の感想、『ゲーテ論』所持の問い合わせ
昭和9年	1934	01	10	西田幾多郎	高坂正顕	相談に対する返事
昭和9年	1934	02	07	西田幾多郎	高坂正顕	ランプレヒトの『史論』を鎌倉に送るように依頼
昭和9年	1934	02	13	西田幾多郎	高坂正顕	『善の研究』の正誤について、Lamprechtも届いた
昭和9年	1934	03	15	西田幾多郎	高坂正顕	帰京の知らせ
昭和9年	1934	03	25	西田幾多郎	高坂正顕	来訪の依頼
昭和9年	1934	08	13	西田幾多郎	高坂正顕	蔵書送付の依頼、Dilthey Bd.V
昭和9年	1934	08	20	西田幾多郎	高坂正顕	病気見舞、書物送付の礼、俳句のこと
＊［昭和9年］	1934	09	03	西田幾多郎	高坂正顕	『文学』所載の自著について
昭和9年	1934	09	17	西田幾多郎	高坂正顕	『哲学研究』所載論考で扱った問題、岩波全書『哲学の根本問題』の続編について
昭和9年	1934	10	06	西田幾多郎	高坂正顕	帰洛の知らせ
昭和9年	1934	10	16	西田幾多郎	高坂正顕	高坂への見舞
昭和9年	1934	10	18	西田幾多郎	高坂正顕	KorffのⅡとⅠの借用依頼、西田の著書の誤植チェック依頼
昭和9年	1934	10	22	西田幾多郎	高坂正顕	ランケの書名問い合わせ
昭和9年	1934	11	01	西田幾多郎	高坂正顕	字（書）を差し上げること、ランケの論文も見せてくれるよう依頼
昭和9年	1934	11	19	西田幾多郎	高坂正顕	名刺の同封、講演のこと
昭和9年	1934	12	19	西田幾多郎	高坂正顕	erとesの問題について
昭和9年	1934	12	26	西田幾多郎	高坂正顕	数日前に返したランケを受取ったかの問い合わせ
昭和10年	1935	01	02	西田幾多郎	高坂正顕	Worringerの返却とRiegl、Stilfragenの借用依頼
昭和10年	1935	02	26	西田幾多郎	高坂正顕	短歌二首
昭和10年	1935	03	04	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の胆石への見舞
昭和10年	1935	04	01	西田幾多郎	高坂正顕	帰京の知らせ、高坂への病気見舞
昭和10年	1935	05	08	西田幾多郎	高坂正顕	Thukydidesのレクラム版に関する問い合わせ

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		B-32	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	32	
葉書、ペン	1		B-37	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう	B	37	
葉書、ペン	1		B-36	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	36	
封筒・和紙、毛筆	1・1	781		消印鎌倉	A	44	
封筒・和紙、毛筆	1・1	784		消印鎌倉	A	43	
葉書、ペン	1		B-34	消印聖護院・ぜひ標札を掲げませう、転居先不明で返送された旨の付箋付き	B	34	
封筒・和紙、毛筆	1・1	804		消印聖護院、書面は木村君・高坂君宛	A	3	
葉書、ペン	1	828		消印西陣・包装しつかり宛所はつきり	B	35	
封筒・便箋、ペン	1・1		A-12	消印聖護院	A	12	
葉書、ペン	1	833		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	23	
葉書、ペン	1		B-22	消印鎌倉	B	22	
葉書、ペン	1		B-25	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	25	
葉書、ペン	1		B-24	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	24	
葉書、ペン	1	852		消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	26	
封筒・和紙、毛筆	1・1		A-13	消印鎌倉	A	13	
葉書、ペン	1		B-82	消印鎌倉、表に「？」の鉛筆書あり	B	82	
封筒・和紙、毛筆	1・1	859		消印鎌倉	A	14	
葉書、ペン	1		B-28	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	28	
葉書、ペン	1	866		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	27	
葉書、ペン	1	867		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	29	
葉書、ペン	1	868		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	21	
葉書、ペン	1		B-20	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	20	
封筒・便箋、ペン	1・1		A-10	消印聖護院？　西田の名刺が同封されていたと思われる	A	10	
葉書、ペン	1	871		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	19	
葉書、ペン	1		B-18	消印聖護院	B	18	
葉書、ペン	1	872		消印聖護院	B	9	
葉書、毛筆	1	891		消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	49	
封筒・和紙、毛筆	1・1	896		切手欠のため消印不明、封筒表に「九年？」の鉛筆書あり、全集では10年に収録	A	45	
葉書、ペン	1		B-12	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	12	
葉書、ペン	1	921		消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	13	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和10年	1935	05	09	西田幾多郎	高坂正顕	高山の都合、ツキディデスの対訳
昭和10年	1935	09	19	西田幾多郎	柳田謙十郎	論文寄贈礼状
昭和10年	1935	09	27	西田幾多郎	高坂正顕	京都で山本良吉と高坂が会う件について
昭和10年	1935	10	02	西田幾多郎	高坂正顕	山本良吉の京都での滞在先
昭和10年	1935	10	11	西田幾多郎	高坂正顕	推奨文への添書
昭和10年	1935	12	08	西田幾多郎	高坂正顕	教授会における例の件決定
昭和10年	1935	12	16	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田が送ったものについて
昭和10年	1935	12	20	西田幾多郎	高坂正顕	昨日務台君へ手紙を出した、書物が出来たら差し上げる
昭和11年	1936	01	01	西田幾多郎	柳田謙十郎	書籍受取の礼状
昭和11年	1936	01	22	西田幾多郎	高坂正顕	Gegenbauer（ママ）とTrertsche（ママ）の返送通知、榎本君に手紙を出した
昭和11年	1936	01	28	西田幾多郎	高坂正顕	手紙への返事
昭和11年	1936	01	30	西田幾多郎	高坂正顕	手紙への返事、T君と山本君のこと
昭和11年	1936	02	13	西田幾多郎	高坂正顕	下村寅太郎の同志社就任、高坂の待遇など
昭和11年	1936	02	24	西田幾多郎	高坂正顕	電報の受取、下程君のこと
昭和11年	1936	03	07	西田幾多郎	高坂正顕	いつ京都を引き上げるかの問い合わせ
昭和11年	1936	03	23	西田幾多郎	務台理作	山本良吉の電話番号の訂正
昭和11年	1936	04	06	西田幾多郎	高坂正顕	東京で仕事を始めたことへのねぎらい
昭和11年	1936	05	17	西田幾多郎	柳田謙十郎	果物の礼、書の説明
[昭和11年]	1936	07	03	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉行、木村の消息、武蔵高校のこと
昭和11年	1936	07	27	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉へ来たことの通知、高坂帰京の確認
昭和11年	1936	08	30	西田幾多郎	高坂正顕	高坂帰京の問い合わせ
昭和11年	1936	09	14	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の都合の問い合わせ、東京に行く希望
昭和11年	1936	09	22	西田幾多郎	柳田謙十郎	7月末から鎌倉滞在、柳田論文への感想、帰洛の予定
昭和11年	1936	09	29	西田幾多郎	高坂正顕	10月4日の面会について
昭和11年	1936	09	30	西田幾多郎	高坂正顕	不在の詫状、「学問の道」について
昭和11年	1936	10	05	西田幾多郎	高坂正顕	形成作用と行為的直観について
昭和11年	1936	12	07	西田幾多郎	高坂正顕	『思想』所載論文への感想
昭和11年	1936	12	07	西田幾多郎	柳田謙十郎	木村君の健康、果実への礼、書の送付
昭和12年	1937	01	06	西田幾多郎	高坂正顕	引用したランケに関する問い合わせ

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		B-14	消印聖護院・着けば直ぐ配達の航空郵便	B	14	
葉書、ペン	1		D-20	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	D	20	
葉書、ペン	1		B-15	消印仙台・転居の知らせは先づ局へ	B	15	
葉書、ペン	1		B-16	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	16	
封筒・便箋、ペン	1・1		A-23	消印聖護院、推奨文が同封されていたか？	A	23	
葉書、ペン	1		B-11	消印鎌倉	B	11	
葉書、ペン	1		D-19	消印聖護院・年賀状はお早く	D	19	
葉書、ペン	1		B-17	消印聖護院・年賀状はお早く	B	17	
葉書、毛筆	1		D-18	消印聖護院	D	18	
葉書、ペン	1		B-48	消印聖護院	B	48	
葉書、ペン	1		B-47	消印鎌倉	B	47	
葉書、ペン	1		B-46	消印鎌倉・選挙は正しく	B	46	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2		A-15	消印鎌倉	A	15	
葉書、ペン	1		B-45	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	45	
葉書、ペン	1		B-3	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	3	
葉書、ペン	1		B-1	消印聖護院	B	1	
葉書、ペン	1		B-7	消印聖護院	B	7	
封筒・和紙、毛筆	1・1		D-156	消印不明	D	156	
封筒・便箋、ペン	1・3	1032		封筒一部破損のため消印不明	A	8	
葉書、ペン	1		B-4	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑、長野岩村田の消印もあり	B	4	
葉書、ペン	1		B-5	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	5	
葉書、ペン	1		B-73	消印鎌倉	B	73	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1044		消印鎌倉	D	111	
葉書、ペン	1		B-6	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	6	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1046		消印鎌倉	A	16	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	1048		消印鎌倉	A	38	
葉書、ペン	1	1061		消印聖護院	B	8	
封筒・便箋、ペン	1・2		D-158	消印聖護院	D	158	
葉書、ペン	1	1064		消印聖護院、傷みあり	B	50	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和12年	1937	01	10	西田幾多郎	高坂正顕	ランケの書名への問い合わせ
昭和12年	1937	01	21	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉到着の知らせ
昭和12年	1937	01	29	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の田辺に提出する論文に対するサジェスチョン
昭和12年	1937	01	29	西田幾多郎	鹿野治助	参禅に関する注意、書を送ること
昭和12年	1937	03	03	西田幾多郎	高坂正顕	相原が大津を断ることについて
昭和12年	1937	03	07	西田幾多郎	高坂正顕	手紙の返事
昭和12年	1937	03	11	西田幾多郎	高坂正顕	歴史と世界の形成について
[昭和12年]	1937	04	02	西田幾多郎	高坂正顕	高坂論文に対する田辺の批判とその出版
*[昭和12年]	1937	04	05	西田幾多郎	高坂正顕	田辺に直接言うように、わたしはあまり関わらぬ方がよい
昭和12年	1937	04	15	西田幾多郎	柳田謙十郎	論文受取の手紙
昭和12年	1937	06	11	西田幾多郎	高坂正顕	「種の問題」執筆、7月末頃から鎌倉行
昭和12年	1937	06	27	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の論文受取状
[昭和12年]	1937	06	29	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の国家論に対する感想
昭和12年	1937	07	27	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉到着の知らせ
昭和12年	1937	08	05	西田幾多郎	鹿野治助	森本君が僧堂を出て庵を結ぶこと
昭和12年	1937	09	06	西田幾多郎	高坂正顕	高坂への病気見舞
昭和12年	1937	09	26	西田幾多郎	高坂正顕	外彦入隊のための帰洛
昭和12年	1937	10	02	西田幾多郎	高坂正顕	翌3日の鎌倉行、外彦が内地勤務になったこと
昭和12年	1937	10	05	西田幾多郎	高坂正顕	帰りに雨が降ったことの見舞
昭和12年	1937	10	10	西田幾多郎	柳田謙十郎	「弁証法的世界の倫理」受取礼状
昭和12年	1937	10	24	西田幾多郎	柳田謙十郎	論文の感想、ドストエフスキーのこと
昭和12年	1937	10	28	西田幾多郎	高坂正顕	手紙への返事、出版祝い、帰洛の予定
昭和12年	1937	10	30	西田幾多郎	高坂正顕	帰洛の知らせ
昭和12年	1937	11	15	西田幾多郎	高坂正顕	高坂『歴史的世界』の評判、ドストエフスキー的世界への構想、『哲研』10月号の田辺に対する所感
昭和12年	1937	12	06	西田幾多郎	柳田謙十郎	『理想』の柳田論文について、田辺君の西田評について
[昭和12年]	1937	12	09	西田幾多郎	高坂正顕	そういうことなら急ぐにおよばない
昭和12年	1937	12	27	西田幾多郎	柳田謙十郎	カラスミへの礼、Thurneysen、Dostojewski一読のすすめ
昭和13年	1938	01	28	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉到着の知らせ
昭和13年	1938	02	02	西田幾多郎	高坂正顕	「土」は芦屋から送ってきた
昭和13年	1938	02	03	西田幾多郎	高坂正顕	「土」に対する礼

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1	1065		消印聖護院	B	51	
葉書、ペン	1		B-52	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	52	
封筒・便箋、ペン	1・2	1071		消印鎌倉	A	18	
葉書、ペン	1	1070		消印鎌倉	N	3	
葉書、ペン	1		B-54	消印鎌倉	B	54	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・1		A-21	消印鎌倉	A	21	
封筒・便箋、ペン	1・3	1075		消印鎌倉	A	22	
封筒・便箋、ペン	1・4	1087		封筒一部欠のため消印不明、封筒表に「十二年？」の鉛筆書あり	A	17	
葉書、ペン	1		B-85	消印聖護院？・手紙は四銭 葉書は二銭	B	85	
葉書、ペン	1		D-17	消印聖護院・手紙は四銭 葉書は二銭	D	17	
葉書、ペン	1		B-61	消印聖護院	B	61	
葉書、ペン	1		B-60	消印聖護院	B	60	
封筒・便箋、ペン	1・3	1120		封筒一部破損のため消印不明	A	24	
葉書、毛筆	1		B-59	消印鎌倉・航空日本の建設は愛国切手で	B	59	
葉書、ペン	1	1126		消印鎌倉・国民こぞってラヂオ体操	N	4	
葉書、ペン	1		B-62	消印鎌倉・速達で大地は何処へでも	B	62	
葉書、ペン	1		B-58	消印鎌倉	B	58	
葉書、ペン	1		B-57	消印聖護院	B	57	
葉書、毛筆	1		B-56	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	B	56	
葉書、毛筆	1		D-16	消印鎌倉・未納不足は先の迷惑	D	16	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1158		消印鎌倉	D	157	
葉書、ペン	1		B-55	消印鎌倉	B	55	
葉書、ペン	1		B-53	消印聖護院	B	53	
封筒・便箋、ペン	1・3		A-37	消印左京	A	37	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1171		消印左京	D	159	
葉書、ペン	1		B-150	消印不明、表に「?12年」の鉛筆書あり	B	150	
葉書、ペン	1	1173		消印左京	D	15	
葉書、ペン	1		B-75	消印鎌倉・健康日本	B	75	
葉書、ペン	1		B-76	消印鎌倉	B	76	
葉書、ペン	1	1188		消印鎌倉・健康日本	B	77	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和13年	1938	02	09	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田の外国行きの問い合わせ
昭和13年	1938	02	13	西田幾多郎	高 坂 正 顕	手紙への返事、急ぐことへのたしなめ
昭和13年	1938	02	22	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田のドイツ行、倫理学に関するアドバイス（哲学的な基礎付け・歴史的世界の究明の必要、自己を対象化せよ）
昭和13年	1938	03	07	西田幾多郎	高 坂 正 顕	務台君の来訪、論文の感想への期待
昭和13年	1938	03	20	西田幾多郎	高 坂 正 顕	不在の詫状、Lachelier借用のこと
昭和13年	1938	03	25	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田と西田哲学、ライプニッツ、資本主義の問題
昭和13年	1938	04	10	西田幾多郎	柳田謙十郎	西田の自筆原稿のこと
昭和13年	1938	04	20	西田幾多郎	高 坂 正 顕	カント執筆のすすめ
昭和13年	1938	05	07	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Lachelierを返却すること
昭和13年	1938	05	10	西田幾多郎	高 坂 正 顕	ラシュリエへの感想、ロ・スミス禁止への驚き
昭和13年	1938	05	12	西田幾多郎	高 坂 正 顕	極右への注意
昭和13年	1938	05	27	西田幾多郎	柳田謙十郎	「エロスとアガペ」の論文、出版の件、哲学的考察の一致
昭和13年	1938	06	25	西田幾多郎	高 坂 正 顕	「或一派」からの攻撃について
昭和13年	1938	07	07	西田幾多郎	高 坂 正 顕	高坂の手紙の感想
昭和13年	1938	07	26	西田幾多郎	高 坂 正 顕	鎌倉に来た通知、28日には不在
昭和13年	1938	07	27	西田幾多郎	柳田謙十郎	会に対する文句
昭和13年	1938	08	14	西田幾多郎	柳田謙十郎	芸術が歴史的社会的実践であること
昭和13年	1938	08	14	西田幾多郎	柳田謙十郎	エグレッスとレグレッス、「エロスとアガペ」に対する感想
昭和13年	1938	09	01	西田幾多郎	高 坂 正 顕	昨夜の無事
昭和13年	1938	09	06	西田幾多郎	高 坂 正 顕	書物のことをいろいろ知らせてくれたことへの礼状
昭和13年	1938	09	07	西田幾多郎	高 坂 正 顕	MalinowskiのCrime & Customの借用依頼
昭和13年	1938	09	07	西田幾多郎	高 坂 正 顕	高坂の『思想』論文への感想
昭和13年	1938	09	09	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Malinowskiへの礼状
昭和13年	1938	09	12	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Malinowskiの注文
昭和13年	1938	09	17	西田幾多郎	高 坂 正 顕	HarrisonとMalinowski
昭和13年	1938	09	21	西田幾多郎	柳田謙十郎	国家・民族のとらえ方
昭和13年	1938	09	21	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Ancient Art & Ritualへの礼、宗教的なものへの関心
昭和13年	1938	09	25	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Ancient Art & Ritualの返却、感想
昭和13年	1938	09	27	西田幾多郎	高 坂 正 顕	Harrisonの δρώμενον の感想、務台君の来訪
昭和13年	1938	10	05	西田幾多郎	柳田謙十郎	岩波における出版
昭和13年	1938	10	30	西田幾多郎	高 坂 正 顕	ランケの書物に関する問い合わせ

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		D-14	消印鎌倉・健康日本	D	14	
葉書、ペン	1		B-78	消印鎌倉・国民精神総動員	B	78	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	1200		消印鎌倉	D	160	
葉書、ペン	1	1208		消印鎌倉・滅私奉公 政治の基調	B	79	
葉書、ペン	1		B-80	消印鎌倉・滅私奉公 政治の基調	B	80	
封筒・便箋、ペン	1・5	1215		消印左京	D	161	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1225		消印左京	D	176	
葉書、ペン	1	1227		消印左京	B	81	
葉書、ペン	1	1230		消印左京	B	69	
葉書、ペン	1	1231		消印左京	B	68	
葉書、ペン	1	1232		消印左京	B	64	
封筒・便箋、ペン	1・3	1234		消印左京	D	169	
封筒・便箋、ペン	1・4	1240		消印左京	A	25	
葉書、ペン	1	1246		消印左京	B	160	
葉書、ペン	1		B-155	消印鎌倉・国民精神総動員	B	155	
封筒・便箋、ペン	1・3	1252		消印鎌倉	D	175	
葉書、ペン	1	1261		消印小石川・先づ国債で御奉公、鉛筆による「13」の重ね書あり	D	42	
封筒・便箋、ペン	1・3	1262		消印鎌倉	D	190	
葉書、ペン	1		B-149	消印鎌倉・先づ国債で御奉公	B	149	
葉書、ペン	1		B-43	消印鎌倉・先づ国債で御奉公	B	43	
葉書、ペン	1	1272		消印鎌倉	B	66	
葉書、ペン	1	1271		消印鎌倉・国民精神総動員	B	67	
葉書、ペン	1	1273		消印鎌倉・国民精神総動員	B	65	
葉書、ペン	1	1275		消印鎌倉・国民精神総動員	B	162	
葉書、ペン	1	1276		消印鎌倉	B	157	
封筒・便箋、ペン	1・4	1278		消印鎌倉	D	171	
葉書、ペン	1	1279		消印鎌倉・国民精神総動員	B	74	
葉書、ペン	1	1283		消印鎌倉・国民精神総動員	B	71	
葉書、ペン	1	1285		消印鎌倉・国民精神総動員	B	72	
封筒・便箋、毛筆	1・2		D-170	消印左京	D	170	
葉書、ペン	1		B-70	消印左京・先づ国債で御奉公	B	70	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和13年	1938	11	24	西田幾多郎	高坂正顕	スイスに注文した本について
昭和14年	1939	01	23	西田幾多郎	柳田謙十郎	文部省教学官の件、歌の半切
昭和14年	1939	01	25	西田幾多郎	柳田謙十郎	文部省教学官の件（上京のすすめ）
昭和14年	1939	01	27	西田幾多郎	高坂正顕	昨日鎌倉着
昭和14年	1939	02	09	西田幾多郎	柳田謙十郎	文部省教学官の件（上京のすすめ）、「西田哲学」のこと
昭和14年	1939	03	04	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の父の病気、振興会の金について
昭和14年	1939	03	07	西田幾多郎	高坂正顕	高坂『歴史哲学と政治哲学』受取礼状
昭和14年	1939	03	07	西田幾多郎	柳田謙十郎	手紙、著書への礼、今年（西田が）古稀になるので屍を乗り越えて欲しい
						R-1-1の額
昭和14年	1939	03	07	西田幾多郎（柳田謙十郎写）	柳田謙十郎	手紙、著書への礼、今年（西田が）古稀になるので屍を乗り越えて欲しい
昭和14年	1939	03	11	西田幾多郎	高坂正顕	16日の午後にする、差し支えあらば18日にするがやはり16日がいい
昭和14年	1939	03	22	西田幾多郎	高坂正顕	雑誌の礼、帰洛の予定、木村君のこと
昭和14年	1939	03	27	西田幾多郎	高坂正顕	24日に帰洛、木村君にも逢うつもり
昭和14年	1939	04	17	西田幾多郎	柳田謙十郎	依頼の箱書について
昭和14年	1939	05	16	西田幾多郎	高坂正顕	高坂へのお悔やみ、醍醐三宝院へ赴いたこと
昭和14年	1939	05	22	西田幾多郎	柳田謙十郎	京都での生活、柳田著書の題名について
昭和14年	1939	06	30	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田への誘い
昭和14年	1939	07	16	西田幾多郎	柳田謙十郎	訪問の催促
昭和14年	1939	07	27	西田幾多郎	高坂正顕	昨日鎌倉着
昭和14年	1939	08	16	西田幾多郎	高坂正顕	『思想』2冊の貸借依頼、務台君と意見の一致
昭和14年	1939	10	03	西田幾多郎	高坂正顕	8日～15・6日までの予定
昭和14年	1939	10	04	西田幾多郎	高坂正顕	8日の会の変更
昭和14年	1939	10	06	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田『実践哲学としての西田哲学』の序文をめぐって
昭和14年	1939	12	07	西田幾多郎	高坂正顕	武蔵の問題、広師に関する質問
昭和14年	1939	12	22	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田『実践哲学としての西田哲学』受取礼状
昭和15年	1940	01	22	西田幾多郎	高坂正顕	来週火曜の訪問、教授会のこと、武蔵のこと
昭和15年	1940	01	31	西田幾多郎	高坂正顕	昨日のお話を考えてみようと思う、日比谷かそれとも京大で話したものか
昭和15年	1940	02	12	西田幾多郎	柳田謙十郎	キルケゴールのこと

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		B-159	消印左京	B	159	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・5	1310		消印京都百万遍・台北、航空郵便	D	165	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4		D-166	消印京都百万遍ほか、航空郵便	D	166	
葉書、ペン	1		B-142	消印鎌倉	B	142	
封筒・便箋、ペン	1・4	1317		消印鎌倉、全集所収分は1行脱落	D	167	
葉書、ペン	1		B-139	消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	B	139	
封筒・便箋、ペン	1・3	1333		消印鎌倉	A	1	
和紙、毛筆	1	1334		封筒なし、元々はD-168の封筒に入っていたもの、額装されていたものを外し修復	R	1	1
額					R	1	2
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・1	1334		消印鎌倉、中身はR-1-1を柳田が筆写したもの、R-1-1の封筒つき	D	168	
葉書、ペン	1		B-156	消印鎌倉・小石川、速達	B	156	
葉書、ペン	1	1339		消印神奈川大船	B	161	
葉書、ペン	1		B-148	消印左京	B	148	
葉書、ペン	1		D-26	消印左京・先づ国債で御奉公	D	26	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1347		消印左京	A	46	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・5	1349		消印左京	D	163	
葉書、毛筆	1		D-27	消印左京	D	27	
葉書、ペン	1		D-25	消印左京・八月一日 物の国勢調査	D	25	
葉書、ペン	1		B-143	消印鎌倉・八月一日 物の国勢調査	B	143	
葉書、ペン	1		B-147	消印鎌倉・先づ国債で御奉公	B	147	
葉書、ペン	1		B-146	消印鎌倉・貯蓄報国	B	146	
葉書、ペン	1		B-145	消印鎌倉・貯蓄報国	B	145	
封筒・便箋、ペン	1・4	1385		消印不明、封筒表に「14」の鉛筆書あり	D	162	
葉書、ペン	1		B-144	消印左京	B	144	
葉書、毛筆	1		D-28	消印左京	D	28	
葉書、ペン	1		B-138	消印鎌倉・貯蓄報国	B	138	
葉書、ペン	1		B-137	消印鎌倉・貯蓄報国	B	137	
封筒・便箋、ペン	1・2	1414		消印鎌倉	D	164	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和15年	1940	02	16	西田幾多郎	柳田謙十郎	「白柚」送付への礼
昭和15年	1940	02	19	西田幾多郎	柳田謙十郎	哲学のあり方、キルケゴールのこと
昭和15年	1940	03	02	西田幾多郎	高坂正顕	住所の問い合わせ、論文集増刷のため誤植の確認依頼
昭和15年	1940	03	04	西田幾多郎	高坂正顕	京都での高坂の新住所
昭和15年	1940	04	13	西田幾多郎	柳田謙十郎	主体・基体の用語について、老いの自覚
昭和15年	1940	04	13	西田幾多郎	柳田謙十郎	個物の理解について
昭和15年	1940	05	06	西田幾多郎	柳田謙十郎	「日本思想の現在及将来」受取礼状
昭和15年	1940	05	29	西田幾多郎	高坂正顕	正誤表への礼、岩波の校正のひどさ
昭和15年	1940	06	21	西田幾多郎	柳田謙十郎	『哲学研究』所載論文への感想
昭和15年	1940	07	07	西田幾多郎	柳田謙十郎	「汝」を表現的・歴史的なものとする点
昭和15年	1940	07	17	西田幾多郎	柳田謙十郎	『哲研』所載論文の感想
昭和15年	1940	08	11	西田幾多郎	高坂正顕	海軍大学への紹介
昭和15年	1940	08	13	西田幾多郎	高坂正顕	高坂論文の感想、実践理性の考え方
昭和15年	1940	08	15	西田幾多郎	高坂正顕	『思想』の論文、Usener, Mythologieへの問い合わせ、アポロン・ディオニュソスの矛盾的自己同一について
昭和15年	1940	08	17	[西田幾多郎]	柳田謙十郎	『倫理講座第二』の送付
[昭和15年]	1940	08	19	西田幾多郎	柳田謙十郎	論文の感想への礼
昭和15年	1940	08	26	西田幾多郎	柳田謙十郎	論文の不備未熟の点を明らかにしていきたい旨、田辺君が西田の哲学からゾルレンが出ないと言っていることについて
昭和15年	1940	10	14	西田幾多郎	高坂正顕	帰洛の確認
昭和15年	1940	10	16	西田幾多郎	高坂正顕	東京に講義のついでに寄るように
昭和15年	1940	10	19	西田幾多郎	高坂正顕	河合君に切符の世話になったこと
昭和15年	1940	10	25	西田幾多郎	高坂正顕	引用書の問い合わせ
昭和15年	1940	10	25	西田幾多郎	高坂正顕	28日に帰洛予定
昭和15年	1940	10	26	西田幾多郎	高坂正顕	礼状
[昭和15年]	1940	11	18	西田幾多郎	柳田謙十郎	『行為的世界』への期待、「ポイエシスとプラクシス」を読むこと
昭和15年	1940	12	05	西田幾多郎	高坂正顕	苦しいみ（ママ）にあった、本の問い合わせ
昭和15年	1940	12	26	西田幾多郎	高坂正顕	来月10日に出立予定、病気は日に日に恢復
昭和16年	1941	01	03	西田幾多郎	柳田謙十郎	新しい倫理学を構成したい旨
昭和16年	1941	01	21	西田幾多郎	柳田謙十郎	図書寄贈礼状
昭和16年	1941	01	29	西田幾多郎	柳田謙十郎	『行為的世界』の感想
[昭和16年]	1941	02	08	西田幾多郎	高坂正顕	下村寅太郎の文理での待遇、歴史哲学について

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、毛筆	1		D-24	消印鎌倉・奉祝 紀元二千六百年	D	24	
封筒・便箋、ペン	1・2	1416		消印鎌倉、全集の日付「十五日」は誤り	D	172	
葉書、ペン	1		B-135	消印鎌倉、西田は「Feb. 2nd」と記すが、消印の「15.3.2」の方が恐らく正しい	B	135	
葉書、ペン	1		B-134	消印鎌倉・奉祝 紀元二千六百年	B	134	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1437		消印左京	D	177	
葉書、ペン	1	1438		消印左京・無駄を省いて国債報国	D	29	
葉書、毛筆	1		D-21	消印左京	D	21	
葉書、ペン	1		B-133	消印左京	B	133	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1445		消印左京	D	174	
葉書、ペン	1	1449		消印左京	D	32	
葉書、ペン	1	1455		消印左京	D	30	
葉書、ペン	1		B-125	消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	B	125	
葉書、ペン	1	1471		消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	B	123	
葉書、ペン	1	1475		消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	B	124	
葉書、ペン	1	1477		消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	D	31	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1478		消印不明	D	191	
葉書、ペン	1	1482		消印鎌倉・胸に愛国 手に国債	D	33	
葉書、ペン	1		B-126	消印鎌倉・国債の力で築け新東亜	B	126	
葉書、ペン	1		B-128	消印鎌倉・国債の力で築け新東亜	B	128	
葉書、ペン	1		B-136	消印左京・国債の力で築け新東亜	B	136	
葉書、ペン	1	1506		消印鎌倉・国債の力で築け新東亜	B	127	
葉書、ペン	1		B-130	消印鎌倉・国債の力で築け新東亜	B	130	
葉書、ペン	1		B-129	消印鎌倉・国債の力で築け新東亜	B	129	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1515		消印不明	D	113	
葉書、鉛筆（宛名ペン）	1	1518		消印左京	B	132	
葉書、ペン	1		B-131	消印左京	B	131	
葉書、ペン	1	1526		消印左京	D	34	
葉書、ペン	1		D-22	消印鎌倉・銃後の護りを堅めませう	D	22	
封筒・便箋、ペン	1・3	1539		消印鎌倉	D	173	
封筒・便箋、ペン	1・6	1546		消印鎌倉、封筒表に「16年?」の鉛筆書あり	A	36	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和16年	1941	02	09	西田幾多郎	高坂正顕	Sの文理大への就職
昭和16年	1941	02	16	西田幾多郎	高坂正顕	下村寅太郎の文理着任のこと
昭和16年	1941	02	20	西田幾多郎	高坂正顕	河合君の子供のこと
昭和16年	1941	02	24	西田幾多郎	柳田謙十郎	手紙への返答
昭和16年	1941	03	05	西田幾多郎	高坂正顕	山本に河合君の子供のことを伝えた
昭和16年	1941	03	15	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の高野山大学への出講依頼
＊［昭和16年］	1941	03	15	鈴木大拙	西田幾多郎	高坂の高野山大学への出講依頼
昭和16年	1941	03	20	西田幾多郎	高坂正顕	柳田君のこと有難う、大拙にそう伝えます
昭和16年	1941	04	07	西田幾多郎	柳田謙十郎	お目にかかりたい旨
昭和16年	1941	06	16	西田幾多郎	柳田謙十郎	理解されぬことへの怒り、「国家理由の問題」の刊行
昭和16年	1941	08	14	西田幾多郎	高坂正顕	「象徴的人間」拝受
昭和16年	1941	09	25	西田幾多郎	柳田謙十郎	「国家理由の問題」を読んだら、何でもいってほしい旨
＊［昭和16年］	1941	09	29	西田幾多郎	高坂正顕	高坂「祭り」への感想、ローマと中国の文化比較
＊［昭和16年］	1941	10	10	西田幾多郎	柳田謙十郎	「国家理由の問題」の感想への礼および解説、16日頃帰洛
昭和17年	1942	03	22	西田幾多郎	務台理作	野崎君の遺稿出版の件
昭和17年	1942	05	03	西田幾多郎	高坂正顕	近衛（文麿）の次男（通隆）について、昨今の国史学への批判
昭和17年	1942	06	17	西田幾多郎	高坂正顕	「野崎遺稿」の序文送付、「別紙の拙序」同封の旨あり
昭和17年	1942	07	03	西田幾多郎	柳田謙十郎	菊池『物質の構造』を評した湯川の短文の問い合わせ
昭和17年	1942	09	28	西田幾多郎	高坂正顕	飯塚氏が良かろうと言うので来月から鎌倉行
昭和17年	1942	11	07	西田幾多郎	柳田謙十郎	亡き子息への弔い
昭和18年	1943	01	14	西田幾多郎	高坂正顕	書物（プラトン）送付の依頼
昭和18年	1943	01	25	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の『歴史哲学』出版、西田の歴史的世界の論文、言論報国会のことなど
［昭和18年］	1943	01	25	西田幾多郎	柳田謙十郎	自著論文のこと、大拙・木村君のこと
昭和18年	1943	03	03	西田幾多郎	柳田謙十郎	柳田の亡き子息のこと、自己の哲学の回顧
昭和18年	1943	04	29	西田幾多郎	高坂正顕	帰洛予定の変更、来月20日過ぎの予定
昭和18年	1943	05	11	西田幾多郎	柳田謙十郎	帰洛の予定、『思想』に書いたものについて

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1		B-118	消印鎌倉・銃後の護りを堅めませう	B	118	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2	1552		消印鎌倉?	A	35	
葉書、ペン	1		B-121	消印鎌倉・求めよ国債 銃後の力	B	121	
葉書、ペン	1		D-23	消印鎌倉・求めよ国債 銃後の力	D	23	
葉書、ペン	1		B-122	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	122	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3		A-34-1	消印不明、鈴木大拙からの手紙を同封	A	34	1
便箋、毛筆	1		A-34-2	A-34-1 に同封	A	34	2
葉書、ペン	1		B-120	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	120	
葉書、ペン	1		D-35	消印左京	D	35	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1579		消印左京	D	185	
葉書、毛筆	1		B-119	消印鎌倉・赤心防諜 揺がぬ日本	B	119	
葉書、ペン	1		D-36	消印鎌倉	D	36	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2	1612		消印鎌倉、封筒表に「一七年」の鉛筆書あり、全集では16年に収録	A	40	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1836		消印鎌倉、全集では昭和18年とする	D	180	
葉書、毛筆	1	1649		消印左京、表に「19.3.22」の鉛筆書あり	N	5	
葉書、毛筆	1	1665		消印左京	B	116	
封筒・便箋、毛筆	1・1	1680		消印左京	A	2	
葉書、ペン	1	1681		消印左京・無駄を省いて国債報国	D	38	
葉書、毛筆	1		B-117	消印左京	B	117	
封筒・和紙、毛筆	1・1	1713		消印鎌倉	D	178	
葉書、ペン	1	1726		消印鎌倉	B	105	
封筒・便箋、ペン	1・4	1729		消印熱海、封筒表に「18年」の鉛筆書あり	A	39	
封筒・便箋、ペン	1・3	1728		消印不明	D	179	
封筒・便箋、ペン	1・4	1744		消印東京横須賀間	D	183	
葉書、ペン	1		B-115	消印鎌倉	B	115	
葉書、ペン	1	1770		消印鎌倉	D	39	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和18年	1943	05	24	西田幾多郎	高坂正顕	『中央公論』所載の高坂論文について、家内病気
昭和18年	1943	06	08	西田幾多郎	高坂正顕	読売新聞のコラム「波長」への非難
＊[昭和18年]	1943	07	06	西田幾多郎	柳田謙十郎	大拙との会について、鎌倉行の予定
昭和18年	1943	07	15	西田幾多郎	柳田謙十郎	『読書人』の借用願
昭和18年	1943	07	16	西田幾多郎	柳田謙十郎	とりあえずの別れの挨拶
昭和18年	1943	08	24	西田幾多郎	柳田謙十郎	字書作成のこと、現今の思想界の問題、己の死、第五論文集の出版
昭和18年	1943	08	27	西田幾多郎	高坂正顕	ベレジャドフ（ママ）The meaning of Historyの問い合わせ
昭和18年	1943	09	01	西田幾多郎	高坂正顕	『公論』に対する非難
昭和18年	1943	09	06	西田幾多郎	高坂正顕	書物送付への礼
昭和18年	1943	09	09	西田幾多郎	高坂正顕	高坂の出版祝い、『歴史の意味』の感想、高坂の北支行について
昭和18年	1943	09	17	西田幾多郎	高坂正顕	ベルデイヤエフ2冊の礼、支那行のこと
昭和18年	1943	10	06	西田幾多郎	高坂正顕	Berdjajew（ママ）の返却
昭和18年	1943	10	10	西田幾多郎	高坂正顕	ベルヂャエフの感想、高坂の近刊への期待
昭和18年	1943	10	29	西田幾多郎	高坂正顕	弘文堂の来訪、静子のこと、小泉信三の文教顧問就任について
＊[昭和18年]	1943	11	02	西田幾多郎	柳田謙十郎	はがきへの返事、帰洛が無理なこと
昭和18年	1943	11	20	西田幾多郎	高坂時生	正顕の消息を尋ねる
昭和18年	1943	12	10	西田幾多郎	高坂時生	正顕の帰宅を尋ねる
昭和18年	1943	12	12	西田幾多郎	柳田謙十郎	浦和高校のすすめ
昭和18年	1943	12	26	西田幾多郎	高坂正顕	電報の拝受
昭和19年	1944	01	06	西田幾多郎	高坂正顕	さうその通りだ、東京へ来た時話を聞きたい
昭和19年	1944	01	18	西田幾多郎	柳田謙十郎	浦和高校のこと、時局の批判、近著について
昭和19年	1944	01	24	西田幾多郎	高坂正顕	蔵書送付の依頼
昭和19年	1944	03	09	西田幾多郎	柳田謙十郎	「論理と数理」「国体」「ライプニッツの予定調和」の解説、浦和のこと
昭和19年	1944	04	10	西田幾多郎	柳田謙十郎	西田の理解者としての柳田について
昭和19年	1944	04	15	西田幾多郎	高坂正顕	来月初の帰京、学士院のパスについて
昭和19年	1944	04	21	西田幾多郎	柳田謙十郎	謄写原稿の欠落部分を送ってほしい旨
昭和19年	1944	04	22	西田幾多郎	高坂正顕	京都行の汽車の手配、論理について
昭和19年	1944	04	25	西田幾多郎	柳田謙十郎	謄写原稿拝受、来月初に帰洛の予定

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
葉書、ペン	1	1774		消印鎌倉	B	114	
封筒・便箋、ペン	1・2	1778		消印鎌倉、「波長」の切り抜きを糊付け	A	31	
葉書、ペン	1		D-41	消印なし	D	41	
葉書、ペン	1	1793		消印左京・貯蓄報国	D	37	
封筒・便箋、毛筆	1・3	1794		消印左京	D	186	
封筒・便箋、ペン	1・7	1810		消印鎌倉	D	112	
葉書、ペン	1	1813		消印鎌倉	B	113	
封筒・便箋、ペン	1・5	1815		消印不明、水損のため宛先が消えかかっている	A	28	
葉書、ペン	1		B-112	消印鎌倉	B	112	
封筒・便箋、ペン	1・4	1818		消印鎌倉、水損あり	A	30	
葉書、ペン	1	1821		消印鎌倉	B	106	
葉書、ペン	1	1834		消印鎌倉	B	107	
葉書、ペン	1	1837		消印鎌倉	B	109	
封筒・原稿用紙、ペン（封筒毛筆）	1・1		A-20	消印鎌倉	A	20	
葉書、ペン	1		D-40	消印鎌倉	D	40	
葉書、ペン	1		B-108	消印鎌倉	B	108	
葉書、ペン	1		B-110	消印鎌倉	B	110	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2	1859		消印鎌倉	D	184	
葉書、ペン	1		B-111	消印鎌倉	B	111	
葉書、ペン	1		B-104	消印鎌倉	B	104	
封筒・便箋、ペン	1・3	1880		消印鎌倉	D	182	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1882		消印鎌倉、封筒破損	A	32	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	1907		消印鎌倉	D	181	
葉書、ペン	1	1925		消印鎌倉	D	43	
葉書、ペン	1		B-95	消印左京	B	95	
葉書、ペン	1	1933		消印鎌倉	D	45	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	1934		消印鎌倉極楽寺、速達、封筒破損	A	33	
葉書、ペン	1		D-44	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	D	44	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和19年	1944	05	02	西田幾多郎	柳田謙十郎	原稿をもう少し貸して欲しいこと、浦和高校の要注意人物
昭和19年	1944	05	07	西田幾多郎	高坂正顕	河合君の世話で無事帰洛、自著「国体」の感想を聞く
昭和19年	1944	05	14	西田幾多郎	柳田謙十郎	謄写原稿のこと、田辺寿利の住所
昭和19年	1944	05	19	西田幾多郎	柳田謙十郎	日本を家族国家といわないことで注を書いた旨
昭和19年	1944	05	23	西田幾多郎	柳田謙十郎	（注を）なるべく今月中に送りたい旨
昭和19年	1944	05	26	西田幾多郎	柳田謙十郎	本日、注を送った旨
昭和19年	1944	06	19	西田幾多郎	高坂正顕	鎌倉に戻った報告、京都での高坂に対する礼
昭和19年	1944	06	19	西田幾多郎	柳田謙十郎	帰洛の知らせ、文部省と「西田哲学」について
昭和19年	1944	06	28	西田幾多郎	柳田謙十郎	国体論と文部当局、西田「デカルト哲学について」
[昭和19年]	1944	07	28	西田幾多郎	高坂正顕	文部省思想審議会による西田の審議について
昭和19年	1944	09	11	西田幾多郎	柳田謙十郎	青年の育成、岩波の第六論文集
昭和19年	1944	09	21	西田幾多郎	高坂正顕	書物送付の依頼
昭和19年	1944	09	26	西田幾多郎	高坂正顕	上京の節に持ってきてくれる由、それで結構
昭和19年	1944	10	04	西田幾多郎	高坂正顕	書物送付の追加、小包がまだ来ないこと
昭和19年	1944	10	05	西田幾多郎	高坂正顕	本が来ないこと、郵便局への確認
昭和19年	1944	10	11	西田幾多郎	高坂正顕	本が着かないため、「生命」の執筆中断
昭和19年	1944	10	11	西田幾多郎	高坂正顕	B-100の二伸、本の発送依頼
昭和19年	1944	10	12	西田幾多郎	高坂正顕	本の到着
昭和19年	1944	10	24	西田幾多郎	高坂正顕	本の送付、静の喉の調子
昭和19年	1944	11	03	西田幾多郎	柳田謙十郎	自著の解説
昭和19年	1944	11	13	西田幾多郎	高坂正顕	岩波からクロード・ベルナール送付の礼、「生命」の発表
[昭和19年]	1944	12	16	西田幾多郎	高坂正顕	「国体論」の改題と、発表、ドストエフスキーおよび時局論
昭和20年	1945	03	09	西田幾多郎	高坂正顕	本の確認、発送依頼
昭和20年	1945	03	10	西田幾多郎	高坂正顕	牧君らに理解してもらいなさい、Aischylus（ママ）の確認依頼
昭和20年	1945	03	15	西田幾多郎	高坂正顕	自宅（京都）にある本の送付依頼
昭和20年	1945	03	17	西田幾多郎	柳田謙十郎	「生命論 一」が出た旨
＊[昭和20年]	1945	04	08	西田幾多郎	高坂正顕	蔵書疎開の件および時局論
昭和20年	1945	04	09	西田幾多郎	高坂正顕	P.Volz、Prophet Emeria（ママ）の送付依頼
昭和20年	1945	04	10	西田幾多郎	高坂正顕	The Essentials of Logicの送付依頼

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
封筒・便箋、ペン	1・2	1938		消印鎌倉	D	189	
葉書、ペン	1		B-102	消印左京	B	102	
葉書、ペン	1		D-47	消印左京	D	47	
葉書、ペン	1	1941		消印左京	D	50	
葉書、ペン	1	1942		消印左京	D	49	
葉書、ペン	1		D-48	消印左京	D	48	
葉書、ペン	1		B-93	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	93	
葉書、ペン	1	1947		消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	D	46	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	1949		消印鎌倉	D	187	
封筒・便箋、ペン	1・4	1967		消印不明、封筒表に「一九年」の鉛筆書あり	A	26	
封筒・便箋、ペン	1・2	1986		消印不明	D	188	
葉書、ペン	1	1996		消印鎌倉・時局の認識 躍進日本、高坂によると思われる鉛筆の書込みあり	B	97	
葉書、ペン	1		B-96	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	96	
葉書、ペン	1	2007		消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	98	
葉書、ペン	1		B-99	消印神奈川片瀬	B	99	
葉書、ペン	1		B-100	消印神奈川片瀬	B	100	
葉書、ペン	1	2012		消印不明、速達、「19年？」の鉛筆書あり	B	101	
葉書、ペン	1		B-103	消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	103	
葉書、ペン	1	2020		消印不明、全集では「静に」ではなく「静子」	B	92	
葉書、ペン	1	2031		消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	D	51	
葉書、ペン	1	2039		消印鎌倉・時局の認識 躍進日本	B	94	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	2067		封筒破損のため消印不明、封筒表に「19年」の鉛筆書あり	A	29	
葉書、ペン	1	2135		消印鎌倉	B	89	
葉書、ペン	1		B-87	消印鎌倉	B	87	
葉書、ペン	1	2149		消印鎌倉	B	86	
葉書、ペン	1	2154		消印鎌倉	D	52	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2	2173		消印鎌倉、ペンによる「20」の重ね書、封筒表に「19年」の鉛筆書あり	A	4	
葉書、ペン	1	2174		消印鎌倉	B	83	
葉書、ペン	1	2176		消印鎌倉、B-83の続き	B	84	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和20年	1945	05	04	西田幾多郎	高坂正顕	文部省教学局への批判、「生命」印刷の件、「場所的論理と宗教的世界観」「空間」の保存について
昭和20年	1945	05	06	西田幾多郎	高坂正顕	「生命」・宗教論の出版、図書送付の依頼
昭和20年	1945	05	11	西田幾多郎	高坂正顕	諏訪で「生命」のprivate printを出すこと
昭和20年	1945	05	12	西田幾多郎	高坂正顕	本の送付依頼、「生命」論執筆の希望
昭和20年	1945	05	17	西田幾多郎	高坂正顕	布川君に託す本について
昭和20年	1945	05	19	西田幾多郎	高坂正顕	宗教論の印刷の件および蔵書送付依頼（後半欠）
昭和20年	1945	05	28	西田幾多郎	柳田謙十郎	その後の消息の問い合わせ
		09	27	西田幾多郎	高坂正顕	封筒のみ

Ⅱ　書簡（西田幾多郎宛）

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治31年	1898	01	10	西田得登	西田幾多郎	西田幾多郎の父得登最後の手紙
明治36年	1903	08	24	［道津雪門］	［西田幾多郎］	大徳寺における修養について（後半欠）
＊［明治37年以降］	1904		19	大津　勉	西田幾多郎	勲章年金証受願、死亡届の受給者心得は別紙の通りである旨
大正14年	1925	01	30	藤田豪之輔	西田幾多郎	夫人逝去の弔辞
昭和14年	1939	03	11	滝沢克己	西田幾多郎	手紙の返事への礼、田辺の論について
昭和14年	1939	08	22	鈴木大拙	西田幾多郎	「平常心」について
昭和14年	1939	09	16	鈴木大拙	西田幾多郎	釈迦・弥勒修行中の句について
昭和14年	1939	09	22	鈴木大拙	西田幾多郎	「全體作用」に関する『臨済録』中の記事について
昭和15年	1940	08	29	柳田謙十郎	西田幾多郎	「実践哲学序論」について、田辺について
昭和15年	1940	10	04	滝沢克己	西田幾多郎	手紙の返事への礼、田辺の哲学について
＊［年不詳］				鈴木大拙	［西田幾多郎］	『傳燈録』第十巻抜書、風害の見舞

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・3	2188		消印不明	A	41	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・2	2190		消印不明	A	19	
葉書、ペン	1	2198		消印鎌倉、「二十年」の鉛筆書あり	B	91	
葉書、ペン	1	2200		消印鎌倉	B	90	
葉書、ペン	1	2202		消印不明、一銭別納・鎌倉の局印もあり	B	88	
封筒・便箋、ペン	1・2	2204		消印不明	A	5	
葉書、ペン	1		D-13	消印鎌倉	D	13	
封筒、毛筆	1			消印鎌倉	A	27	

形態	数量	全集No.	翻刻No.	備考	資料番号		
コピー	3			ペンによる後筆あり	E	70	
コピー	1				E	73	
罫紙、毛筆	1		E-27	歩兵第七聯隊補充大隊の罫紙使用	E	27	
封筒・和紙、毛筆	1・1		E-22	消印山口	E	22	
封筒・便箋、ペン	1・6		E-23	消印山口	E	23	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1		E-18	消印不明	E	18	
葉書、ペン	1		E-19	消印神奈川大船、表に「受用不参」の鉛筆書あり	E	19	
葉書、ペン	1		E-20	消印神奈川大船	E	20	
封筒・便箋、毛筆	1・4		E-25	消印上京	E	25	
封筒・便箋、ペン	1・4		E-24	消印山口	E	24	
罫紙、ペン	1		E-26		E	26	

Ⅲ　書簡（西田幾多郎以外：関係者から関係者）

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治10年	1877	07	05	西田得登他	石川県権令 桐山佳孝	西田藤九郎家を西田幾多郎に相続させ再興させたい旨
大正1年	1912	12	26	［織田信恒］	近衛文麿	『国文学史講話』序文で西田の偉大さを確かめたこと、『善の研究』の研究
昭和7年	1932	04	16	木村素衛	柳田謙十郎	広島の不満＝京都への郷愁、フィヒテの翻訳・研究
＊［昭和7年］	1932	06	14	木村素衛	柳田謙十郎	木村『意思と行為』の解説
昭和9年	1934	10	04	木村素衛	柳田謙十郎	柳田のフィヒテ論への礼と言訳、フィヒテ研究の現在
昭和10年	1935	04	03	務台理作	柳田謙十郎	京都で会った折の礼状
昭和10年	1935	07	18	務台理作	柳田謙十郎	台北の自然と東京、ヘーゲルの執筆、あこがれのニーチェ
昭和10年	1935	09	23	木村素衛	柳田謙十郎	柳田のフィヒテ論への感想
昭和10年	1935	10	18	務台理作	柳田謙十郎	論文への礼、フィヒテ執筆のこと、京大哲学会への誘い
昭和10年	1935	12	07	木村素衛	柳田謙十郎	対面した挨拶、パパイヤへの期待、フィヒテの正誤表
昭和11年	1936	02	21	木村素衛	柳田謙十郎	柳田のGedanken plan、芸術について、ErosとAgape
［昭和11年］	1936	03	16	務台理作	柳田謙十郎	柳田娘の縁組、藤村と漱石の比較
［昭和11年］	1936	04	22	務台理作	柳田謙十郎	思索家同士の心情、表現に関するヘーゲル・西田の考察
昭和11年	1936	05	07	木村素衛	柳田謙十郎	西田に台湾の果物を送ること、自身の病気
昭和11年	1936	05	27	木村素衛	柳田謙十郎	病気のこと
昭和11年	1936	07	18	務台理作	柳田謙十郎	フィヒテの執筆、渡辺書店への執筆依頼
昭和11年	1936	08	31	務台理作	柳田謙十郎	良寛の事跡、三木君のパスカル、生きる路としての哲学
［昭和11年］	1936	10	27	務台理作	柳田謙十郎	柳田「知と行」への感想
昭和11年	1936	11	19	木村素衛	柳田謙十郎	近況報告
昭和11年	1936	12	12	木村素衛	柳田謙十郎	白柚への礼、日欧の文化比較、フィヒテの刊行
昭和11年	1936	12	31	務台理作	柳田謙十郎	からすみへの礼、田辺・高橋里美の議論
［昭和12年］	1937	01	10	務台理作	柳田謙十郎	「哲学と教育」の執筆、海苔の送付
［昭和12年］	1937	02	05	木村素衛	柳田謙十郎	柳田「知と行」の感想（木村自身の学問と人生の回顧、ErosとAgapeとの連関）

形態	数量	備考	資料番号		
コピー	1		E	71	
絵葉書、ペン	1	消印荒神口、「京都紫野大徳寺　Gaitokuji（ママ）、Kyoto」絵葉書　翻刻あり	E	21	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印不明	D	119	
封筒・便箋、ペン	1・9	消印不明、書面では「六月廿三日」と記す	D	118	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印京都	D	130	
絵葉書、ペン	1	消印不明、「宮殿林泉の結構壮麗なる二条離宮　Nijo-Castle、kyoto」絵葉書	D	103	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印中野	D	114	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印西陣	D	132	
葉書、ペン	1	消印中野	D	100	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印京都、「フィヒテ全知識学の基礎其他」正誤表同封（柳田・淡野宛）	D	131	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印西陣	D	133	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明、封筒表に「十一年」の鉛筆書あり	D	115	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印不明、封筒表に「十一年」の鉛筆書あり	D	72	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印京都、封筒裏に書込みあり「先生に果物を送るのは、一度に沢山送るよりも思ひ出づるに任せて時々のシーズンのものを送ったら、先生も大変喜ばれると思ふ」	D	134	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印西陣	D	135	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印不明	D	73	
封筒・便箋、ペン	1・7	消印不明、書面では「八月末日」と記す	D	74	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明、鉛筆による「11」の重ね書あり	D	75	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印西陣、書簡３枚目に切取線（手書）あり	D	136	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印不明	D	137	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明	D	76	
葉書、ペン	1	消印杉並、ペンによる「12.1.10」の重ね書あり	D	101	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明、ペンによる「12.2.5」の重ね書あり	D	138	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和12年	1937	02	09	務台理作	柳田謙十郎	柳田父に対する弔辞、自宅への誘い（地図つき）
昭和12年	1937	03	05	木村素衛	柳田謙十郎	柳田の批評について（西田・フィヒテとの交錯・響鳴、体験に裏付けられた思想表現）
昭和12年	1937	07	11	務台理作	柳田謙十郎	柳田の批評への礼および議論
昭和12年	1937	09	22	木村素衛	柳田謙十郎	自著フィヒテについて
昭和12年	1937	10	08	木村素衛	柳田謙十郎	文旦と論文への礼、近況報告
[昭和12年]	1937	10	21	木村素衛	柳田謙十郎	柳田論文に対する感想
昭和12年	1937	11	03	務台理作	柳田謙十郎	柳田「弁証法的世界の倫理」の感想、田辺への批判、岩井君の死
昭和12年	1937	11	17	木村素衛	柳田謙十郎	原稿への礼、高坂『歴史的世界』について
昭和12年	1937	12	07	木村素衛	柳田謙十郎	原稿削除の事情説明、京都の秋、来年度の講義
昭和12年	1937	12	25	木村素衛	柳田謙十郎	柳田家の病人見舞い、洋行のすすめ
昭和13年	1938	03	27	木村素衛	柳田謙十郎	ご息女のこと、柳田の論文執筆について、シンチンゲル「ゲーテの背景」の翻訳、淡野君の来訪
昭和13年	1938	04	06	務台理作	柳田謙十郎	柳田娘の平安高女入学、柳田家が台北・京都に分かれること
昭和13年	1938	09	26	務台理作	柳田謙十郎	柳田の批評文（『哲学研究』）への感想
昭和13年	1938	10	06	木村素衛	柳田謙十郎	原稿の到着、芸術と実践＝意志と感情の問題
昭和13年	1938	10	26	木村素衛	柳田謙十郎	弘文堂に提出する原稿について
昭和13年	1938	11	20	務台理作	柳田謙十郎	務台の咽喉カタル、世良君のこと、自著の解説
昭和14年	1939	01	24	木村素衛	柳田謙十郎	文部省教学官のこと
昭和14年	1939	01	25	田辺　元	柳田謙十郎	教学官任官のすすめ
昭和14年	1939	01	25	木村素衛	柳田謙十郎	文部省教学官のこと、談合のため上京のすすめ
昭和14年	1939	02	03	木村素衛	柳田謙十郎	文部省教学官に関する意見
昭和14年	1939	02	06	務台理作	柳田謙十郎	文部省教学局の人事
昭和14年	1939	02	07	務台理作	柳田謙十郎	文部省の人事について上京のすすめ
昭和14年	1939	02	08	木村素衛	柳田謙十郎	文部省教学官のこと
昭和14年	1939	02	12	務台理作	柳田謙十郎	文部省の人事、ゲーテとドイツについて
[昭和14年]	1939	02	12	田辺　元	柳田謙十郎	教学官の辞退について
昭和14年	1939	02	15	木村素衛	柳田謙十郎	学生の紹介
				三浦広吉	木村素衛	台北帝国大学医学部について
昭和14年	1939	02	25	木村素衛	柳田謙十郎	学生の件への礼
昭和14年	1939	03	10	田辺　元	柳田謙十郎	柳田の著書寄贈への礼
昭和14年	1939	03	11	務台理作	柳田謙十郎	著書2冊への礼
昭和14年	1939	03	30	務台理作	柳田謙十郎	柳田上京への案内、茗渓会館のこと、世良君の挙式

形態	数量	備考	資料番号		
封筒・便箋、ペン	1・2	消印荻窪、2枚目裏にメモあり	D	77	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印京都	D	139	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	消印不明	D	98	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印西陣	D	128	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印「京都□□」	D	124	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印不明、封筒表に「12年」の鉛筆書あり	D	123	
封筒・便箋、ペン	1・6	消印不明	D	78	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印西陣	D	125	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印西陣	D	126	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印西陣	D	127	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	129	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印不明、封筒表に「13」の鉛筆書あり	D	91	
葉書、ペン	1	消印荻窪	D	102	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	146	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印太秦	D	147	
封筒・便箋、ペン	1・8	消印不明、封筒表に「13」の鉛筆書あり	D	83	
封筒・便箋、ペン	1・11	消印京都出雲路宿・台北、航空郵便、「厳親展」と表書	D	150	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印京都吉田、航空郵便	D	120	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印京都衣笠・台北、航空郵便	D	145	
封筒・罫紙、ペン	1・3	消印京都百万遍・台北、航空郵便	D	152	
封緘葉書、ペン	1	消印京橋、航空郵便	D	99	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印荻窪、航空郵便	D	82	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印上京、封筒表に「14」の鉛筆書あり	D	140	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明	D	80	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明、封筒表に「14」と鉛筆書	D	121	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印七条、学生の手紙を同封	D	148	1
原稿用紙、ペン	1	D-148-1に同封	D	148	2
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	149	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印左京	D	3	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明	D	81	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印荻窪	D	92	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和14年	1939	07	09	務台理作	柳田謙十郎	固体・世界・種の関係、高坂君の議論、世良君の論文通過
＊［昭和14年］	1939	10	13	木村素衛	柳田謙十郎	自著に対する柳田の感想への礼、「表現」をめぐる田辺批判
昭和14年	1939	10	25	木村素衛	柳田謙十郎	「表現」について、高坂の人文科学研究所就任
昭和14年	1939	12	23	田辺　元	柳田謙十郎	『実践哲学としての西田哲学』への礼と感想
昭和14年	1939	12	30	務台理作	柳田謙十郎	西田哲学との関係
昭和15年	1940	02	23	木村素衛	柳田謙十郎	美学の論文と随筆、日本人論、西田哲学論述について
昭和15年	1940	03	01	務台理作	柳田謙十郎	子供のこと、批評への礼、存在と論理、西田と会ったこと
昭和15年	1940	05	07	田辺　元	柳田謙十郎	柳田「精神史」寄贈への礼、特に田辺の論について
昭和15年	1940	05	12	務台理作	柳田謙十郎	柳田「日本思想の現在及将来」への感想、完成のデメリット、H.Hesseとドストイェフスキー
＊［昭和15年］	1940	05	16	柳田謙十郎	柳田不二・陽一	父からの訓戒
＊［昭和17年以前］	1942			柳田謙十郎	柳田陽一	父からの訓戒
昭和15年	1940	06	24	務台理作	柳田謙十郎	再度文部省教学局の人事について
昭和15年	1940	07	13	臼井二尚	柳田陽一	手紙への返事、借用書を同封した旨
＊［昭和15年］	1940	08	12	務台理作	柳田謙十郎	西田と務台の考え方が似ていること
昭和15年	1940	07	29	田辺　元	柳田謙十郎	田辺の引越への礼、近況報告
昭和15年	1940	08	22	田辺　元	柳田謙十郎	礼状
昭和15年	1940	10	28	務台理作	柳田謙十郎	手紙への礼、親指山の思い出、鎌倉に西田を訪ねたこと
昭和15年	1940	10	30	木村素衛	柳田謙十郎	社会状況への不満、書物のこと、上高地に行ったこと
昭和16年	1941	01	20	田辺　元	柳田謙十郎	著書送付への礼
昭和16年	1941	01	24	山内得立	柳田謙十郎	柳田『行為的世界』への感想（西田哲学の枠組から抜けられぬ弱点）
昭和16年	1941	02	01	木村素衛	柳田謙十郎	柳田の論文に関すること
昭和16年	1941	02	04	木村素衛	柳田鎌十郎（ママ）	帰朝の催促

形態	数量	備考	資料番号		
封筒・便箋、ペン	1・4	消印荻窪	D	93	
封筒・便箋、ペン	1・10	消印不明、封筒表に「14」の鉛筆書と「8」の朱書あり	D	117	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印京都衣笠・台北、航空郵便	D	151	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印左京	D	122	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印荻窪	D	94	
封筒・便箋、ペン	1・4	消印西陣	D	153	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明	D	84	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印左京	D	4	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明	D	86	
封筒・便箋、毛筆	1・1	消印不明、書面では「五月十五日」と記す、別の手紙同封、田辺元の手紙も同封していたと思われる	D	104	1
便箋、毛筆	1	D-104-1に同封	D	104	2
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・6	消印不明	D	116	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印長野野沢温泉、借用書は本史料にはなし	D	107	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明	D	89	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印左京	D	11	
絵葉書、ペン	1	消印群馬□□、「煙嶺涵幽沼（栖澤の池及明鏡閣）－高原北軽井沢－ 」絵葉書	D	1	
封筒・便箋、ペン（封筒毛筆）	1・4	消印荻窪	D	79	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明、虫損あり	D	143	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印左京	D	12	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印不明	D	109	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印西陣	D	142	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印京都衣笠、航空郵便、「親展」と表書	D	141	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
＊［昭和16年］	1941	02	13	務台理作	柳田謙十郎	柳田『行為的世界』への礼と感想、時間論をめぐる田辺への批判
昭和16年	1941	02	18	木村素衛	柳田謙十郎	柳田の進路について再考の説得
［昭和16年］	1941	02	13	務台理作	木村素衛	柳田の進路について
昭和16年	1941	04	13	木村素衛	柳田謙十郎	「独乙観念論」の原稿依頼
昭和16年	1941	04	18	木村素衛	柳田謙十郎	編集者の悪口、寸心先生の手紙
昭和17年	1942	01	23	田辺　元	柳田謙十郎	柳田『道徳的精神』に対する感想、特に田辺の論について
昭和17年	1942	01	26	山内得立	柳田謙十郎	『道徳的精神』への礼・感想、陽一君と東洋史
＊［昭和17年］	1942	01	30	鈴木大拙	柳田謙十郎	著書『道徳的精神』への礼、西田に会ったか
昭和17年	1942	06	02	鈴木大拙	柳田謙十郎	柳田の入来への期待、西谷・高山君も来る
昭和17年	1942	09	29	鈴木大拙	柳田謙十郎	柳田へのたしなめ、世相を鑑みること、西田も同意見
＊［昭和17年］	1942	12	03	田辺　元	柳田謙十郎	書物の礼、喪中へのお悔やみ
昭和17年	1942	12	13	田辺　元	柳田謙十郎	金山師「秘蔵宝鑰の大綱」送付の礼と感想、密教の哲学的解釈
昭和18年	1943	05	13	鈴木大拙	柳田謙十郎	帰洛と上京の予定
昭和18年	1943	05	18	務台理作	柳田謙十郎	真言の著作への期待、執筆依頼への断り
昭和18年	1943	05	25	田辺　元	柳田謙十郎	柳田「哲学年鑑」『歴史的形成の倫理』への礼
昭和18年	1943	05	28	山内得立	柳田謙十郎	『歴史的形成の倫理』への礼
＊［昭和18年］	1943	06	06	務台理作	柳田謙十郎	『歴史的形成の倫理』に対する感想
＊［昭和18年］	1943	07	14	鈴木大拙	柳田謙十郎	『読書人』のひどい内容について
昭和18年	1943	07	18	田辺　元	柳田謙十郎	柳田『日本真言の哲学』に対する感想
昭和18年	1943	07	21	鈴木大拙	柳田謙十郎	著書寄贈への礼、西田と会っていないこと
＊［昭和18年］	1943	07	23	務台理作	柳田謙十郎	『日本真言哲学』に対する感想、真宗に対する関心、『読書人』上の西田哲学批判の感想
昭和18年	1943	09	03	鈴木大拙	柳田謙十郎	10日前後に帰洛予定
昭和18年	1943	09	23	鈴木大拙	柳田謙十郎	切符手配のこと、政府発表と学校の今後、今日西田に会う予定
昭和18年	1943	11	18	田辺　元	柳田謙十郎	柳田の息子の遺作集に対する感想
昭和18年	1943	12	20	鈴木大拙	柳田謙十郎	浦和へ移転のすすめ、西田と会うこと
＊［年不詳］		09	21	鈴木大拙	柳田謙十郎	会う予定の変更、講義の願い
昭和18年	1943	11	19	山内得立	柳田謙十郎	陽一君の遺稿集に対する礼
＊［昭和19年］	1944	03	30	務台理作	柳田謙十郎	浦和高校のこと、高坂・木村・西谷・高山の上京
昭和19年	1944	04	03	小島祐馬	柳田謙十郎	浦和高校教授就任の祝い、近況報告

形態	数量	備考	資料番号		
封筒・便箋、ペン	1・7	消印不明、書面では「二月十二日」と記す	D	85	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印京都祇園、務台理作の手紙を同封	D	144	1
便箋、ペン	3	D-144-1に同封	D	144	2
封筒・便箋、ペン	1・2	消印上京	D	155	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印上京	D	154	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	7	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	110	
封筒・和紙、毛筆	1・1	消印神奈川大船	D	69	
葉書、ペン	1	消印西陣	D	58	
封筒・和紙、毛筆	1・1	消印神奈川小坂、速達	D	70	
葉書、ペン	1	消印不明	D	2	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印左京	D	10	
葉書、ペン	1	消印大船	D	59	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印不明	D	95	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印左京、封筒表に「要信」とあり	D	8	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印西陣、書面では「五月末日」と記す	D	106	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明、書面では「六月五日」と記す	D	96	
葉書、ペン	1	消印神奈川県	D	57	
封筒・便箋、ペン	1・1	消印左京	D	6	
葉書、ペン	1	消印神奈川大船	D	62	
封筒・便箋、ペン	1・5	消印不明、書面では「七月二十二日」と記す	D	97	
葉書、ペン	1	消印神奈川大船	D	61	
葉書、ペン	1	消印神奈川大船	D	60	
封筒・便箋、ペン	1・3	消印不明	D	5	
封筒・和紙、毛筆	1・1	消印神奈川小坂、速達	D	71	1
便箋、毛筆	1	D-71-1に同封、昭和18年のものか不明	D	71	2
封筒・原稿用紙、ペン	1・2	消印不明、封筒破損	D	105	
封筒・便箋、ペン	1・2	切手部分破損	D	90	
葉書、毛筆	1	消印高知	D	193	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
昭和19年	1944	04	17	木村素衛	柳田謙十郎	近況報告、学術研究会議のこと
昭和19年	1944	04	29	高坂正顕	柳田謙十郎	浦和に越したことについて、高坂『歴史哲学序説』に対する感想への解説
昭和19年	1944	05	10	篠原助市	柳田謙十郎	浦和高校教授就任の祝い
昭和19年	1944	05	13	田辺寿利	柳田謙十郎	西田をとおして借りた「國体」の原稿の返送
昭和19年	1944	06	09	木村素衛	柳田謙十郎	礼状、卒業生の転任問題
昭和19年	1944	06	23	木村素衛	柳田謙十郎	原稿の分量について
昭和19年	1944	09	25	鈴木大拙	柳田謙十郎	誘いへの断り
昭和19年	1944	09	26	木村素衛	柳田謙十郎	忙しい、西田に原稿を渡したこと
昭和19年	1944	11	19	鈴木大拙	柳田謙十郎	栗への礼、学生に会って感動したこと
昭和19年	1944	12	29	鈴木大拙	柳田謙十郎	正月に会うこと、風邪でどこにも行かず、西田にも会わず、空襲を避けるために篭居
*［昭和19～20］	1944～45		20	鈴木大拙	柳田謙十郎	戦争に対する愚痴
*［昭和20年］	1945	02	20	鈴木大拙	柳田謙十郎	人名の確認、人名録の案内
*［昭和20年］	1945	06	08	鈴木大拙	柳田謙十郎	西田の死亡通知、連絡手段のマヒ、混乱の中での消息確認
昭和22年	1947	12	30	田辺　元	柳田謙十郎	柳田の著書への礼、「庶民」という言葉遣いについて
昭和45年	1970	09	03	務台理作	柳田謙十郎	古き良き時代の思い出、世良君のこと、洪耀勲とその家族
昭和46年	1971	11	15	務台理作	柳田謙十郎	老いの嘆き、世良君のこと

Ⅳ　原稿

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
［明治24年］	1891	07		西田幾多郎		「記亡友川越君事」
明治31年	1898	10	31	西田幾多郎		「静斎遺稿の後に書す」（遺稿編纂の原稿）
大正12年	1923	02		西田幾多郎		「法と道徳」
［昭和14年］	1939			西田幾多郎	柳田謙十郎	1p「為君幾下蒼龍窟　柳田君恵存　西田幾多郎」2p西田幾多郎写真　3p以降『実践哲学としての西田哲学』序文・「哲学論文集第三　図式的説明」

形態	数量	備考	資料番号		
葉書、ペン	1	消印世田谷	D	54	
封筒・便箋	1•1	消印不明	D	108	
葉書、ペン	1	消印真鶴	D	192	
葉書、ペン	1	消印藤沢	D	194	
葉書、ペン	1	消印静岡用宗	D	55	
絵葉書、ペン	1	消印西陣、「御廟橋」絵葉書	D	53	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印大船	D	67	
葉書、ペン	1	消印左京	D	56	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印大船	D	65	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印不明	D	64	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印不明	D	66	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印不明	D	63	
葉書、ペン（宛名毛筆）	1	消印大船	D	68	
封筒・原稿用紙、ペン	1・2	消印応桑	D	9	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印荻窪・あて名には郵便番号を	D	88	
封筒・便箋、ペン	1・2	消印荻窪、書面では「十一月十六日」と記す	D	87	

形態	数量	全集	備考	資料番号		
和紙綴、毛筆	1		朱筆による添削あり、「川越淡斎小伝」と関係あるか	E	7	
和紙綴、毛筆	1	13巻	朱筆による添削あり	E	8	
原稿用紙、ペン	1	3巻		E	53	
コピー	1	9巻 13巻	1992.2.24に柳田節子氏が学習院に資料を寄贈する前に創文社がコピーをとったもの	P	1	

V　メモ

作成年	西暦	月	日	差出・作成	内容
昭和19年	1944	10	19	西田幾多郎	『哲学論文集第六』「七　数学の哲学的基礎附け」（S20.1.30）のメモ（数学は我々の計算的過程の自覚的分析から出立すべきであらう…）
［昭和19年］	1944			西田幾多郎	『哲学論文集第六』のメモ（二つの集合の比較、対応、等値の問題）
［昭和19年］	1944			西田幾多郎	『哲学論文集第六』のメモ（論理の自覚の問題）
［昭和19年］	1944			西田幾多郎	Über Mathematik、多と一の場所的統一
		04	30	西田幾多郎	プーシキンがゴーゴリの「死せる魂」を読んで…
				西田幾多郎	校正用のメモか？（自己自身に於て客なる集合 in sich dicht 間集合 abgeschlossene Menge）
					メモ「催眠薬ズルフォナール１回1.0グラム」

VI　書

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
［昭和11年］	1936	09		西田幾多郎	柳田謙十郎	「吾一以貫之」
						R-2-1の額
昭和13年	1938	12		西田幾多郎	［柳田謙十郎］	掛軸「足踏実地」
昭和14年	1939			西田幾多郎	［柳田謙十郎］	掛軸「小夜ふけてとはにかかやく星みれは千世の昔もきえとしおほゆ」
						掛軸「小夜ふけて…」の読み下しと色紙「さよふけて…」の読み下し（色紙の存在は不明）
昭和15年	1940	01		西田幾多郎	［柳田謙十郎］	掛軸「人は人吾はわれ也とにかくに吾行く道を吾は行なり」
昭和15年	1940	01		西田幾多郎	［柳田謙十郎］	掛軸「一心不生万法無然」
昭和15年	1940	03	15	西田幾多郎	三木　清	色紙「水到渠成」
				西田幾多郎	［三木　清］	掛軸「千金之弩不為鼷鼠支桟」
				西田幾多郎	［三木　清］	掛軸「あたご山いる日の如くあかあかともやし尽くさんのこれる命」

形態	数量	備考	資料番号		
原稿用紙、ペン	1		E	1	
原稿用紙、ペン	1	裏にもメモあり	E	2	
原稿用紙、ペン	1		E	3	
原稿用紙、ペン	1	裏にも鉛筆書あり	E	5	
原稿用紙、ペン	1		E	4	
無罫紙、鉛筆	1		E	6	
無罫紙、鉛筆	1		E	50	

形態	数量	備考	資料番号		
1050×325和紙、毛筆	1	作成年は柳田謙十郎『わが思想の遍歴』による	R	2	1
額	1		R	2	2
340×1475掛軸装箱有	1	箱書表「足踏実地」箱書裏「昭和十三年十二月　西田幾多郎㊞」、柳田謙十郎『わが思想の遍歴』では昭和11年9月頃の作成	C	1	
338×1407掛軸装箱有	1	箱書表「拙歌一首　小夜ふけて」箱書裏「昭和十四年春　西田幾多郎㊞」	M	4	1
便箋、ペン	2	M-4の箱の中にあり	M	4	2
410×315掛軸装箱有	1	箱書表「拙歌　人は人」箱書裏「昭和十五年一月　西田幾多郎㊞」	C	2	
408×315掛軸装箱有	1	箱書表「一心不生万法無然」箱書裏「昭和十五年一月　西田幾多郎㊞」	C	3	
18×21色紙包有	1	作成年月日は第四種郵便の封筒の消印による	I	2	
334×1306掛軸装箱有	1		M	1	
315×1367掛軸装箱有	1		M	2	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
				西田幾多郎	［久松真一］	掛軸「見無形之形聞無声之聲」
				西田幾多郎		色紙「来日春光…」
				西田幾多郎		色紙「人寿不超百…」
				［西田幾多郎］		色紙、練習用か筆ならしのあと

Ⅶ　写真

作成年	西暦	月	日	撮影・差出	受取・宛名	内容
明治24年	1891	02	11	吉田好二撮影		不成文会々員写真（山本冉輔・藤岡作太郎・西田幾多郎・金田良吉・川越宗孝）
明治24年	1891	06	10	吉田好二撮影		長土塀党写真（宮本己一郎・毛利可久・太田三郎・西田幾多郎・友田鎮三・倉知銕吉）
明治24年	1891	06	下旬			宮岡尚・得田寿三（ママ）写真
明治24年	1891	07		吉田好二撮影		ベントン氏送別写真（ベントン・藤岡・金田・西田）
明治34年	1901	04	01	得田	西田	得田一家の写真か
［昭和3年］	1928					西田幾多郎写真
昭和10年	1935	10				西田幾多郎・三木清写真
昭和16年	1941	03				柳田謙十郎ほか写真（台北帝大研究室廊下　柳田・世良寿男・岡野留次郎・淡野安太郎）
昭和17年頃	1942					柳田謙十郎・鈴木大拙ほか写真
昭和18年	1943			田村茂撮影		西田幾多郎顔写真
昭和20年	1945	06	13			西田幾多郎告別式後集合写真
［昭和21年］	1946					西田幾多郎一周忌の際、墓前にての集合写真
昭和24年	1949	05	29			柳田謙十郎・鈴木大拙ほか写真
昭和31年	1956					鈴木大拙顔写真
				吉田好二撮影		西田正子写真
				鈴木真一撮影・独峯生	西田	洪川老大師写真
				東京写真家倶楽部松本政利撮影		西田幾多郎顔写真

形態	数量	備考	資料番号		
343×1388掛軸装箱有	1	箱書表「西田幾多郎先師真蹟」箱書裏「門下抱石覧直㊞」	M	3	
色紙包有	1		I	3	
色紙包有	1		I	4	
色紙包有	1		I	1	

形態	数量	備考	資料番号		
79×125	1	裏に各人氏名と撮影年月日の毛筆書あり　「K.Yoshida　KOENCHI KANAZAWA　吉田好二　石川縣金澤公園地本店」	E	15	
106×162	1	裏に各人氏名と撮影年月日の毛筆書あり　「K.Yoshida　KOENCHI KANAZAWA　吉田好二　石川縣金澤公園地本店」	E	14	
53×105	1	裏に各人氏名と撮影年月日および「学校帰途写之」の毛筆書と相川印あり	E	12	
65×107	1	裏に各人氏名と撮影年月日および「為弁頓氏送別写之」の毛筆書あり「K.Yoshida　KOENCHI　KANAZAWA　吉田好二　石川縣金澤公園地本店」	E	13	
108×166	1	裏に「呈　西田様　明治三十四年四月一日撮影　得田」の毛筆書あり	E	11	
276×214	1	年代は『西田哲学選集』による	G	11	
108×148	1	裏に「三木全集第九巻口絵」の鉛筆書、「okt(ママ). 1935」のペン書あり	F	3	
112×158	1	裏に「昭和十六年三月撮影　四十九才」のペン書、撮影場所と各人氏名の鉛筆書あり	G	6	
143×104	1	裏に「1942年頃　於大谷大学」のペン書あり	G	7	
172×142	1	表に「西田幾多郎」の毛筆書あり、裏に「昭和十八年」のペン書、「撮影　田村茂」のスタンプあり	F	1	
194×142	1	裏に「昭和廿年六月十三日　西田先生告別式后　於東慶寺」のペン書あり	G	4	
159×106	1		G	5	
100×74	1	裏に「鈴木大拙先生渡米記念　一九四九年五月二九日」の鉛筆書あり	G	8	
125×178	1	裏に「London1956？　鈴木大拙氏」の鉛筆書あり	G	1	
76×108	1	裏に「河北郡宇ノ気村　林一枝様　金沢ニテ　西田正子」の毛筆書あり「K.Yoshida　KOENCHI　KANAZAWA」	E	16	
62×105	1	裏に「洪川老大師真影　贈西田君　独峯生」の毛筆書あり　「S.Suzuki KUDANZAKA, TOKIO, JAPAN」	E	17	
160×209	1	裏に「東京写真家倶楽部松本政利　東京市渋谷区幡ヶ谷原町八〇〇番地」のスタンプあり	F	2	

作成年	西暦	月	日	撮影・作成	受取・宛名	内容
						務台理作写真
						掛軸「人は人吾はわれ也…」の写真
						西田幾多郎写真
						西田幾多郎・木村素衛写真
						西田幾多郎写真（同一物大小２枚）
						西田幾多郎と田辺元写真

Ⅷ　証書・賞状・辞令など

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治13年	1880	11	13	石川県学習課	河北郡新化小学校高等四級生西田幾多郎	学業優等につき扇1本を贈与された際の目録
明治15年	1882	03	29	石川県河北郡森村七窪村宇野気新村鉢伏村連合公立新化小学校	石川県平民西田幾多郎	小学校高等科第七年前期卒業仮証書
明治15年	1882	03	29	石川県河北郡森村七窪村宇野気新村鉢伏村連合公立新化小学校	石川県平民西田幾多郎	小学校高等科第七年後期卒業証書
明治15年	1882	04	30	石川県河北郡森村七窪村宇野気新村鉢伏村連合公立新化小学校	西田幾多郎	小学校高等科第八年前期卒業証書
明治15年	1882	06	07	小川清太	河北郡新化小学校高等科第三級後期生西田幾太郎（ママ）	後来進歩ノ望ミヲ嘱セラレシ生徒ヘ旧領主ヨリ龍文石硯一個宛贈ス
明治20年	1887	07	20	石川県専門学校	石川県平民西田幾太郎（ママ）	石川県専門学校附属初等中学科卒業証書

形態	数量	備考	資料番号		
110×158	1	裏に「務台理作氏」の鉛筆書あり	G	2	
210×162	1	裏に「この写真を許可なく印刷物や出版物に使用することはお断りします。朝日新聞　京都支局」のスタンプあり	G	3	
115×160	1	裏に「西田先生」の鉛筆書あり	G	9	
80×118	1		G	10	
218×300、102×166	2		L	1	
6×7判（ネガ）	7	（ネガ）4カット（10枚）及びその中の1カットの一部（西田部分・L-1）の背景を消し、複写したもの1カット（6枚）	L	2	

形態	数量	備考	資料番号		
罫紙、毛筆	1		E	54	
卒業証書、毛筆	1	裏に印３つあり	E	56	
卒業証書、毛筆	1		E	57	
卒業証書、毛筆	1		E	58	
罫紙、毛筆	1		E	55	
卒業証書、毛筆	1	裏に校長武部直松以下教員の名と印あり	E	59	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治34年	1901	03		道津雪門	西田幾多郎	寸心号授与証
大正9年	1920	10	26	本願寺	西田幾太郎（ママ）	仏教大学講師辞令、特授待遇ス
大正9年	1920	10	26	本願寺	西田幾太郎（ママ）	仏教大学講師辞令、月俸金50円支給ス

Ⅸ　履歴書

作成年	西暦	月	日	差出・作成	内容
［明治20年以降］	1887			西田幾多郎	西田幾多郎履歴書
［明治27年以降］	1894			西田幾多郎	西田幾多郎履歴書
［明治29年以降］	1896			西田幾多郎	西田幾多郎履歴書

Ⅹ　領収書・請求書など

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治39年	1906	06	27	東京火災保険株式会社金沢支店長心得大野精介	陸　亦吉	商店一棟の保険料領収証（金沢市上今町21番地ノ3）
明治40年	1907	04	10	私立石川県教育会地方委員田中清章	西田幾太郎（ママ）	教育会会費領収証
明治41年	1908			金沢市収入役大久保鐵三郎	西田幾太郎（ママ）	県税・市税領収書、明治41年第3期分
明治41年	1908			金沢市収入役大久保鐵三郎	西田幾太郎（ママ）	県税・市税領収書、明治41年第4期分
明治41年	1908			金沢市収入役大久保鐵三郎	西田幾多郎	祖税・所得税領収書、明治41年第3期分

形態	数量	備考	資料番号		
コピー	1		E	72	
罫紙、毛筆	1		E	60	
罫紙、毛筆	1		E	61	

形態	数量	備考	資料番号		
和紙罫紙、毛筆	1		E	65	
和紙罫紙、毛筆	1		E	66	
和紙罫紙、毛筆	1		E	67	

形態	数量	備考	資料番号		
領収書、毛筆	1		E	42	
領収書、毛筆	1		E	37	
領収書、毛筆	1		E	33	
領収書、毛筆	1		E	34	
領収書、毛筆	1		E	35	

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
明治41年	1908			金沢市収入役大久保鐵三郎	西田幾多郎	祖税・所得税領収書、明治41年第4期分
明治41年	1908	08	06	横山次三郎	西田	別紙通帳〆高を支払いしてほしい旨
1908年（明治41年）	1908	09	25	R.Friedländer & Sohn (Berlin)	K.Nishida	RECHNUNG（チェーホフなど本の計算書）
明治41年	1908	10	04	日本生命保険株式会社北陸出張所所長中西嘉太郎	西田幾多郎	養老生命保険料領収証、明治41年9月7日より半年分
明治41年	1908	11	25	K.Nishida	R.Friedländer & Sohn	外国郵便為替金受領証書
明治41年	1908	12	10	仁寿生命保険合資会社金沢代理店高岡五平	西田幾多郎	保険料領収証、明治41年11月29日より3ヶ月分
明治41年	1908	12	11	育英社金沢市分社会計主任千田登文	西田幾多郎	寄贈金領収証、明治41年11月分
明治42年	1909	01	24	井上秋五郎	西田幾多郎	地所家屋抵当競売入用金受取
明治42年	1909	03	11	仁寿生命保険合資会社金沢代理店高岡五平	西田幾多郎	保険料領収証、明治42年2月28日より3ヶ月分
明治42年	1909	03	24			公債売却代金、利払などの計算書
大正11年	1922	07	31	春徳厚記	天津取引所	椅子、書架等請求証、領収証
昭和15年	1940	11	03	発駅京都西田	着駅東京上田	小荷物切符（本の発送）

形態	数量	備考	資料番号		
領収書、毛筆	1		E	36	
封筒・和紙、毛筆	1・1		E	29	
計算書、ペン	1		E	43	
領収書、ペン・毛筆	1		E	41	
領収書、ペン	1	E-43の代金　郵便為替ニ依リ送達ノ為受領シタリ	E	44	
領収書、毛筆	1		E	39	
領収書、毛筆	1		E	38	
和紙、毛筆	1		E	30	
領収書、毛筆	1		E	40	
罫紙、毛筆・朱筆	1	罫紙の「十二」は国立金沢十二銀行のことか？	E	31	
和紙、毛筆	3	3枚が虫ピンにより一括	E	32	
小荷物切符、毛筆	1		E	49	

XI　その他文書

作成年	西暦	月	日	差出・作成	受取・宛名	内容
嘉永元年	1848	03		［西田藤右衛門］		嘉永元年御達申上ル略由緒正控（西田藤右衛門新登由緒書）
明治38年	1905	03	29	石川県河北郡七塚村戸籍吏今井二郎		高橋由太郎（西田幾多郎妹すみの夫）家の戸籍謄本
明治40年	1907	11	16	金沢市医師井上鍬吉・岡嶋良吉	平民幾多郎二男西田外彦	西田外彦種痘証
明治41年	1908	02	18	金沢市百姓町四十五番地医士村田太次郎	西田ヤヨイ	西田ヤヨイ種痘証
昭和14年	1939	06	15			貴族院帝国学士院会員議員選挙名簿（第一部）
昭和56年	1981	04	06	京都市左京区長清水芳信		西田幾多郎～西田幾久彦除籍謄本
						独乙語学学生人名名簿　歩兵中尉に西田憑次郎の名あり
				陸軍歩兵大尉船橋芳蔵		陸軍歩兵大尉船橋芳蔵名刺
				水野利中		水野利中名刺
				西田得登		西田家墓碑文拓本
				深津胤房	竹田篤司	西田家墓碑文拓本の訓読

XII　モノ資料

作成年	西暦	月	日	差出・作成	内容
				吉田功制作	西田幾多郎先生肖影
					琴夫人愛用懐中時計

形態	数量	備考	資料番号		
和紙綴、毛筆	1		E	9	
和紙罫紙、毛筆	1		E	69	
種痘証、ペン	1		E	45	
種痘証、毛筆	1		E	46	
印刷物	1		E	62	
コピー	1		E	68	
罫紙	1		E	28	
名刺	1	名刺表面に「水ノ上　八百十七番地」、裏面に地図の鉛筆書あり	E	47	
名刺	1	名刺表面に「備後国福山町賢忠寺達」の鉛筆書あり	E	48	
拓本	1		E	63	
原稿用紙、ペン	1	「碑文　竹田篤さん（ママ）へ　深津胤房先生」の封筒あり	E	64	

形態	数量	備考	資料番号		
350×300プレート木箱入	1・1	木箱入り、「西田幾多郎先生肖影」の題箋、蓋に「制作吉田功」の毛筆書および印あり	H	1	
懐中時計、箱有	1	琴夫人が最初の留学中にアルバイトをして買ったウォルサムの金時計、後に幾多郎が講演などの際に愛用したもの、箱は中込忠三製作（上田久『西田幾多郎の妻』、中込忠三『炎の絵』）	J	1	

XIII　書籍

書名	著者・発行	出版年
『思索と体験』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正８年初版
『自覚に於ける直観と反省』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正６年初版・大正９年５版発行
『現代に於ける理想主義の哲学』	西田幾多郎著・弘道館刊	大正６年初版・大正９年５版発行
『善の研究』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正10年初版・大正10年51版発行
『意識の問題』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正９年初版・大正10年７版発行
『思索と体験』（増訂版）	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正８年初版・大正12年増訂33版
『芸術と道徳』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正12年初版
『芸術と道徳』	西田幾多郎著・岩波書店刊	大正12年初版
『働くものから見るものへ』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和２年初版
『一般者の自覚的体系』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和５年初版
『無の自覚的限定』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和７年初版
『哲学論文集第一』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和10年初版
『哲学論文集第一』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和10年初版
『一般者の自覚的体系』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和５年初版・昭和11年第３刷
『哲学論文集第二』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和12年初版
『哲学論文集第二』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和12年初版
『続思索と体験』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和12年初版
『哲学論文集第三』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和14年初版
『哲学論文集第三』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和14年初版
『無の自覚的体系』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和７年初版・昭和14年第６刷
『哲学論文集第四』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和16年初版
『哲学論文集第四』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和16年初版
『続思索と体験』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和12年初版・昭和16年第６刷

西暦	月	日	形態	数量	備考	資料番号		
1919	05	18	書籍	1	「下村蔵書」印、書込みあり	K	2	
1920	07	01	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、書込み、付箋あり　巻末に感想の書込みあり	K	3	
1920	08	20	書籍	1	「溝江」印、裏見返しに「人世の苦亦楽しからずや」T. Iの書込みを赤線で消し、S.Mizoeの書込みあり	K	4	
1921	11	20	書籍、函有	1	表見返しに「Seishun.Sugi.1922.Spring」の書込み、「杉正俊遺書」印、裏見返しに「1922.3.31 MASATOSHI.SUGI」とあり、 本文に書込みあり	K	5	
1921	05	10	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、巻末に広告の切り抜き貼付	K	6	
1923	12	01	書籍、函有	1	三省堂のシール貼付	K	1	
1923	07	23	書籍、函有	1	中表紙に「三木君恵存　著者」書込みあり	K	7	
1923	07	23	書籍	1	「下村蔵書」印、文末に広告の切り抜き貼付	K	8	
1927	10	15	書籍	1		K	9	
1930	01	10	書籍	1	表見返しに筆で「三木君恵存　著者」の書込みあり	K	10	
1932	12	20	書籍	1		K	12	
1935	12	25	書籍、函有	1	表見返しに筆で「下村君　著者」の書込みあり、「下村蔵書」印、本文に書込みあり	K	14	
1935	12	25	書籍	1		K	15	
1936	10	25	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、裏見返しに「1939.5.9 Kyoto nite Kyoto Teidai Y.Takeuchi」とあり	K	11	
1937	11	15	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、表見返しに筆で「下村君恵存　著者」の書込み、函に「下村君」の書込みあり	K	18	
1937	11	15	書籍、函有	1		K	19	
1937	05	15	書籍、函有	1	「永積昭10冊」のメモあり（裏は学習院教研審議室受講表）	K	16	
1939	11	15	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、表見返しに筆で「下村君恵存　著者」の書込み、本文に書込み、函に筆で「下村君」の書込みあり	K	20	
1939	11	15	書籍	1	本文に書き込みあり	K	21	
1939	02	10	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、裏見返しに「1939.6.2 At Kyoto Teidai Y.Takeuchi」とあり	K	13	
1941	11	10	書籍、函有	1	「謹呈　著者」の付箋あり、「下村蔵書」印	K	22	
1941	11	10	書籍、函有	1		K	23	
1941	05	30	書籍、函有	1	「下村蔵書」印、公文堂書店のシールあり	K	17	

書名	著者・発行	出版年
『哲学論文集第五』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和19年初版
『哲学論文集第六』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和20年初版
『哲学論文集第七』	西田幾多郎著・岩波書店刊	昭和21年初版
『父西田幾多郎の歌』	西田静子編・明善書房刊	昭和23年初版
『西田幾多郎と和辻哲郎』	高坂正顕著・新潮社刊	昭和39年初版・昭和45年第7刷
『寸心読本　西田幾多郎先生』	石川県河北郡宇ノ気町西田幾多郎先生頌徳会編	昭和52年初版・昭和53年再版
宇ノ気町西田記念館のパンフレット	西田記念館	
『西田幾多郎の妻』	上田久著・南窓社刊	昭和61年初版

西暦	月	日	形態	数量	備考	資料番号		
1944	09	03	書籍	1	「下村君恵存　著者」の書込みあり、「下村蔵書」印、本文に書込みあり、「自覚」に関するメモあり（裏は学生のレポート）	K	24	
1945	12	25	書籍	1	「寄贈　西田外彦」の付箋あり、「下村蔵書」印、本文に書込みあり	K	25	
1946	02	15	書籍	1	「下村蔵書」印、本文に書込みあり	K	26	
1948	10	05	書籍	1		E	52	
1970	10	30	書籍	1		K	27	
1978	02	01	書籍	1		K	28	1
			パンフレット	1	『寸心読本　西田幾多郎先生』の中にあり	K	28	2
1986	01	31	書籍	1	表紙見返し「謹呈　柳田節子様　上田久」とあり	Q	1	

付　録　部

翻　　刻

凡　例

1．本書には、学習院大学史料館収蔵 西田幾多郎関係資料のうち、岩波書店刊『西田幾多郎全集』第18巻・第19巻『書簡集』に未収録の西田差出書簡146通、未公開の西田宛書簡10通、および〈付録〉として近衛文麿の書簡１通を翻刻した。

2．各書簡冒頭に付されたＢ－63、Ｂ－２などの記号は、目録中の資料番号と照合するものである。

3．配列は年代順にしたがった。年月日が判明しなかったものは（年不詳）とし、また推定によったものには［　　］の記号を付した。

4．各書簡の封筒部分と葉書表はポイントを下げ、書面と区別した。

5．まず受取人と宛先、それから差出人と発信地を翻刻した。これは封筒の表→裏、葉書表の右→左の記載にしたがったものである。ただし受取人名・差出人名をそれぞれ宛先・発信地より先頭に出し、敬称は原則として省略した。また郵送に頼らなかったためか、受取人名・宛先、差出人名・発信地の記載のない書簡は［　］の記号を付し、あらためて受取人名・差出人名を記した。

6．葉書などでは、裏に差出人名のみを記し、表に発信地等を記さないものもある。この場合は原書簡の記載どおり、発信地等は空白のままとした。

7．宛先と発信地は原書簡に記されたままとした。原書簡で住所印が使用されたものには□で囲む処置をくわえた。

8．差出人名・発信地とともに日付を記した書簡もある。葉書の表にのみ記されたものはそのまま翻刻し、書面・封筒の両方に記されたものに関しては、書面の方の日付を翻刻し、封筒の方は省略した。

9．原則として文字（旧字・新字・異体字）、句読点、濁点の有無、ルビ、記号、下線、訂正部分などは原文のままとした。ただし以下の諸点に関しては、読解の便宜をはかって適宜処置をくわえた。

A．句読点の有無にかかわらず、文節に区切りを付した方がよいと判断した場合は一字分の空白を設けることとした。

B．「々」や「ゝ」などの繰り返し符号は原文のままとした。ただし２文字以上にかかる符号は、横書きの書式ということもあり、「だんだん」「くれぐれ」という風に改めた。

C．原文の行間挿入部分は原則として地の文に入れる形をとったが、文意の通らないものには〔　〕の記号を付した。住所印への挿入部分も同様の処置をほどこした。

D．行間に×××と記された打ち消しの表記は、文字上に二重線を引くことで代えた。

E．誤字・脱字と思われる箇所には（ママ）と注記した。

10．後人の手による「大正十二年」「昭和三年？」といった追記、「貯蓄あれば力あり」といった郵便局の標語印は翻刻しなかった。

翻　刻

西田幾多郎差出書簡

B－63

大正12年３月13日

髙坂正顕　　市内上京塔の段藪ノ下町四二一

御手紙拝見いたしました　それではどうかよろしく御願いたします　萬事務台君とお話してやつて見て下さい

三月十三日　　西田幾多郎

御病気の由御大事に

B－２

大正12年10月５日

三土興三　　上京聖護院西町一　中島方

西田幾多郎　　田中飛鳥井町三二

少々御話いたしたいことが御座いますから御目にかゝりたいと思ひます　明日は一時から三時まて(ママ)学校、夜は哲学會に出席いたします

十月五日

B－151

［大正13年］１月31日

髙坂正顕　　洛西花園村妙心寺南門前七　人見方

おはがき拝見いたしました　朝永君がかいてくれれば深田君の方はよからうと思ひます　朝永君には是非何か書いてもらひたいと思ひます　私も話してみます

一月卅一日　　西田

B－154

大正13年４月12日

髙坂正顕　　市内　聖護院上り畑　洛陽館

西田幾多郎　　田中飛鳥井町三二　　四月十二日

昨日御出下さいましたさうだが　不在にて失礼いたしました
三土君の遺書はそのいくらかを哲学の研究室へでも寄附してはいかん
藤井健君来月の雑誌に續稿ができぬとか何とか　都合できますか

B－153

［大正13年］８月11日

髙坂正顕　　区内　聖護院東側　洛陽館

西田幾多郎　　田中飛鳥井町三二　　八月十一日

君の宿を忘れたので大分前に医大の方へはがきを出して置いたが　もし九月早に私の原稿を要するなら何時にても御上け(ママ)いたします　無論九月に要せない様ならいつでも原稿の不足の時に廻したがよい、私の方は何時でよい(ママ)、できて居るのだから

B－10

大正13年９月18日

髙坂正顕　　区内　聖護院東側　洛陽館

西田　　田中町

いつかの御話に廣木君の宅に病人があるといふことでしたが　同君は此頃毎日学校へ出て居られますか

九月十八日

B－152

大正13年11月２日

髙坂正顕　　区内　聖護院中町一二　洛陽館

少し御頼みいたしたいことがあるのですが　二三日中に一寸御出下さいますまいか

十一月二日　　西田

B－140

大正14年4月19日

髙坂正顕　　洛西　花園村　妙心寺　天球院

岡野君よりシンチンゲルの論文を送つて参りました

四月十九日　　西田幾多郎

B－158

大正14年6月27日

髙坂正顕　　洛西　花園村　妙心寺　天球院

西田幾多郎　　田中飛鳥井町三二

（切手部分切取につき不明）の大脇君が何か書いてくれるから　君の方から~~も頼んでやつて~~依頼の手紙を出して置いて下さい

私は今折角かいて居るが九月号に出し得る~~や否や少し~~かどうか確ならず十月号に必ず出し得る

右御承知置きを乞ふ

六月廿七日

B－44

[昭和3年]10月23日

髙坂正顕　　市内下鴨上河原町四一ノ一

~~只今~~少し御話したいことがありますから　こちらの方へ御序がありましたら一寸御寄り下さいますまいか

十月廿三日　　西田幾多郎

A－6

昭和4年5月23日

髙坂正顕　　市内下鴨上河原町四四

西田幾多郎　　田中飛鳥井町

先日夜は遠方から御帰りの所を夜遅くなつて御障りもなかつたでせうか　奥平君の事ですがいろいろ御親切に御考へ下さいまして難有存じました　同君の事よく考へて見ましたが頭もよく学問もよくできる人の様なり　誰とて多少の非難なき人はある筈なく　人物も決してどうかういふべき人でない様ですが　娘は尚子供にて朝鮮といふ様な所も何となく進まぬ様子なり　外に少し話もある事故先づ奥平君の方の事はこれきりにいたして置きたいと思ひますどうかよろしう~~御座~~御願いたします　御母堂様及ひ(ママ)奥平君~~の事~~を知り居られるといふ先生へは幾重にも御好意を謝し小生の感謝の志をよく御傳へ置き下さいませ
何時か御話しの例(ママ)医学の生理の先生とかいふ人はどういふ人ですか　これは友の方の事ですが

五月廿三日　　西田

髙坂君

B－41

昭和7年2月21日

髙坂正顕　　右京区花園南町五丁目五

Simmel, Phil. d. Geldesの梗概を恒藤君が書いたのがあるといふ先夜誰の話でしたが　若し誰が(ママ)持つてゐるなら一寸見たいとおもふがいかゞ(ママ)てせう

二月廿一日　　西田

B－39

昭和7年4月12日

髙坂正顕　　右京花園南町五丁目五

昨夜は遅くなつて電車はいかゞでした　それに雨がふり出して帰路いかゞであつたかとおもひます

四月十二日　　西田幾多郎

B－40

昭和７年４月17日

髙坂正顕　　京都市右京区花園南町五丁目五

西田幾多郎　　かまくら

昨晩こちらに参りました　汽車の中で君の「思想」一月号の論文をよみました

四月十七日　　神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷要（カナメヤマ）山四三五

B－42

昭和７年10月４日

髙坂正顕　　右京区花園南町五ノ五

来週月曜の事承知いたしました　今の所差支御座いませぬ

十月四日　　西田幾多郎

N－1

昭和７年12月８日

務台理作　　台湾、台北市昭和町　大学官舎

その後いかゞ　御変りもなきか　この頃御地の気候はいかゞ　私は不相変の状態でゐます
御地ポンカン御恵贈下され難有御座いました

十二月八日　　京都　西田幾多郎

N－2

昭和７年12月19日

務台理作　　台湾、台北町昭和町　大学官舎

西田幾多郎　　京都

ポンカン御恵贈下され難有御座いました　岩波から拙著を送らせた筈ですが着きましたか

御健康をいのる

十二月十九日

B－33

昭和８年２月１日

髙坂正顕　　右京、花園南町五ノ五

御葉書の旨承知いたしました　お待ちいたします

二月一日　　西田

一寸その前日に人数を知らして下さい

B－31

昭和８年２月７日

髙坂正顕　　右京花園南町五丁目五

御病気の由　いかゞ　御案し(ママ)申上げます　普通の風邪にや

二月七日　　西田幾多郎

B－30

昭和８年３月15日

髙坂正顕　　右京花園南町五丁目五

私はあすから十日ばかり鎌倉へ行つてきます　例の会は帰つてからに致しませう　高山君にもさう云つて置いて下さい

三月十五日　　西田幾多郎

B－32

昭和８年７月14日

髙坂正顕　　上京区大將軍西町三三

いつ頃信州へ御出かけにや　私の鎌倉の家は鎌倉極楽寺村字姥ヶ谷（ウバガヤツ）五四七池田といふ家です
鎌倉驛から江の島行の電車に乗り姥ヶ谷の停留場にて降り右手の松山の中に入つた所です
極分り易いとおもひます

七月十四日　　西田幾多郎

B－37

昭和８年７月28日

髙坂正顕　　長野縣北佐久郡追分尾台別荘内

だんだん遅れたがあす鎌倉へ参ります　神奈川縣鎌倉町外極樂寺村字姥ヶ谷（ウバガヤツ）五四七、鎌倉駅から江ノ島行電車にのり姥ヶ谷にて下り右手の松林に入る元池田といふ家、藤沢へゆく御序があつたらお寄り下さい　豫め端書でも下さらば御待ちいたします

七月廿八日

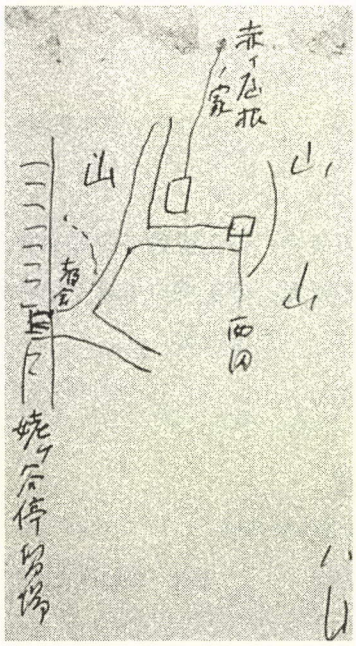
B－36

昭和８年８月１日

髙坂正顕　　長野縣北佐久郡追分尾台別荘

七日差支なからうと思ひます　万一その時
になつて差支が生（ママ）すれば河合氏の方へ
御知らせいたします

八月一日　　西田



B－34

昭和８年10月15日

髙坂正顕　　上京区大將軍西町三三

昨日帰りました　田辺君の講義の時でも皆に御逢ひの節は御傳へ下さい

十月十五日　　西田

A－12

昭和９年１月10日

髙坂正顕　　市内　小松原北五八

西田幾多郎　　田中

御手紙拝見

それはそれで仕方なからうとおもふ

時の到るを待つのみ

一月十日　　西田

髙坂君

B－22

昭和９年２月13日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五八

「善の研究」の正誤難有御座いました　それから Lamprecht も慥に落手いたしました

「善の研究」の正誤の方はその中岩波の方へ話さうと思つてゐます

二月十三日　　西田幾多郎

B－25

昭和９年３月15日

髙坂正顕　　市内　小松原北町五八

昨夜帰りました　御序もあらば皆に知らせて置いて下さい

三月十五日　　西田幾多郎

B－24

昭和９年３月25日

髙坂正顕　　上京小松原北町五八

西田

~~一寸~~少し頼みたい事があるから暇になつたら一寸御出下さいませぬか　急く(ママ)ことでないから暇になつてからでよろしい

三月廿五日

A－13

昭和９年８月20日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五八

西田幾多郎　　かまくら

過日は遠方の所を御尋下さいまして難有御座いました　御帰宅後御病気なりし由　いかゞ御大切に　木村の再舞をなす勿れ　書物の事御手数をお願してすみませぬでした

俳句は素質がある様なり　御勉強をいのる

八月廿日　　西田

髙坂君

B－82

[昭和９年] ９月３日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五八

「文学」を御送りいたします

西谷、高山等例の毎月集る連中へ廻して下さい　誤植も少しあり私の原稿の不十分の所もあります　近々出す本の中に収める時訂正いたします

九月三日　　西田幾多郎

B－28

昭和９年10月６日

髙坂正顕　　上京小松原北町五八

昨日帰りました　木村君にもよろしく

十月六日　　西田幾多郎

B－20

昭和９年11月１日

髙坂正顕　　上京　小松原北町五八

西田幾多郎

いつかの御話しの書字をさし上げるからこちらへ御序の節おより下さい　その節ランケの論文も一寸御見せ下さいませぬか　Epoche の始のものゝ外にどういふものが入つて居るか

十一月一日

A－10

昭和９年11月19日

髙坂正顕　　上京区小松原北町五八

西田幾多郎　　田中

石田君に頼ん(ママ)て置きましたからどうかこの名刺を持つて行つて下さい

併し門外の人々に話すことゝて極めて平凡の事を話すつもり故きゝに行く必要もないではないか

その事も他両君にも御傳へ下さい

十一月十九日　　西田

髙坂君

B－18

昭和９年12月26日

髙坂正顕　　上京　小松原北町五八

昨日一寸御聞きするを忘れたが　数日前御返ししたランケは御落手下さいましたでせうね

十二月廿六日　　西田

B－12

昭和10年４月１日

髙坂正顕　　上京　小松原北町五八

昨日帰りました　昨夜務台君よりの話によればおすぐれなき由　いかゞ　御大切に　御恢復になつたら又どうぞ

四月一日　　西田幾多郎

B－14

昭和10年５月９日

髙坂正顕　　上京　小松原北町五八

高山より十三日（日曜晩）といつて来たが君のいふのも違ふ　いかゞ
ツキディデスは見なくともよろしう御座います　学校からスミスの對譯をかりて来ましたから」
木村君帰りし由

五月九日　　西田

D－20

昭和10年９月19日

柳田謙十郎　　台湾　台北市　台北帝大、文政部

御論文御恵贈下され拝受致しました

九月十九日　　鎌倉にて　西田幾多郎

B－15

昭和10年９月27日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五八

西田幾多郎　　仙台にて

私は二十四日から仙台に来てゐます　明後日鎌倉に帰り来月四五日頃帰洛のつもりです
武蔵高校の山本良吉君が来月私が帰洛の頃丁度何かの用事で京都へゆくとの事だか（ママ）　君が一度逢つて見られてはいかゞかと思ふ　山本の居所及都合は私が帰洛の上聞いてお知らせするが

九月二十七日

B－16

昭和10年10月２日

髙坂正顕　　京都市上京区小松原北町五八

山本良吉氏　八九日頃
三條河原町西入大文字屋に泊るとのことですが　若し御都合ができれば先方の都合を電話にでも聞き一寸御逢いかゞ　私は五六日頃帰ります

十月二日　　西田幾多郎

A－23

昭和10年10月11日

髙坂正顕　　上京区小松原北町五八

西田幾多郎　　田中

推奨文といふのはこれ位のものにてよろしきや
山本君私方へ来らず　お逢ひになりしや　或は来なかつたのかまだ来ないのでもないか　無

論私の方へはよる用事がある譯ではないが

十月十一日　　西田

髙坂君

B－11

昭和10年12月８日

髙坂正顕　　京都市上京区小松原北町五八

例の件は四日の教授會にて決定の豫定なりし處　都合にて教授會が十二日に延期せられその時決定の事になり居る由

十二月八日　　かまくら　西田

D－19

昭和10年12月16日

柳田謙十郎　　台湾　台北市昭和町五六

御手紙難有御座いました　あれは事によると発送ができないか或は何處かでひか（ママ）ゝつて居るのかも知れませぬ　決して急（ママ）きませぬもの故何卒御配慮なき様

十二月十六日　　西田幾多郎

B－17

昭和10年12月20日

髙坂正顕　　市内上京小松原北町五八

昨日務台君の方へ手紙を出して置きました

書物ができたらお上げいたします

十二月廿日　　西田幾多郎

D－18

昭和11年１月１日

柳田謙十郎　　台湾　台北市昭和町五一八

書籍御送り下され慥に落手致しました　御手数難有御礼申上げます

一月一日　　西田幾多郎

B－48

昭和11年１月22日

髙坂正顕　　右京（ママ）　小松原北町五八

西田幾多郎

Gegenbauer（ママ）と Trertsche（ママ）御返送申上げました　昨日すぐ榎本君へ手紙を出して置きました　本日出立

一月廿二日

B－47

昭和11年１月28日

髙坂正顕　　京都市上京区小松原北町五八

御手紙拝見した　さういふ具合だと好都合と存じます　首尾よく成功をいのる

一月廿八日　　西田幾多郎

B－46

昭和11年１月30日

髙坂正顕　　京都市上京区小松原北町五八

御手紙拝見しました　萬事好都合の様にて喜んてゐ（ママ）ます、T君も大に轉向の由」　来月九日御来訪の由　お待ち申上げます」　山本君には私がその中會ふことになつてゐます　或は来

月の半頃になるかも知れませぬが」　君は山本君に逢ふ必要も御座いますまい、私が逢つてその話をお知らせ致しませう

一月卅日　　西田

A－15

昭和11年２月13日

髙坂正顕　　京都市上京区小松原北町五八

西田幾多郎　　かまくら

先夜は電車がどうかとおもつてゐましたが　大船でよくまにあひました由　下村君同志社の方首尾よく定まりし由　下程君の方もどうかうまくゆく様にいのつてゐます

昨日山本に逢ひまし由（ママ）　貴兄の方は多分月に四十円位にしてくれることゝおもひます　三時として週に二度来てくれる様にお願いたしたいと云つてゐました

二月十三日　　西田

髙坂君

B－45

昭和11年２月24日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五六

只今電報拝受致しました　下程君の事も確定しました由　よろしう御座いました　昨日又雪がふりました　御地はいかゞ

二月廿四日　　西田

B－３

昭和11年３月７日

髙坂正顕　　京都市上京小松原北町五八

何時頃京都の方御引上げか　私はまだはつきり定めませぬが十四五日にも帰らうかと思つてゐます

三月七日　　西田幾多郎

B－1

昭和11年3月23日

務台理作　　東京市杉並区宿町二三八

山本の弃宅の電話を高坂君に云つたのは誤でした
　大塚（８６）〇四〇〇番
です　この事もどうか

三月廿三日　　西田幾多郎

B－7

昭和11年4月6日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

愈東京の方にて仕事をお始めになりました由　何卒折角御勉強をいのる　夏鎌倉へまゐつた節又お目にかゝります

四月六日　　西田幾多郎

D－156

昭和11年5月17日

柳田謙十郎　　台湾台北市昭和町五一八

西田幾多郎　　京都

御地果物御恵与下され難有御座いました
あの句は碧岩にあり　洞庭湖の詩の一句で御座いますが　唯その時思ひ出るまゝに書いたのであとでもつと何か適当の語がなかつたかとおもひました

五月十七日　　西田生

柳田君　侍史

B－4

昭和11年7月27日

髙坂正顕　　長野縣北佐久郡追分　尾台方

昨日こちらに来ました　君は来月始お帰京か

七月廿七日　　西田幾多郎

B－5

昭和11年8月30日

髙坂正顕　　長野縣北佐久郡追分　尾台方

一時秋らしくなりましたがこの二三日は又暑くなりました

いかゞです　仕事は大分すゝみましたか　いつ頃御帰京にや

八月三十日　　かまくら　西田

B－73

昭和11年9月14日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　かまくら

お帰りの由　残暑もまだ中々です　私は来月はじめ三、四日頃にも帰らうかと思つてゐます

今の所に別に何の日が差支へるといふことも御座いませぬ　君の御都合の日をお知らせ下さい

まだ東京へも出ない、月末にでも涼しくなつたら二三の人でも尋ねて見ようかと思つて居る

九月十四日

B－6

昭和11年9月29日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

金子の所へは来月一日にまゐりますから四日にはお待ちいたします

九月廿九日　　西田幾多郎

一日午後には金子の所に居るとおもひますからお出下さつてもよい　但し四日がゆつくり話しできるでせう

D－158

昭和11年12月７日

柳田謙十郎　　台湾　台北市昭和町五一八

西田幾多郎　　京都

御手紙拝見いたしました　木村君の健康のすぐれないのは誠に惜しいとおもひます　併しその中彼も健康を恢復して働き出すでせう　果実御恵贈の由　難有御座いました　両三日中君に又一枚書を送ります

十二月七日　　西田

柳田君

B－52

昭和12年１月21日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日来ました　おすきの節どうぞ

一月廿一日　　かまくら　西田幾多郎

姥ヶ谷五四七

B－54

昭和12年３月３日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

今日相原君より手紙まゐり　結局大津を断ることにしたと云つて来た

三月三日　　西田

A－21

昭和12年３月７日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　かまくら

手紙見ました

君の送られし手紙の返事として君がさう感せ(ママ)られるならさうかも知れぬが又大分不満らしくも見える　務台君にも読んて(ママ)見てもらうたらいかゞ

三月七日　　西田

髙坂君

B－85

［昭和12年］４月５日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙拝見しました　それではその事を君より田辺君へ直接云つて置かれるがよろしからうと思ひます　あまり私が入りすぎるのはよくないとおもひますから

四月五日　　西田幾多郎

D－17

昭和12年４月15日

柳田謙十郎　　台北市昭和町五一八

御論文拝受　御同感に存じます

四月十五日　　西田幾多郎

B－61

昭和12年６月11日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

その後お変わりもなきか　君の何か書いたもの出たか　私は来月の思想に「種の問題」をかいた　御一覧を乞ふ　今の處　例年の如く七月末頃から鎌倉の方へまゐりたいと思つてゐる

六月十一日　　京都　西田幾多郎

B－60

昭和12年6月27日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御論文拝受いたしました　いつ(ママ)れ拝読愚考を申上げます　その中お目にもかゝる事と存じます

六月廿七日　　西田幾多郎

B－59

昭和12年7月27日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日こちらにまゐりました

七月廿七日　　かまくら　西田幾多郎

B－62

昭和12年9月6日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田　　かまくら

御葉書拝見した　先日よりいかゞなされたかと思つてゐましたが　御病気なりし由　黄疸は何の原因によるものか　膽嚢炎か　又ハ肝臓か　とにかく黄疸を起す病気は面白からず　十分の御静養をいのる　私は来月半頃までも居る

九月六日

B－58

昭和12年９月26日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

けふ長野から帰りましたがやはり明朝京都へ帰ります　二十八日に入るさうですから　すぐ又一度こちらに来るつもりですがいつれ(ママ)又後に　務台君にもよろしく　若し山本君の学校へお出の序もあらば山本にも一寸

九月廿六日　　かまくら　西田

B－57

昭和12年10月２日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

私は明三日又鎌倉へ帰ります　外彦は今の處内地の様です　私は十日過までゐます　九日は不在

十月二日　　京都　西田幾多郎

務台君にもよろしく

B－56

昭和12年10月５日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

お帰りに雨がふつたがいかゞ　お障りもなかりしや　くれぐれも御健康御大切に

十月五日　　西田

D－16

昭和12年10月10日

柳田謙十郎　　台湾　台北市昭和町五一八　帝大官舎

西田幾多郎　　かまくら

辯證法的世界の倫理　御惠贈下され難有御座いました　一寸目次を見ただけにても自分の考と一致する様に思ひます　その中拝讀致します

十月十日

B－55

昭和12年10月28日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙を拝見いたしました　書物が出ました由　喜はし(ママ)く存じます　私は明後三十日に愈帰洛いたします　それで或は京都の方へ送つたかも知れませぬ　「手」は屹度面白いでせう

十月廿八日　　かまくら　西田幾多郎

B－53

昭和12年10月30日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

けふカモメで帰洛いたしました　君の本はこちらに来てゐました

十月卅日　　京都　西田幾多郎

A－37

昭和12年11月15日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　京都市田中飛鳥井町三二

御手紙拝見いたしました　その後お変りも御座いませぬか　御健康いかゞです　又御令室も御著「歴史的世界」は大変評判がよいので私もこの上なき喜に存じます　どうか層一層深く進んて(ママ)ゆかれんことをいのります　歴史的身体とかポイエシスといふ如き問題が歴史的なものの本質を掴むに先づ深く鋭く考ふべきでせう

私は人間的存在といふ題(ダイ)にて私の哲学の立場からドストエフスキーの様な世界を描いて見ようと思つてゐますがはじめはどうも旨くゆきさうもない

田辺君哲研十月号にて私の考にふれて居る所は何だがなさけなく思はれた
とにかく君の著書にてこれまて(ママ)我国に何もなかつた歴史哲学らしいものが現れたのだ
併し何處までも深く鋭く自己の考に對する問題を避けない様に何處まで問題を作り最もむつかしい問題を戰ふ様に
務台君にもよろしく

十一月十五日　　西田

髙坂君

B－150

[昭和12年]12月9日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙拝見いたしました　さういふ事ならさう急ぐにも及ひ(ママ)ますまい　大体の事は私の手紙にかいて置きましたから

十二月九日　　西田幾多郎

B－75

昭和13年1月28日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

その後お変りもなきか　昨日こちらに来ました　又どうぞ

一月廿八日　　かまくら　西田幾多郎

B－76

昭和13年2月2日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

「土」はけふ芦屋から送つてまゐりました

二月二日　　西田幾多郎

D－14

昭和13年２月９日

柳田謙十郎　　台湾　台北市昭和町五一八　大学官舎

私は例により先月末よりこゝにゐます　君の外國行はいかゞなりましたでせうか　三月半頃まではゐます　三月の「思想」に「人間的存在」といふものをかきました

二月九日　　鎌倉姥ヶ谷　西田幾多郎

B－78

昭和13年２月13日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙拝見、表面には反對ができないし又反對せないかも知れぬが東京の人には中々裏面にはいろいろあり、むつかしくないかとは思つてゐました　あまり急にやらぬがよい

二月十三日　　かまくら　西田幾多郎

B－80

昭和13年３月20日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日は遠方をお出下さいましたのに折あしく不在に誠にすみませぬでした　高山君が君と一緒に来るといふのに心待ちにしてゐたのですか二十一、二日頃かと思つてゐたのでしたLachelier 誠に難有う　どうか暫く拝借致度存じます　又夏に

三月廿日

B－155

昭和13年７月26日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日こちらに来ました　又どうぞ　御出の節は御一報下さい　二十八日は不在

七月廿六日　　姥ヶ谷　西田幾多郎

B－149

昭和13年9月1日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御葉書拝見しました　追分から御歸りの由　何時でもお出下さい　お待ちいたします
昨夜は大変でした　併し私方~~大した被害なし~~先づ無事

九月一日　　西田

B－43

昭和13年9月6日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

書物の事いろいろお知らせ下さいまして難有御座いました　若しおすきが御座いましたら又お出下さい　今月一ぱいは必ず居りますから

九月六日　　西田幾多郎

D－170

昭和13年10月5日

柳田謙十郎　　台湾　台北市古亭町二四八

西田幾多郎　　京都

大分秋らしくなりました　私は両三日前歸洛いたしました　御著書出版の件岩波の方にて大低(ママ)引き受け(ママ)くれる事と存じますが　御原稿を一度拝見致したいとの事故　原稿おまとめの上、同店の布川角左衛門氏宛にて御送り下さる様願ひます

十月五日　　西田

柳田君

B－70

昭和13年10月30日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田　　京都

その後お変りもなきか、君の本の中にどこかに、ランケの deutsche Geschichte の中に宗教と経済が世界を支配するといふ様なことがある~~様な~~と云つて居られたかに思ふがそれは deutsche Geschichte のどの辺ですか

今月はじめ金沢へ云(ママ)つて来た　山本良吉君が君も金沢へ行かれる様云つてゐたが

十月卅日

B－159

昭和13年11月24日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

先日はおより下さいましたが十分話もできなかつたが又明春鎌倉にて

スイスへ御注文の書来ましたか

十一月廿四日　　西田幾多郎

D－166

昭和14年１月25日

柳田謙十郎　　台湾、台北市、古亭町二四八

西田幾多郎　　京都市左京区田中飛鳥井町三二

けふ文部省の教学局の阿原謙蔵氏が来て　君の手紙を示し私の意見を聞くとあるから　私より君にすゝめてくれと云ふ」　私は之に對し前便に申上げた様に君に返事して置いたと云ひました」　私の考は前便申上げた通りですが　最後の問題君が教学局に入り自分の考をひどく曲げられないでやつて行けるかどうかと云ふことですが　阿原氏も云ふ如く　この上は君が一つ直接に菊池氏等と逢ひ　君の思ふ所を率直に話し　菊池氏等のそれに對する考を聞き　然る後事を決しては如何かとおもふ」　更に菊池氏より逢ひたいと云つて来たら　先方もあれだけに云ふのであるから　兎に角一度菊池氏にお逢になつて話されてはいかゞ

若し菊池氏に逢ひに東京へ出られることもあらば　すぐ務台君にも逢ひ御相談然るべしと存じます

一月廿五日　　西田

柳田君

B－142

昭和14年1月27日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日こちらに来た　又どうぞ

一月廿七日　　かまくら　西田幾多郎

B－139

昭和14年3月4日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　かまくら

御尊父様おすぐれなく関西の方へお出の由　いかゞ　およろしきや」、けふ木村君から振興會の金のことにつき貴兄を煩はす旨申して来ましたが　金は岩波に預けあり　岩波から直接木村君の方へ送らせますからそれに及ばないとおもひます　用事まで

三月四日

B－156

昭和14年3月11日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御葉書拝見、それでは十六日午後といたし置きませう」　若しどちらかで差支~~無れば~~起ることでもあらば十八日」　~~なるべく~~併し早き方よかるべけれ(ママ)はなるべく十六日に

三月十一日　　かまくら　西田幾多郎

B－148

昭和14年３月27日

高坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙轉送により拝見致しました　私は廿四日に歸洛いたしました　その中木村君にも逢ふこと丶存じます

三月廿七日　　西田幾多郎

D－26

昭和14年４月17日

柳田謙十郎　　上京区今宮通堀川東入ル

御依頼の箱書を致しましたからお嬢様御序に」　今日の文部のていたらく　君は入らぬでよかった

四月十七日　　西田

D－27

昭和14年６月30日

柳田謙十郎　　上京今宮通堀川東入

昨夜失礼しました

二日午後哲学の人々拙宅へ集り来る筈　木村君とでも同道お出いかん

六月三十日　　西田幾多郎

D－25

昭和14年７月16日

柳田謙十郎　　上京今宮通堀川東入

私は二十日過鎌倉へまゐる積、その前夜にても一度お出なきか

七月十六日　　西田

別に用あるにあらず

B－143

昭和14年７月27日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚(ツカ)町六八

昨日こちらへ来ました　今夏はいかゞお過ごしにや

七月廿七日　　かまくら　西田幾多郎

B－147

昭和14年８月16日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨年三月思想（私の人間的存在のある）及八九月思想（歴史的・・・のある）御あきであつたら一寸お貸し下さいませぬか　京都に置いて来たが少し見たいので

七日夜務台君来訪　同君の意見に私は全然賛成　即ち君の〔下村といふ〕御考に

八月十六日　　西田幾多郎

B－146

昭和14年10月３日

髙坂正顕　　東京市、小石川区大塚町六八

奥様、御子様その後いかゞです　およろしきや　私は今日はこれから出かけます　八日には午後三時頃から夜まで不在

十一日には岩波君が何か會を催す由、會　十二日学士院例會にて不在　もう一つと申したのはやめになりました」　十五六日歸る積

十月三日　　かまくら　西田幾多郎

B－145

昭和14年10月４日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日八日と申上げた會は九日午後三四時後といふ様になりました　~~従つ~~

十月四日　　かまくら　西田幾多郎

B－144

昭和14年12月７日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

その後いかん　例の武蔵の問題いかゞ

十二月七日　　西田

廣師はいかゞの模様なりしか

D－28

昭和14年12月22日

柳田謙十郎　　上京区今宮通堀川東入

御著西田哲学　只今弘文堂より持参　御恵贈難有御礼申上げます

十二月廿二日　　西田幾多郎

B－138

昭和15年１月22日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

御手紙拝見、来週火曜お出の由　お待ち致し居ります

木村君より教授會の事通知　喜悦の至に堪へませぬ　気になつてゐましたが安心致しました

餘は拝眉の上

一月廿二日　　かまくら　西田幾多郎

武蔵の方も安心

B－137

昭和15年1月31日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

昨日のお話の事考へて見ようかと思ふが　日比谷で話した文部省の教学叢書の中にのつて居るものゝことか　又京大の月曜講義のことか

一月卅一日　　かまくら　西田幾多郎

D－24

昭和15年2月16日

柳田謙十郎　　台湾　台北市古亭町二四八

「白柚」難有御座いました　今年は此地も寒く困りましたがこの頃少し暖くなりました　三月半頃帰洛

二月十六日　　鎌倉　西田幾多郎

B－135

昭和15年3月2日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　かまくら

家のこといかゞ定まりましたか

岩波で私の論文集第三を増刷するから何處か誤植でも直す所ないかと申しますが　先日お読みの節何處か御気付になつて居る所でも御座いませぬでせうか　決して「わざわざ」と云ふのでなく自然御気付の處も御座いましたらと云ふに過ぎない　お引越など御多用の所甚だすみませぬが

いつ頃京都へ　私は十四五日頃歸洛

(ママ)
Feb. 2nd

B－134

昭和15年３月４日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚町六八

西田幾多郎　　かまくら

御多用中早速お知せ下さいまして難有御座いました　家もどうか先(ママ)つ定まりました由二十一日頃京都へお出の由　いろいろ御多用の御事と存じます　私も十四五日頃歸宅　歸洛前になる(ママ)色々人が来たり用事ができたり致しますから又京都でお逢致しませう

三月四日

D－21

昭和15年５月６日

柳田謙十郎　　台北市古亭町二四八

日本思想の現在及将来拝受　これは何かの抜刷か

五月六日　　西田幾多郎

B－133

昭和15年５月29日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚窪町茗溪會館

只今正誤表難有う　どうもいくらでもあるらしい　今度の岩波の校正は実にひどい書は外の方はどちらでもよいか(ママ)二行のものを高橋氏へ送つた方よいかとおもひます

五月廿九日　　西田幾多郎

B－125

昭和15年８月11日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

この頃まだ京都にお出か　いつ頃御出立か
海軍大学の人が君への紹介を頼まれ、名刺を渡すかも知れぬが諾否は御随意に
八月十一日　　かまくら　西田幾多郎

B－126

昭和15年10月14日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

支那から度々御はがき難有う　もうお歸りになりましたか　私は月末に歸洛
十月十四日　　西田幾多郎

B－128

昭和15年10月16日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

こちらの方へ講義にお出の由　どうかお出下さい　私は少くとも廿五六日頃まで居ります
十月十六日　　鎌倉　西田幾多郎

B－136

昭和15年10月19日

髙坂正顕　　区内　下鴨泉川町五三ノ一四

昨日歸りました
河合君には不相変切符の御世話になりました　何卒尊兄よりもよろしく
十月十九日　　西田

B－130

昭和15年10月25日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚窪町茗溪會館

西田幾多郎　　鎌倉姥ヶ谷五四七

私は二十八日歸洛致しますから京都でお目にかゝります

十月廿五日　　かまくら　西田幾多郎

只今「神話」拝受多謝　又お目にかゝつて

B－129

昭和15年10月26日

髙坂正顕　　東京市小石川区大塚窪町茗溪會館

昨日はお疲れの處をお出下され難有御座いました　「カント解釋」も拝受致しました

十月廿六日　　西田幾多郎

B－131

昭和15年12月26日

髙坂正顕　　区内　下鴨泉川町五三

御手紙を拝見し安心いたしました　来月十日頃出立のつもりですがその前一度でも二度でもお出下され度い　病気は日に日に恢復

十二月廿六日　　西田

D－22

昭和16年１月21日

柳田謙十郎　　台湾、台北市古亭町二四八

既に台湾の方へお帰りの事と存じます　貴著を弘文堂より京都の宅へ送つて来ました由　難

有御座いました　まだ京都から轉送して参りませぬがその中来ること〻存じます

一月廿一日　　かまくら　西田幾多郎

B－118

昭和16年2月9日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

再伸　Sの京都にての収入は大低(ママ)いかゞだらう　家の事情はいかゞ　大体の處御存知なきか

二月九日　　西田

B－121

昭和16年2月20日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

御手紙の事委細拝承、いろいろ難有御座いました　河合君の子供の事　その中山本に逢ふ筈につき話し置きます

二月廿日　　かまくら　西田幾多郎

D－23

昭和16年2月24日

柳田謙十郎　　台湾、台北市古亭町二四八

突然の御手紙にて驚きました　私は今度は三月一杯こゝにゐて四月のはじめ帰ります　いづれお目にかゝりて

二月廿四日　　かまくら　西田幾多郎

B－122

昭和16年3月5日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

先日山本に逢つて河合君の子供の事話して置いた　名も何も知らぬ故唯君との関係を話して置いた　大勢のこと故少しボンヤリしてゐた様だ

三月五日　　かまくら　西田幾多郎

A－34－1

昭和16年3月15日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　かまくら

鈴木大拙からかういふ手紙をよこしたので困る、君には御迷惑のことゝ思ふ、併し一度御耳に入れないで返事する譯にもゆかぬのでとにかく御紹介だけ申上げる　若しお願に上つたら御隨意に御返事下さい

柳田が台湾をやめて京都に居ると云ふが君が御迷惑なら彼が如何かであらう

河合の子供入学できたよし　それはよかつた　私の孫も今度武蔵へ入つた

もうそろそろ帰りたいが　外彦の家族がこちらへ轉宅するのでどうも今月一杯はゐなくてはならない

三月十五日　　西田

髙坂君

B－120

昭和16年3月20日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

御葉書拝見、柳田君の事難有う、大拙の方へさう返事致します

三月廿日　　西田幾多郎

D－35

昭和16年4月7日

柳田謙十郎　　上京区紫野上柳町一〇

四日に帰りました　お目にかゝり度存じてゐます

四月七日　　西田幾多郎

B－119

昭和16年8月14日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

その後いかゞ　誰が(ママ)君が東京に来るとか話してゐたが

「象徴的人間」拝受　これは私の見てゐないが多い様なり　ゆるゆる拝読いたさん

八月十四日　　かまくら　西田幾多郎

D－36

昭和16年9月25日

柳田謙十郎　　京都市上京区紫野上柳町一〇

今年の夏は夏らしくもありませぬでした　お変りもなきか

高野の方はどうなりました　まだお出かけにや　「国家理由の問題」お読下さつたら何でも

御注意下さい　問題か(ママ)問題故

来月半頃に帰洛のつもりに致し居ります

九月廿五日　　かまくら　西田

B－117

昭和17年9月28日

髙坂正顕　　区内、下鴨泉川町五三ノ一

西田幾多郎　　京都市左京區田中飛鳥井町三二

飯塚氏と相談致しました處　よからうと申しますので私、来月半頃遅くも二十日頃までに鎌

倉へ出かけ様ようと思ひ居ります

九月二十八日

B－115

昭和18年４月29日

髙坂正顕　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

大分暖くなりました　昨日位歸るつもりに致し居りました處　俄に已むを得ぬことで来月廿日過歸ります

四月廿九日

そちらに変つたこともないか

D－41

［昭和18年］７月６日

柳田謙十郎　上京区紫竹上柳町一〇

西田幾多郎　京都市左京區田中飛鳥井町三二

先夜お話の大拙との會、西谷君より十日十一日頃とか申してまゐりましたけれども　その頃神戸の方から訪問の人あるかとおもはれ、その他にもまだ少し尋ねくる人あるから在宅致度又秋にまゐりました時にお願いたし度、大拙はもう十日過に帰るならん　私は少くも十四五日までは居る　又どうぞ

七月六日

B－112

昭和18年９月６日

髙坂正顕　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

書物只今接手、誠に難有御座いました　御手数をお煩はし致しすみませぬでした　「歴史の意味」の方早く一覧お返し申し上（ママ）けます

九月六日

A－20

昭和18年10月29日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

御手紙難有拝見いたしました　本日弘文堂の店の人がレッシングを持つて来てくれました
誠に毎度御手数をお煩はしいたし　すみませぬでした
静子のこと委細様子お知らせ下さいましたて難有御座いました　どうか今後とも時々様子
お知らせ下さる様御願申上げます　多少気になつてゐますから
今度小泉信三氏が文教顧問の方へ出たのは喜ばしいとおもひます

十月二十九日　　西田生

髙坂君

D－40

［昭和18年］11月２日

柳田謙十郎　　京都市上京区紫野上柳町一〇

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

おはがき拝見いたしました　ちとおすぐれなかりし由　いかゞ　今では全く御恢復にや　御大切に」　秋には又とおもひましたが此頃の如き旅行不如意の状態についつい元気がでませぬでした」　この秋は鎌倉あまり天気よろしからず　困りましたがこの数日来秋晴れのよい日がつゞきます」　森田といふ人は実に熱心の人の様です　あんなに一生懸命に勉強してくれるは忝ない

十一月二日

B－108

昭和18年11月20日

髙坂御奥様　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

だんだん寒くなります　此秋はとう(ママ)どう歸りませぬでした　高坂君は今何處に居られます
まだ歸られませぬか

十一月廿日

B－110

昭和18年12月10日

高坂御奥様　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

私の處へも青島から御手紙をもらひましたが高坂君歸宅せられましたか

十二月十日

B－111

昭和18年12月26日

高坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

電報拝受、安心いたしました　いろいろ御覧になつたことと存じます　又お目にかゝります
機會の時、
お疲れのことと存じます　御大切に

十二月廿六日

B－104

昭和19年１月６日

高坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

さうその通りだ、全く御同感だ、どうか今後御努力をいのる、東京へお出の時いろいろお話
を承り度思つてゐる　お待ちして居る

一月六日

B－95

昭和19年４月15日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

御無沙汰してゐます　お変りありませぬか　皆元気でゐますか　私は月末か来月始頃帰つて見ようかと思つてゐますが汽車の都合がいか（ママ）ゝかと心配して居ります　学士院のパスは来月十日までののをもらつてあるのですが

四月十五日

D－44

昭和19年４月25日

柳田謙十郎　　浦和市常盤町八ノ二

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

尊兄御謄寫の原稿確に拝受　田辺方にはこれにて補充致させます」　私は今の處来月四五日頃より二月程京都へ行つて来ようかと存（ママ）し居ります（但し汽車さい都合よくば）、~~七月~~七月始には帰つて来ます

四月廿五日

B－102

昭和19年５月７日

髙坂正顕　　区内　下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　田中アスカヰ町三二

今度は河合君に万端御世話に相成り御蔭により心地歸洛致しました　深く御礼申上げます木村君へ一覧に供しました小生の「國体」尊兄にも御一覧御考を承り度

五月七日

D－47

昭和19年５月14日

柳田謙十郎　　武蔵国浦和市常盤町八ノ二（高校官舎）
西田幾多郎　　京都市左京区田中飛鳥井町三二

田辺氏へ例の原稿、用ずみの上は尊兄の方へ返す様にかさねて申やり置きましたが返りましたでせうか
若し未だなら尊兄より入用とて一度御催促下さいませぬか
神奈川縣藤澤市錦町一〇四三　田邊壽利
五月十四日

D－48

昭和19年5月26日
柳田謙十郎　　浦和市常盤町八ノ二　高校官舎
西田幾多郎　　京都市左京田中飛鳥井町三二

本日注の原稿をお送り申上げました　私は来月十日過（ママ）きに帰りますから鎌倉の方へお返し下さい
五月廿六日

B－93

昭和19年6月19日
髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四
西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市〔極楽寺〕姥ヶ谷五四七

静岡に一泊昨日帰りました　名古屋で河合君に逢ひました　山田氏が鎌倉に送つて下され具合よく帰りました　誠に難有う存じます　厚く御礼申上げます　何卒奥様にもよろしく
六月十九日

B－96

昭和19年9月26日
髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三
西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市〔極楽寺〕姥ヶ谷五四七

御手紙難有う　御手数お願してすみませぬ　御上京の節お持ち下さいます由　それで結構で御座います

九月廿六日

B－99

昭和19年10月5日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

けふもう五日ですがまだ本がつきませぬので困ります、どうなつたのでせう、学校の本故万一紛失したのでは誠に困ると思ひます、静の所へも云つてやりましたが、かれを督勵しどうか御協力下さつて郵便局の方お調べ御願申上げます

十月五日

B－100

昭和19年10月11日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市〔極楽寺〕姥ヶ谷五四七

先日は遠方わざわざお出下され難有御座いました　此頃「生命」といふものを書いて居ります　これも~~他日~~その中お目にかけたいと思ふのですが書物はまだ着かないので困ります　紛失する如きもなからうとは存(ママ)しますが

十月十一日

B－103

昭和19年10月12日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三ノ一四

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

本日漸く本が到着いたしました　いろいろ御手数と御心配をおかけして誠に誠に相すみませぬでした　これに懲りないで又どうぞ

十月十二日

B－87

昭和20年３月10日

髙坂正顕　　京都市左京区下鴨泉川町五三

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

牧君の文部の人々とよく御話合のこと喜ばしく存じます　できるだけ理解してもらつて置く方望ましく存じます　Aischylus（ママ）は洋間の入口のデカルト額の下のＥＦも一寸見て下さい

三月十日

今月末君等出京なきや　此頃中々むつかしからうが

D－13

昭和20年５月28日

柳田謙十郎　　浦和市常盤町八ノ二　高校官舎

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七

その後暫く御消息を審にせないが恙なきか　Ｂが始終浦和の方へ行く様だか（ママ）」　大拙も不相変の状態だが此頃ではあまり互に往復もできない

五月廿八日

西田幾多郎宛書簡

E－27

［明治37年８月24日以降］

［西田幾多郎］

［大津勉］

謹啓

昨夜ハ参堂　誠ニ御邪間(ママ)致候　其砌御話之勲章年金継受願ひ及ぶ亡届ハ別紙受給者心得ニ明記し有之候ハは(ママ)御参照之上　御届有之度　別冊ハ御参考迄差上申候

賞勲局総裁ハ過日ノ年金證告ニ記セル如ク子爵大給恒ナリ

故西田君之俸給ハ八月分丈トノ了ニテ受領ノ為メ印章携帯にて何日にても午前中主計ノ許へ御出頭相成度候　昨日ハ主計不在にて金箱を開くる事能ハス為ノ御徒労ニ帰せし次第との事にて候

先ハ要用　　急　早々

十九日　　大津勉　拝

西田幾多郎様

E－22

大正14年１月30日

西田幾多郎　　京都市上京区田中飛鳥井町

藤田豪之輔　　山口縣山口町縣廳通り赤十字社前

御令室様之御遠逝悼み上げ候　新聞紙上にて承知驚愕仕り候

先年名古屋市教育會講演会講師御願ひ之件にて参堂　其後御無沙汰に打過ぎ候　御海容被成下度候

大正十四年一月三十日　　山口縣立山口高等女學校　　藤田豪之輔拝

（大正八年國文）

西田先生

E－23

昭和14年3月11日

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉町姥ヶ谷五四七

瀧澤克己　　山口市桶ノ口

やうやう暖かになりましたが　先生にはいつも御元氣の御様子　御慶び申し上げます。

先日の御手紙　今日の御葉書　二つともまことに嬉しく拝讀致しました。詰らないものを早速御讀み下さいました上　御懇切なる御言葉まで賜はりまして、厚く御礼申し上げます。この間「文藝春秋」の座談會は面白く拝見いたしました。「思想」三月号は　呑氣な田舎の本屋のことゝて度々催促致しましても　未だに届きませんが、二三日中には拝讀出来ますことゝ存じて居ります。

扨　今日の御葉書のことですが、急ぎましたため　一々出所を明示致しませず、御手數をおかけいたしまして　恐れ入りました。實は、「善人すらなほ救はる、況んや悪人をや」と云ふ親鸞上人の言葉は、田辺博士がその儘用ゐて居られるのではありませんが――念のため心覚えの箇所を探して見ましたが　やはりさうのやうです――例へば「社會存在の論理」の六（「哲学研究」第二百六十六号）特にその二三頁後より三行目以下、同六五頁始めより二行目以下等に述べられて居りますことを強い言葉で表せば、さういふことになるのではないかと存じます（無論　親鸞上人自身が田辺博士と同じ意味でそれを云つたかどうかは別として）。そしてそれが　今日まで　田辺博士の一貫した思想であることは、最近の論文「永平正法眼蔵の哲学」（「哲学研究」第二百七十一号）などにも明かではないかと思はれます。田辺博士は、「宗教は道德を媒介とする（通路＝とする）」といふことは畢竟宗教を道德化するものであるといふ批評を嫌つて、「種の論理の意味を明かにす」の五（「哲学研究」第二百六十号二三頁始めより五行目以下）などにもその辯明をなさつて居ますが、私には、あれでは結局、道德もその地盤を失ひ、宗教も悪しきを善しとなすごまかしになつてしまひはしないかと思はれます。辯證法的対立の統一と申しましても、その場合その場合で都合のよいやうに見方を変へるといふだけで、宗教そのものが道（厂史のロゴス）である、絶対に道德を超えながら　直ちにリーアルに道德そのものを立する――福音そのものが眞に律法（おきて）を立する――といふ意味は　全く失はれてゐるやうに思はれてなりません（「現代日本の哲学」一三三頁）。そしてかういふことはたゞに宗教と道德の問題だけでなく、家族・國家・政治・経済・戰争・学問その他あらゆる問題に、弁証法の名に於て折衷主義を齎すことになるのではないでせうか（「現在が動揺的」といふことは拆衷主義的といふことゝは全く異なるに拘らず）。これは田舎にひとり居ります私の理解の不足のためかもしれませんが　私には現代日本の進歩的・革新的思想家と云はれる人々の間にも、多くの場合この区別がはつきりしてゐないのではないか、そしてそこがはつきりしないかぎり、ファシズムにもコムニズムにも眞実に打克つこ

とは出来ないのではないか、といふ氣がしてなりません。　今年は暇のあります限り、マルクス・ヘーゲル・ベルグソンなどをも讀みまして　さういふ点を考へてみたいと存じます。——宗教そのものが厂史の道であるといふやうなことを申しますと　直ぐに保守的と考へられますが、道そのものが朦朧としてゐたのでは進むといふことも不可能になる——道(メトヽス)が絶対の無でなくてはならない、人間の思想・行動に一点の束縛を加へるものであつてはならないといふことゝ、それが何かぼんやりとしたもの、單に質料的なものといふことゝは全く別である——と思はれます。

何ですか　先生の御迷惑をも顧みず　纏りのないことを書き連ねまして、何卒御許し下さいまし。時候の変り目ですから　くれぐれも御身御大切の程　御祈り申し上げます。

三月十一日　　山口市　瀧澤克己

西田幾多郎先生　御侍史

E－18

昭和14年8月22日

西田幾多郎　　鎌倉姥ヶ谷

鈴木大拙　　神奈川縣大船圓覺寺正傳庵　　圓覚　拙

傳燈録巻第十、趙州傳「異日問南泉、如何是道、南泉曰平常心是道、師（趙州のこと）曰、還可趣向否、南泉曰、擬向即乖、師曰、不擬時如何知是道、南泉曰、道不属知不知、知是妄覚、不知是無記、若是眞達不疑之道、猶如太虚廓然虚豁、豈可強是非耶、師言下悟理」、平常心——は南泉に始まるに非ず、馬祖道一なりと思へども、出杤(ママ)今不見当、（注文の書、今日また先方へ聞合す）

八月二十二日

（水害もなかつたか）

E－19

昭和14年9月16日

西田幾多郎　　鎌倉姥ヶ谷

一昨日は一寸近辺をまわつて居たところで失礼仕候、二十日すぎに帰洛の予定に候、それま

でに一遍御窺申上度候、
釈迦弥勒も修行最中の句、もとは碧岩のどこやらで見たと覚ゆ、不確、調べて見ます、「如明鏡當臺、明珠在掌、胡来胡現、漢来漢現」――碧岩二十四則の評唱中に在り、他にも可有之、見当つたまま

九月十六日　　大拙拝

E－20

昭和14年9月22日

西田幾多郎　　鎌倉姥ヶ谷

全體作用の字碧岩にあつたかも知れぬが、自分の見たるは臨済録なり、それ以前にあつたかも知れず、臨済録中に、「勘弁」の少し前に「被山僧全體作用、学人空開得眼口、総動不得云々[96]」、示衆の中に「山僧此間便全體作用、不歴根器云々[74]」、又「或応物現形、或全體作用云々[70]」などあり、臨済以前後に圭峯宗密あり、馬祖派を評して曰く「洪州(馬祖ノコト)意者、起心、動念、弾指、動目、所作、所労、皆是佛性全體之用、更無別用云々」――雑誌二冊別に書留証明にて御送可申上候、頃来此雨、山居も物淋しかるべし、御令閨へもよろしく、

（九月二十二日）貞拝

E－25

昭和15年8月29日

西田幾多郎　　鎌倉市姥ヶ谷

柳田謙十郎　　京都市上京区紫竹下梅ノ木町一八

去る廿七日帰洛いたしました

信州では講演の依頼や来客が多く殆んど勉強ができませんでした　私としてはこんなに遊んでしまつたことは全く近来めづらしいことです　しかし信州に於ける西田哲学に対する情熱の高さには今更ながら感激させられざるを得ませんでした

先生の御論文は形としてまとまつた整備さはなくとも一向さしつかへないと思ひます、先生の御仕事はどこまでも新な鑛脉をさぐりあてて新鑛を掘り起していたゞくことにあり　これを精練したり之に形を与へたりすることは私達弟子の仕事として残して貰つて結好(ママ)と存じます　その意味で実践哲学序論は荒削のまゝにきはめて意義の深い歴史的作品として長く私

達の研究の対象となるべきものと存じます

田辺~~先生が~~博士の、西田哲学からは当為といふものの道徳的意義が見られなくなるといふ批評は別に深く省みらるべきほどの重要さをもつたものではないと思ひます、先生の哲学が當為を無視した單なる直観の哲学ではなくて、むしろ當為の根柢を更に深く探求することによつてその歴史的現實的意義といふものを眞に具体化した哲学であることは、先生の御論文を忠實によむものの何人もが卒直に承認せざるを得ない明々白々な事實であると存じます恐らくは田辺博士御自身もこの頃はよほど自己反省的になつて来てゐられるのではないかと思ひます、最近御目にかゝつた模様で何となくさういふ気がしてなりません

私は今哲研に出した論文の続編をかきつゞけてゐます、第一章　行為的基体　　第二章　行為的主体　　第三章　行為的直観　の三部作から成るもの　全体として行為的世界の論理的構造を明かにせんとするもので　本年十一月頃までにかき上げ　来春は公刊することにしたいと思つてゐます

九月二十日神戸発の船で台湾に帰り　再び本来の孤独にかへつてミツチリ勉強して来たいと思ひます、台湾は友人もなく　話し相手もなく　まことに淋しいところですが、それだけ落ちついて勉強するには悪くないところだと存じます

では先生の御健在を祈ります　　草々

八月廿九日　　柳田謙十郎

西田幾多郎先生　机下

E－24

昭和15年　　10月４日

西田幾多郎　　神奈川縣鎌倉町姥ヶ谷五四七

瀧澤克己　　山口市桶ノ口

九月三十日附けの御便り　まことに有難う存じました。東京宛の御手紙も、廻送されてまゐりまして、たしかに拝見いたしました。

“日本評論”は始めから差上げるつもりでしたのに、そのことをはつきり書きませんでしたゝめ、却つて御手數をおかけして　恐れ入りました。本日早速　別便にて　お送りいたしますから　何卒御納め下さいまし。

“実践哲学序論”の別刷が出来ましたとのこと、既に拝読はいたしましたが、お序での拆一部お頒け頂けますれば幸せに存じます。たゞあの辺は局にも遠いことですし、わざわざお送り願ふのも大変ですから、この次にお目にかゝります拆にでも結構でございます。

田辺博士の思想につきましては、最近の“厂史的現實”についての御講演など拝讀いたしま

しても　私にはどうも事實の觀察や分析が足りない――根本的には意識からの物の見方を脱しない――やうに思はれてなりません。あれでは、哲学的には固より、社會科学的（或いは一般に科学的）にも眞に人間の意識志から獨立な現實的法則といふものは結局理解出来ないのではないでせうか。〆博士は人間の意志から独立な法則と言ひますと　すぐ神秘的な超越主義とか機械的な因果觀とか　いふものと同じに考へてしまはれるやうですが、そこの区別がをはつきりさせませんと、却つて、政治的意志の経済的法則に対する支配――国家学・政治学の経済学に対する優位――といふやうな誤つた考思想に陥る危険があるのではないかと存じます。この場合にも博士は無論政治と経済との“辯証法的な相互限定”といふことを仰せられるでせうが、博士のやうな立場から“日本文化の問題”その他で先生の仰言るやうな意味の現實的な厂史の辯証法的過程を理解し得るかどうか、甚だ疑問であるやうに存じます。（この点についての戸田武雄の批評――「日本評論」七月号、「シュパン　現代経済学の危機」の“國家と経済”の項（三笠書房　戸田譯著）――と対照して興味深いことだと存じます。）

學校は未だ試験中で講義は十一日からですがいろいろと考へさせられることのみ多く　教壇に登ることが、時拆は大げさな言ひ方ですけれども、何ですか屠所に曳かれる思ひで御座います。
先生にはくれぐれお大切に、御壯健にてお過しの程、切にお願ひ申し上げます。　　思はず勝手なことばかり認めまして何卒あしからず御許し下さいまし。

十月四日　午後　　山口　瀧澤克己

西田幾多郎先生　侍史

A－34－2

［昭和16年］3月15日

［西田幾多郎］

［鈴木大拙］

今日は天気もよし、御窺ひしたいと思へども、碧岩の校正が重なつて居て失礼致候、先日高野山大学の学長さんが来て、君のお弟子中（出来るなら高坂さん）にて、高野へ来て四十時間ほど、西田哲学を講じてくれぬかとの事に候、即ち四月五月六月九月十、十一、十二月のうち毎月二回（二日つゞき）で六時間づゝ、総計四十時御願ひ出来れば仕合との事に候、君から先方へ申やつて下さるれば結構千万との事に候、御迷惑ながら、右の次第、高坂さんへ御傳下されまいるや、何だか持つてまわつた咄に候も、よろしく願上候、
三四日中に何れ御窺しますが、当用まで不取敢　　早々

三月十五日　　大拙拝

西田君

何れもさまおかわりなきか

E－26

（年不詳）

［西田幾多郎］

［鈴木大拙］

傳燈録　第十巻

趙州従諗問南泉、如何是道、

南泉曰、平常心是道、

趙州、還可趣向否、

南、擬向即乖、

趙、不擬時如何知是道、

南、道不属知不知、知是妄覚、不知是無記、若是眞達不疑之道、猶如太虚廓然虚豁、豈可強是非耶、

師（趙州）言下悟理、

仝十巻

僧問（長沙景岑、南泉嗣）、如何是平常心

長沙曰、要眠即眠、要坐即坐、

（からを見よ）

僧曰、学人不會、

長沙曰、熱即取涼、寒即向火、

風害は大したこともなかりしか、其中又御窺したいと思ひます、一年中の好時節、行楽の余裕なきを憾む　　貞拝

〈付録〉

E－21

大正元年12月26日

近衛文麿　　東京府豊多摩郡落合村大字下落合小字丸山四一七

織田　　京都白川村入口

（表）車中よりの御端書有り難う、猛性、嵐性、を有する人間が皆無になつたので京都は急にひつそりした。扨本日小松が来て赤松君の民法のノートを持て来た、それで君なり赤松君なり御入用なれば直ちに僕から御送りする事にするから御一報を請ふ。東京の景気又時々御一報を願ふ。

（裏）今日東圃が国文学史講話の西田先生の序文を読で西田先生の偉大なる哲学者なる事を愈々確めた。暖き涙ある哲学者にして始めて人生の根底にふるゝ学説が出るのであると思た。貴兄の帰洛後又互に「善の研究」に付て研究する事を楽しみにして待て居る。

左様なら

本目録主要人物関係図

凡　例

1．本図は、学習院大学史料館収蔵 西田幾多郎関係資料にでてくる人物たちの関係を図式化したもので、目録部分・翻刻部分・各解説・関連年表と一体の性格をもつ。

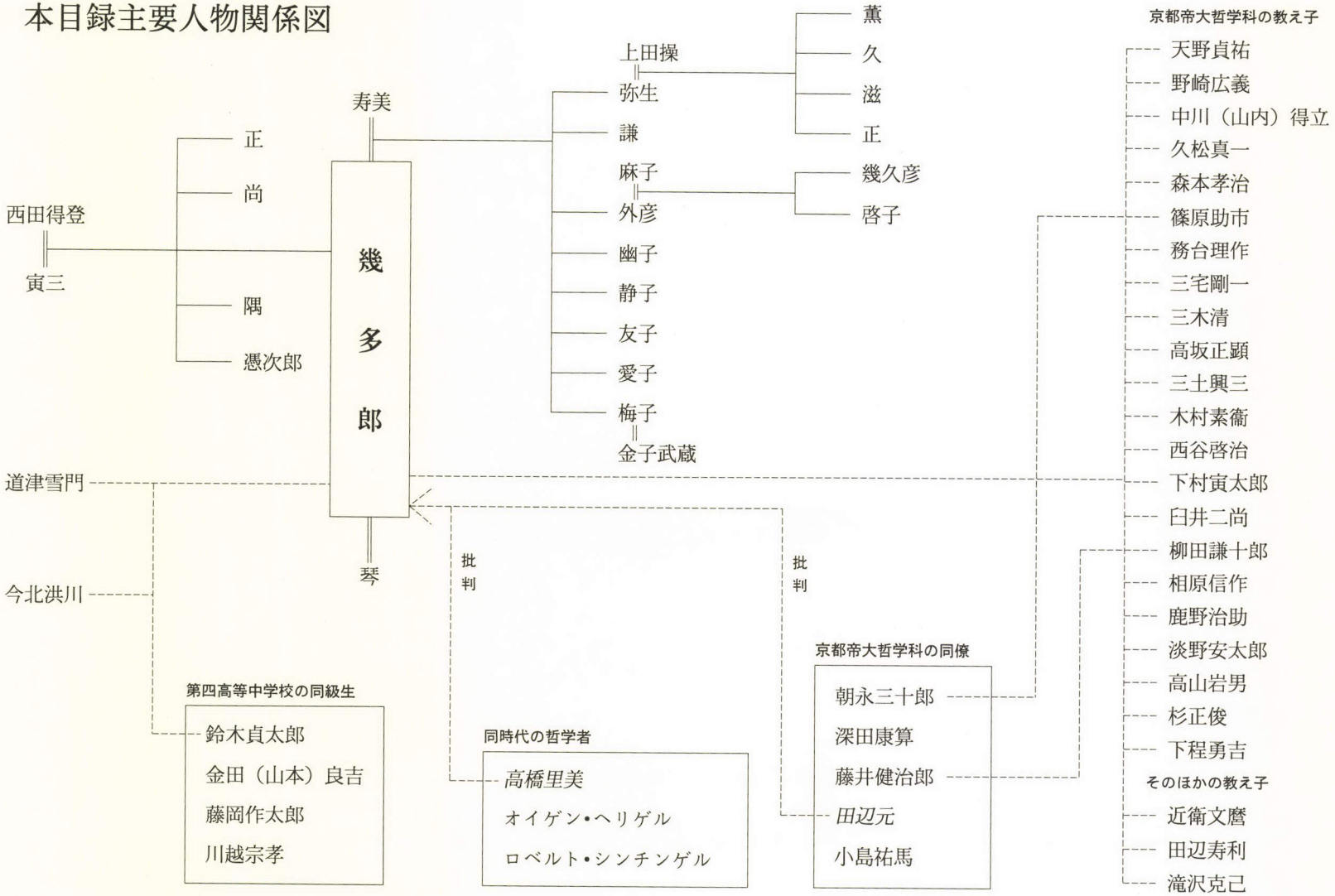
2．取りあげるべき人物が取りあげられていないとする向きがあるかも知れないが、これは資料中の人物のみを対象としたためである。ただし資料中にでてこない天野貞祐・三宅剛一は、西田と学習院双方にかかわる重要人物として特別に取りあげた。

3．スペースの問題から、資料の登場人物すべてを記載することは不可能なので、あくまでも主要な人物のみに限った。この場合の「主要」とは西田を中心として、その家族・友人・同僚・師弟とかかわる範囲である。

4．各人物の生没年・肩書などを記すべきかも知れないが、スペースの問題もあり、また肩書に関しては、いつのものなのかという正確な年次が必要なので、これらはすべて関連年表に記すこととした。

5．図中の実線は血縁関係、点線は師弟および学的関係、二重線は婚姻関係を示す。斜体で表記された人物は西田に対する批判者である。

本目録主要人物関係図


西田得登
寅三
正
尚
隅
憑次郎
寿美
幾多郎
琴
上田操
弥生
謙
麻子
外彦
幽子
静子
友子
愛子
梅子
金子武蔵
薫
久
滋
正
幾久彦
啓子
道津雪門
今北洪川
批判
批判
第四高等中学校の同級生
鈴木貞太郎
金田（山本）良吉
藤岡作太郎
川越宗孝
同時代の哲学者
高橋里美
オイゲン・ヘリゲル
ロベルト・シンチンゲル
京都帝大哲学科の同僚
朝永三十郎
深田康算
藤井健治郎
田辺元
小島祐馬
京都帝大哲学科の教え子
天野貞祐
野崎広義
中川（山内）得立
久松真一
森本孝治
篠原助市
務台理作
三宅剛一
三木清
高坂正顕
三土興三
木村素衛
西谷啓治
下村寅太郎
臼井二尚
柳田謙十郎
相原信作
鹿野治助
淡野安太郎
高山岩男
杉正俊
下程勇吉
そのほかの教え子
近衛文麿
田辺寿利
滝沢克己

本目録関連年表

凡　例

1．本年表は、学習院大学史料館収蔵 西田幾多郎関係資料から汲みとれる事柄、もしくはそれと直接かかわる歴史事実を記載したものである。したがって目録部分・翻刻部分・各解説・主要人物関係図と相互に関連する性格をもつ。

2．「西田幾多郎関係資料」の名のとおり、本年表は原則として西田幾多郎の事跡を中心とする。

3．ただし西田幾多郎関係資料には西田差出・西田宛の書簡以外にも、高坂正顕・柳田謙十郎・滝沢克己・木村素衛・務台理作・山内得立・鈴木大拙・田辺元ら、関係者および弟子同士の書簡も多く含まれるため、かれらの事跡もまた記した。

4．このほか書簡の差出人・受取人以外で、書簡および資料にでてくる人物の事跡もまた記した。

5．事跡を記す基準は以下のとおりである。

A．資料に記された、もしくは資料と直接かかわる事柄のみをとりあげる。

B．論文・著書についても、資料に記されるか、資料とかかわるもの以外はとりあげない。

C．西田をはじめ各人の家族についても、資料にでてくる者はその事跡を記す。

D．資料に記されない事柄でも、以下のものに関しては例外的にとりあげた。これは資料の背景をあきらかにするためであり、また主要人物関係図をおぎなうためでもある。

a．西田の主な職歴を記した。

b．高坂・柳田・滝沢・木村・務台・山内・大拙・田辺に関しては、生没年・出身地を記した。西田のみ両親が記されるのは、西田家の戸籍が目録部分に載るからである。

c．朝永三十郎・深田康算・藤井健治郎・田辺元・小島祐馬ら、京都帝大における西田の同僚については、西田とかかわりはじめた時期、京大への就任・昇任・退任時期を記した。

d．西田の弟子についても、分かる範囲で、西田とかかわりはじめた時期と大学の卒業年次および奉職先などを記した。

e．台北帝大や広島文理科大学などの設立時期を記した。

f．発見、もしくは従来の西田の伝記や各人の年譜を修正する事項を記した。

g．西田と学習院双方に深いかかわりをもつ天野貞祐・三宅剛一の事跡を記した。

6．記載の方法は以下のとおりである。

A．編年体の配列を重視し、それ以外にあらためて項目を設けることはしなかった。

B．当時の呼称を重視し、元号を西暦より先に配した。

C．各年のうち、月日まで分かる事項はこれを最優先させ、ついで月単位のものを配置した。季節単位の事項は相応の時期に挿入し、年単位のものは「この年」として最後に配置した。

D．同じ月で、異なる事項が並列する場合は、／の記号を付して区別した。

E．各人物の年齢は満年齢とした。

7．各事項について一々その典拠を記すべきだが、煩瑣になることを恐れ、これは避けた。

本目録関連年表

明治３年（1870）

５月19日　西田幾多郎、西田得登と寅三の長男として石川県河北郡宇ノ気村（現宇ノ気町）に生まれる。

10月18日　鈴木貞太郎、石川県金沢市下本多町に生まれる。

明治４年（1871）

11月23日　西田隅、西田得登の三女として生まれる。

明治６年（1873）

７月10日　西田憑次郎、西田得登の次男として生まれる。

明治10年（1877）

７月11日　西田幾多郎、西田藤九郎の養子となり、西田本家（？）を嗣ぐ。

明治15年（1882）

３月29日　西田幾多郎、石川県河北郡新化小学校卒業。

明治18年（1885）

２月３日　田辺元、東京府神田区猿楽町に生まれる。

明治20年（1887）

７月20日　西田幾多郎、石川県専門学校附属初等中等科を卒業。

10月　第四高等中学校予科第一級で西田幾多郎、鈴木貞太郎・金田良吉・藤岡作太郎・川越宗孝と同級になる。

明治21年（1888）

９月　西田幾多郎、第四高等中学校第一部一年生となり、哲学を専攻。

明治22年（1889）

５月　西田幾多郎、藤岡作太郎・松本文三郎・金田良吉らと「我尊会」を結成。

明治23年（1890）

６月12日　中川得立、奈良県大和高田市善教寺に生まれる。

８月８日　務台理作、長野県南安曇郡温村（現三郷村）に生まれる。

９月　西田幾多郎、藤岡作太郎・金田良吉・川越宗孝らと「不成文会」を結成。

明治24年（1891）

６月10日　西田幾多郎、同窓および近隣の宮本己一郎・友田鎮三・倉知銕吉らと写真を撮り、翌

日、帝国大学文科大学哲学科選科受験のため金沢を発つ。入学試験は6月22日から7月2日まで。

7月13日　川越宗孝、割腹自殺をはかり、15日死去。

7月　西田幾多郎、金沢市で英語教師ベントン・藤岡作太郎・金田良吉と写真を撮る。

11月23日　西田幾多郎、25日まで円覚寺に滞在し、今北洪川老師より公案をもらう。

明治26年（1893）

11月23日　柳田謙十郎、神奈川県愛甲郡南毛利村（現厚木市）に生まれる。

明治27年（1894）

10月4日　金田良吉、山本家の養子となる。

明治28年（1895）

3月11日　木村素衛、石川県江沼郡橋立村（現加賀市橋立町）に生まれる。

4月　西田幾多郎、石川県尋常中学七尾分校主任となる。

5月下旬　西田幾多郎、得田耕の長女寿美と結婚。

9月以前　鈴木貞太郎、釈宗演より「大拙」の居士号を受ける。

明治29年（1896）

3月25日　西田弥生、西田幾多郎の長女として生まれる。

4月　西田幾多郎、第四高等学校講師となる。

明治30年（1897）

5月24日　西田幾多郎、妻寿美を離縁。

9月　西田幾多郎、山口高等学校教務嘱託となる。

明治31年（1898）

10月9日　西田得登、肺炎のために死去、享年64歳。

明治32年（1899）

2月4日　西田幾多郎、妻寿美と和解。

7月　西田幾多郎、第四高等学校教授に就任。

明治33年（1900）

1月23日　高坂正顕、愛知県名古屋市に生まれる。

明治34年（1901）

2月5日　西田外彦、西田幾多郎の次男として生まれる。

3月17日　西田幾多郎、雪門老師より「寸心」の居士号を受ける。

6月6日　西田憑次郎、島田初江と結婚。

明治36年（1903）

7～8月　西田幾多郎、大徳寺孤蓬庵の広州老師に独参、8月3日に「無字」の公案透過。

明治37年（1904）

6月29日　西田憑次郎出征。

8月24日　西田憑次郎、旅順で戦死。

11月　西田幾多郎、「余の弟憑次郎を憶ふ」を『北国新聞』に寄稿。

明治38年（1905）

1月6日　西田幾多郎、憑次郎の遺族をひきとる。

10月14日　西田静子、西田幾多郎の三女として生まれる。

明治40年（1907）

7月　朝永三十郎、京都帝国大学文科大学哲学科助教授に就任。

11月　西田幾多郎、藤岡作太郎『国文学史講話』の序を執筆。

明治41年（1908）

7月　田辺元、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。

明治42年（1909）

3月8日　滝沢克己、栃木県宇都宮市大町に生まれる。

7月31日　西田幾多郎、学習院教授に就任。

9月14日　西田幾多郎、学習院独文主任となる。

明治43年（1910）

2月3日　藤岡作太郎死去、享年39歳。

7月　兼常清佐、京都帝国大学文科大学哲学科を第一期生として卒業。

8月31日　西田幾多郎、京都帝国大学文科大学助教授（倫理学講座担任）に就任。

この年　深田康算、京都帝国大学文科大学教授（美学美術史講座担任）に就任。

明治44年（1911）

1月　西田幾多郎、『善の研究』を弘道館より刊行。

明治45年／大正元年（1912）

5～6月　高橋里美、「意識現象の事実と其意味（西田氏著『善の研究』を読む）」を『哲学雑誌』第303～304号に発表し、『善の研究』を批判。

7月　天野貞祐、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。

10月　西田幾多郎、「高橋文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」を『哲学雑誌』第308号に発表。／山田琴、ヴァッサー女子大学に入学、このころアルバイトで貯めた金でウォルサムの金時計を購入。結婚後は西田が愛用することとなる。

11月　近衛文麿・赤松小寅・織田信恒・木戸幸一・原田熊雄ら、旧学習院生と西田幾多郎との交流が始まる。

大正2年（1913）

1月　朝永三十郎、京都帝国大学教授に昇任。

4月6日　西田幾多郎、東京帝国大学で開催された哲学会で「自然科学と歴史学」を講演、このとき田辺元と初めて会う。

7月　野崎広義、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。

8月12日　西田幾多郎、教授として宗教学講座へ転任、これにより藤井健治郎、倫理学講座の助教授として来任。

8月　田辺元、東北帝国大学理科大学講師に就任。

大正3年（1914）

1月　柳田謙十郎、金塚不二と結婚。

2月　西田幾多郎、ベルグソン著・高橋里美訳『物質と記憶』の序を執筆。

7月　中川得立、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。

8月11日　西田幾多郎、京都帝国大学文科大学哲学哲学史第一講座担任を命じられる。

大正4年（1915）

3月　西田幾多郎、『思索と体験』を千章館より刊行。

7月　久松真一・森本孝治、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。久松は卒業後、西田のすすめにより、妙心寺僧堂池上湘山老師会下の臘八接心に参じ見性する。

大正5年（1916）

2月　西田幾多郎、リッケルト著・山内得立訳『認識の対象』の序を執筆。

7月31日　篠原助市、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。

大正6年（1917）

5月　西田幾多郎、『現代に於ける理想主義の哲学』を岩波書店より刊行。

6月17日　野崎広義、心臓麻痺のため死去。

6月26日　三木清、初めて西田幾多郎を訪ねる。

7月13日　近衛文麿、京都帝国大学法科大学政治学科を卒業。

10月　西田幾多郎、『自覚に於ける直観と反省』を岩波書店より刊行。

大正7年（1918）

7月　務台理作、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業。

9月3日　西田幾多郎の母寅三、金沢市常盤町で死去、享年75歳。

9月　西田幾多郎、田辺元『数理哲学研究』の序を執筆。

この年　中川得立、山内家に入籍。

大正８年（1919）

５月　西田幾多郎、『思索と体験』を岩波書店より再刊。

６月14日　西田幾多郎の長女弥生、上田操と結婚。

７月　三宅剛一、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

８月　田辺元、京都帝国大学文学部哲学科助教授として来任。

９月７日　木村素衛、初めて西田幾多郎を訪ね、聴講を許される。翌日、田辺元・朝永三十郎を訪ねる。

９月14日　西田幾多郎の妻寿美、脳溢血で病床につく。

大正９年（1920）

１月　西田幾多郎、『意識の問題』を岩波書店より刊行。

４月　西田幾多郎、野崎広義『懺悔としての哲学』の序を執筆。

５月17日　上田操と弥生に長男薫生まれる。

７月　三木清、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

10月26日　西田幾多郎、仏教大学（現龍谷大学）講師となる。

大正10年（1921）

３月　西田幾多郎、『善の研究』を岩波書店より再刊。／鈴木貞太郎、真宗大谷大学教授に就任。／高橋里美、東北帝国大学理学部助教授に就任。

５月　西田幾多郎の三女静子、このころより結核を病む。

12月12日　山本良吉、武蔵高等学校の教頭に就任。

大正11年（1922）

３月22日　田辺元、ドイツへ出立。

この年　小島祐馬、京都帝国大学文学部哲学科助教授に就任。

大正12年（1923）

２月　西田幾多郎、「法と道徳」を『哲学研究』第83号に発表。

３月　高坂正顕・三土興三、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。木村素衛、同選科を卒業。高坂正顕は京都府立医科大学予科講師となり、翌年教授に昇任。またこれより二年ほど、西田幾多郎のもとで『哲学研究』の編集業務にたずさわる。

７月　西田幾多郎、『芸術と道徳』を岩波書店より刊行。

10月11日　篠原助市、東北帝国大学教授に就任。

大正13年（1924）

１月10日　田辺元、帰朝。

３月　西谷啓治、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。／西田幾多郎、「内部知覚に就いて」を『哲学研究』第96号、および102～103号（９～10月）に発表。

4月5日　三土興三、米原で轢死。

4月　オイゲン・ヘリゲル、東北帝国大学法文学部講師に就任（～1929年8月）。

4・6月　藤井健治郎、「人格主義としてのカント倫理」を『哲学研究』第97・99号に発表。

5月　朝永三十郎、「カント生誕二百年記念会に際して」を『哲学研究』第98号に発表。

6月1日　西田外彦、上野麻子と結婚。

大正14年（1925）

1月以前　西田幾多郎、藤田豪之助の手配で名古屋市教育会で講演。

1月23日　西田幾多郎の妻寿美死去、享年49歳。

3月　柳田謙十郎、京都帝国大学文学部哲学科選科を卒業。

4月20日　オイゲン・ヘリゲル、京都帝国大学で講演。

4月　臼井二尚、社会学講座で西田幾多郎の演習を受け始める。

5～7月　ロベルト・シンチンゲル、「理念に就いての歴史的と非歴史的」を『哲学研究』第110～112号に発表。

6月　大脇義一、「過渡的経験に就て」を『哲学研究』第111号に発表。

10月　西田幾多郎、「働くもの」を『哲学研究』第115号に発表。

大正15年／昭和元年（1926）

3月4日　務台理作、ドイツ留学。

3月　下村寅太郎・臼井二尚、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

4月　柳田謙十郎、第二高等学校卒業認定試験に及第し、京都帝国大学哲学科本科卒業の資格を得る。

6月25日　三木清、『パスカルに於ける人間の研究』を岩波書店より刊行。

10月　務台理作、フライブルクで高橋里美と共に現象学をフッサールに学ぶ。

この年　高坂正顕、河合好人（のちの東京鉄道局長）の妹時生と結婚。この関係から、昭和15・19年に京都行の切符を、西田は高坂経由で河合に手配してもらう。

昭和2年（1927）

3月　三木清、法政大学教授となる。相原信作・鹿野治助・淡野安太郎、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

5月4日　西田幾多郎、新設哲学哲学史第五講座教授を兼担。

5月14日　西田幾多郎、帝国学士院会員となる。

10月　西田幾多郎、『働くものから見るものへ』を岩波書店より刊行。

11月4日　田辺元、京都帝国大学教授に昇任。

この年　久松真一、西田幾多郎より「抱石庵」の居士号を受ける。

昭和3年（1928）

2月4日　西田幾多郎、京都帝国大学で最終講義（哲学概論）。

2月　高橋里美、東北帝国大学法文学部教授に昇任。／務台理作、ドイツから帰国し、4月に台北帝国大学教授に就任。

3月8日　布川角左衛門、岩波書店に入社。

3月17日　台北帝国大学設立。

3月　高山岩男、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。／金子武蔵、東京帝国大学文学部哲学科を卒業。

8月　西田幾多郎停年退官、免官辞令でる。退職・謝恩・還暦祝賀記念事業などは一切固辞。

夏　法政大学学長 松室致の手により、群馬県吾妻郡長野原町大字応桑に法政大学村（昭和13年1月に「大学村」と改称）が開かれる。

9月　淡野安太郎、台北帝国大学講師に就任。

10月1日　西田幾久彦、西田外彦の長男として生まれる。

12月11日　西田幾多郎、初めて鎌倉で冬を過ごす。

昭和4年（1929）

2月1日　西田幾多郎、京都帝国大学名誉教授となる。

2月4日　このころから田辺寿利、西田幾多郎を訪ねるようになる。

3月　杉正俊、京都帝国大学文学部哲学科を卒業し、文部省社会教育課に勤務。

4月1日　西田外彦、甲南高等学校に赴任。／木村素衛、新設広島文理科大学講師に就任。

4月30日　山内得立、京都帝国大学講師に就任。

4月　柳田謙十郎、台北帝国大学助教授に就任。／臼井二尚、京都帝国大学文学部講師に就任。

昭和5年（1930）

1月　西田幾多郎、『一般者の自覚的体系』を岩波書店より刊行。

2月　西田幾多郎、隠居届を出す。／山内得立、京都帝国大学哲学科出身者で初めて文学博士の学位を受ける。

3月　西田幾多郎、フィヒテ著・木村素衛訳『全知識学の基礎』の序を執筆。／下程勇吉、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

4月30日　篠原助市、東京文理科大学教授に就任。

5月　田辺元、「西田先生の教を仰ぐ」を『哲学研究』第170号に発表し、西田批判を開始。

8月20日　木村素衛、広島文理科大学助教授および広島高等師範学校教授となる。

昭和6年（1931）

1月　藤井健治郎死去、享年59歳。

3月　朝永三十郎、停年退官。／小島祐馬、京都帝国大学教授に昇任。／滝沢克己、九州帝国大学法文学部哲学科を卒業。

4月2日　山内得立、京都帝国大学教授に昇任。

6月　務台理作、台北帝国大学教授と東京文理科大学教授を併任。

12月12日　西田幾多郎、山田琴と再婚。

12月　西田幾多郎、「ゲーテの背景」を『ゲーテ年報』に寄稿。

昭和7年（1932）

1月　高坂正顕、「歴史的なるもの」を『思想』第116号に発表。／木村素衛、「一打の鑿―制作作用に関する一つの覚書―」を『精神科学』昭和7年第1巻に発表。

2月26日　杉正俊、ドイツ留学。

2月27日　広木多三の葬礼。

2月　西田幾多郎、「広木先生追悼文集」に「広木多三弔辞」を寄稿。

4月16日　西田幾多郎、秋まで鎌倉町扇ヶ谷要山四三五で過ごす。

5月　木村素衛、『意志と行為』（岩波講座哲学）を刊行。

7月　臼井二尚、京都帝国大学文学部助教授（社会学担当）に昇任。

7・9月　西田幾多郎、『私と汝』上下（岩波講座哲学）を刊行。

8月　このころから滝沢克己、西田哲学の勉強を開始。

10月30日　金子武蔵、西田幾多郎の六女梅子と結婚。

12月　西田幾多郎、『無の自覚的限定』を岩波書店より刊行。

昭和8年（1933）

4月16日　森本省念、相国寺専門道場に掛錫。

4月　高坂正顕、「世界観と狂気」を『理想』第39号に発表。

5月　木村素衛、京都帝国大学文学部助教授（教育学教授法）として来任。

7月29日　西田幾多郎、夏冬を鎌倉極楽寺姥ヶ谷五四七で過ごすことが始まる。

8月11日　杉正俊、ドイツ留学より帰国、10月13日に死去、享年34歳。

8月22日　『思想』第135号に発表した「一般概念と個物―西田哲学の発展の一齣―」により、滝沢克己、西田幾多郎より手紙を得る。

10月　滝沢克己、初めて西田幾多郎を訪ねる。

12月　西田幾多郎、『哲学の根本問題』を岩波書店より刊行。

昭和9年（1934）

1月16日　篠原助市、文部省教育局調査部長に就任（～昭和12年6月19日）。

6～8月　西田幾多郎、「弁証法的一般者としての世界」を『哲学研究』第219～221号に発表。

9月　西田幾多郎、「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」を『文学』第2巻第9号に発表。

10月　西田幾多郎、『哲学の根本問題 続篇』を岩波書店より刊行。

11月25日　西田幾多郎、京都帝国大学で開催された日本英文学会で「伝統主義について」を講演。このとき司会は石田憲次、筆記は高坂正顕がつとめた。

昭和10年（1935）

3月31日　西谷啓治、京都帝国大学文学部哲学科助教授（宗教学講座）に就任。

3月　久松真一、京都帝国大学文学部哲学科講師（仏教学講座）に就任。

4月　務台理作、東京文理科大学教授に就任。

8月30日　西田静子、二科展に当選。

9月25日　西田幾多郎、東北帝国大学における講演のため仙台に滞在（～29日）。

9月　このころから柳田謙十郎、西田幾多郎と交渉をもち始める。

10～12月　田辺元、「種の論理と世界図式」を『哲学研究』第235～237号に発表。

11月　西田幾多郎、『哲学論文集第一』を岩波書店より刊行。

昭和11年（1936）

2月25日　山本良吉、第三代武蔵高等学校長となる。

4月　高坂正顕、東京文理科大学助教授に就任。同時に武蔵高等学校講師にも就任するカ？／下村寅太郎、同志社大学文学部講師に就任。

5月　滝沢克己、九州帝国大学法文学部哲学研究室助手となる。

9月27日　滝沢克己、『西田哲学の根本問題』を刀江書院より刊行。

9月　柳田謙十郎、『台北帝国大学年報』第3輯に発表した「知と行」が西田幾多郎に高く評価され、「吾一以貫之」と「足踏実地」の書をこのころ送られる。

10月1日　西田幾多郎、東京市目黒区上目黒（現目黒区青葉台）に移った金子武蔵を琴夫人とともに訪ねる。

11～12月　高坂正顕、「歴史的世界」を『思想』第174～175号に発表。

12月　柳田謙十郎、「道徳に於ける合理的なるものと非合理的なるもの」を『理想』第79号に発表。

昭和12年（1937）

1月　柳田謙十郎の父勘作死去、享年81歳。

2月15日　柳田謙十郎、初めて西田幾多郎を訪ねる。

2～3月　高橋里美「種の論理について」を『思想』第177～178号に発表。／務台理作、「哲学と教育」を『教育学研究』第5巻第11～12号に発表。

3月末　滝沢克己、山口高等商業学校講師（修身科・哲学概論担当）として赴任。翌年教授となる。

3月　久松真一、京都帝国大学助教授に昇任。

5月　西田幾多郎、『続思索と体験』を岩波書店より刊行。

6月4日　第一次近衛文麿内閣成立。

7月　西田幾多郎、「種の生成発展の問題」を『思想』第182号に発表。

9月21日　西田外彦、召集される。

9月　柳田謙十郎、「弁証法的世界の倫理」を『台北帝国大学年報』第4輯に発表。／木村

素衛、『フィヒテ』（西哲叢書）を弘文堂書房より刊行。

10月　田辺元、「『種の論理』に対する批判に答ふ」を『思想』第185号に発表。／高坂正顕、『歴史的世界　現象学的試論』を岩波書店より刊行。／森本省念、僧堂を暫暇し、無為室大耕老師に通参。

10～12月　田辺元、「種の論理の意味を明にす」を『哲学研究』第259～261号に発表。

11月　西田幾多郎、東京日比谷公会堂で「学問的方法」を講演、また『哲学論文集第二』を岩波書店より刊行。

昭和13年（1938）

1月23日　西田幾多郎、朝日会館で新劇「土」を観る。

3月　高山岩男、京都帝国大学文学部哲学科助教授に就任。／西田幾多郎、「人間的存在」を『思想』第190号に発表。／務台理作、『フィヒテ』を岩波書店より刊行。

4月　金子武蔵、東京帝国大学文学部倫理学科助教授に就任。

4～5月　西田幾多郎、京都帝国大学の月曜講義で「日本文化の問題」を連続講演。

6～8月　柳田謙十郎、「エロスとアガペ」を『思想』第193～194号に発表。

7月　蓑田胸喜「西田哲学の方法に就て」を『原理日本』第122号に発表し、西田批判を展開。

8～9月　西田幾多郎、「歴史的世界に於ての個物の立場」を、高坂正顕、「神々の誕生」を『思想』第195～196号に発表。

9月20日　西田幾多郎、学習院高等科で「今日の国家主義」を講演。

9月　柳田謙十郎、「高山岩男氏の「哲学的人間学」について」を『哲学研究』第270号に発表。

10月　西田幾多郎、第四高等学校で講演。

11月　田辺寿利、蒙彊学院副院長に就任。

この年　ロベルト・シンチンゲルの独語訳「ゲーテの背景」がワイマールの『ゲーテ協会誌』に掲載される。

昭和14年（1939）

1～2月　文部省の勅任教学官就任の件で柳田謙十郎、西田幾多郎・田辺元・務台理作・木村素衛と相談し、結局は辞退する。

2月18日　大磯の原田熊雄宅で西田幾多郎、はじめて海軍省官房調査課長 高木惣吉と会い、9月15日にも同様に接触する。

2月　柳田謙十郎、『弁証法的世界の倫理』を岩波書店、『日本精神と世界精神』を弘文堂書房より刊行。／木村素衛、「身体と精神」を人間学講座V『人間の諸問題』（理想社）に発表。

4月11日　森本省念、臨済学院（現花園大学）教授に就任。

4月　柳田謙十郎の長男陽一、京都帝国大学文学部史学科に入学。

6月13日　西田幾多郎の姉正死去。

9月28日　高木惣吉、海軍省嘱託 天川勇をともない西田幾多郎を訪問。

9月30日　木村素衛、『表現愛』を岩波書店より刊行。

10月　木村素衛・臼井二尚、京都帝国大学人文科学研究所兼任所員となる（～1948年9月）。／高坂正顕、『カント』（西哲叢書）を弘文堂書房より刊行。

11月　西田幾多郎、『哲学論文集第三』を岩波書店より刊行、柳田謙十郎『実践哲学としての西田哲学』の序を執筆。／高坂正顕、『カント解釈の問題』を弘文堂書房より刊行。

この年　高坂正顕、『歴史哲学と政治哲学』を弘文堂書房より刊行。

昭和15年（1940）

3月13日　木村素衛、文学博士の学位を受け、30日、教授に昇任。

3月　高坂正顕、京都帝国大学教授（人文科学研究所所員）に就任。

春　杉正俊『郷愁記』、弘文堂書房より刊行される。

4月　柳田謙十郎、「日本思想の現在及将来」を世界精神史講座『日本思想』（理想社出版部）に発表。

5月　高木惣吉の代理として、調査課先任課員 佐藤治三郎中佐、京都帝国大学を訪問。田辺元をとおして高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高および助手二名を、海軍省調査課に対応する研究グループとする。連絡担当は高山がつとめた。／務台理作、『表現と論理』を弘文堂書房より刊行。

6月　柳田謙十郎、文部省教学局から再度招聘されるが、再度辞退する。

6～8月　柳田謙十郎、「行為的基体」を『哲学研究』第291～293号に発表。

7月22日　第二次近衛内閣成立。

8月　西田幾多郎、「実践哲学序論」を岩波講座『倫理学』第2冊に発表、また鈴木大拙『禅と日本文化』の序を執筆。／高坂正顕、「歴史哲学　第一部」を同岩波講座『倫理学』に発表。

8～10月　高坂正顕、中国に行く。

10月22日　西田外彦帰還。こののち甲南高等学校を辞め、立川の神戸製鋼電気研究所に入社。

10月　高坂正顕、『神話　解釈学的考察』を岩波書店より刊行。

11月8日　西田幾多郎、文化勲章受章。

12月　柳田謙十郎、『行為的世界』を弘文堂書房より刊行。

昭和16年（1941）

2月　木村素衛、『美のかたち』を岩波書店より刊行。

3月13日　西田幾久彦、武蔵高等学校尋常科に入学。このため外彦一家、芦屋より東京に転居する。

3月　下村寅太郎、東京文理科大学助教授に就任。／竹内良知、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。

4月　柳田謙十郎、台北をひきあげ京都に移り、鈴木大拙・高坂正顕をとおして高野山大学講師となる。

7月9日　西田外彦、再び出征。

8月　高坂正顕、『象徴的人間』を弘文堂書房より刊行。

9月　西田幾多郎、「国家理由の問題」を岩波講座『倫理学』第8冊に発表。／高坂正顕、「祭り」を同『倫理学』第9冊に発表。

10月　菊池正士、『物質の構造』を創元社より刊行。

11月　西田幾多郎、『哲学論文集第四』を岩波書店より刊行。

12月　小島祐馬の停年退官により、高坂正顕、京都帝国大学人文科学研究所所長となり、以降、専任所員からの所長選任の原則がたてられる。／柳田謙十郎、『道徳的精神』を弘文堂書房より刊行。／柳田陽一、京都帝国大学文学部史学科を卒業、同大学院に進学。

この年　布川角左衛門、岩波書店編集部単行本係長に就任。

昭和17年（1942）

1月　高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高の座談会「世界史的立場と日本」、『中央公論』に掲載。4月には「東亜共栄圏の倫理性と歴史性」が掲載される。

2月1日　柳田陽一、学徒兵として入営。

4月　柳田謙十郎、大谷大学教授となる。

5月　柳田陽一、千葉陸軍防空学校に入学。

6月　西田外彦、フィリピン辺の戦闘に参加。

7月12日　山本良吉、狭心症のため死去、享年72歳。

9月30日　西田外彦、台湾まで帰還。

10月1日　柳田陽一、木更津で軍務中に傷死。

10月21日　西田外彦、広島帰着。

10月　近衛文麿の次男通隆、東京帝国大学文学部国史学科に入学。

12月23日　野村重臣・斎藤忠らを中心に、大日本言論報告会が結成される。理事には、海軍省の肝いりで高山岩男・高坂正顕も就任。

12月　鈴木大拙、『浄土系思想論』を法蔵館より刊行。

昭和18年（1943）

1月　高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高の座談会「総力戦の哲学」、『中央公論』に掲載。3月25日、前年の座談会とあわせ『世界史の立場と日本』（中央公論社）に収録。

3月1日、小島祐馬『古代支那研究』を弘文堂書房より刊行。

4月23日　小泉信三、文部省教学局参与に就任。

5月　柳田謙十郎、『歴史的形成の倫理』を近藤書店より刊行。

5～6月　西田幾多郎、「自覚について」を『思想』第252～253号に連載。

7月　西谷啓治、京都帝国大学教授に昇任。／柳田謙十郎・金山穆韶、『日本真言の哲学』を弘文堂書房より刊行。／『読書人』「特輯・哲学書批判」において紀平正美・三井甲之ら、西田哲学を批判。

8月　田中忠雄、『読書人』につづき、『現代』において「西田哲学俗論」を発表。

11月8日　大磯の原田熊雄宅で西田幾多郎、岩波茂雄・高木惣吉と会う。

11～12月　高坂正顕、中国に行く。

12月20日　高坂正顕、『歴史哲学序説』を岩波書店より刊行。

昭和19年（1944）

2月　西田幾多郎、「国体」を執筆。発表前に田辺寿利・柳田謙十郎によって私家版がつくられ、回読される。

3月　柳田謙十郎、浦和高等学校教授に就任。／西田幾多郎、「論理と数理」を『思想』第262号に発表。／阿部正雄、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。／文部省教学局、思想審議会を設立し、西田哲学の審議をおこなったが、夏、海軍省教育局の抗議によりとりやめとなる。

5～6月　西田幾多郎、「予定調和を手引として宗教哲学へ」を『思想』第264号(合併号)に発表。

7月　西田幾多郎、「デカルト哲学について」および「同附録」を『思想』第265号に発表。

8月　西田幾多郎、『哲学論文集第五』を岩波書店より刊行。

9月　西田幾多郎、「国体」を改題し「哲学論文集第四補遺」として『哲学研究』第341•2号に発表。

10月　西田幾多郎、「生命」を『思想』第267号に発表。

昭和20年（1945）

2月14日　西田幾多郎の長女弥生死去、享年48歳。

3月　田辺元退官。以後、群馬県長野原軽井沢町北軽井沢大学村に居住。

4月　西田幾多郎、「場所的論理と宗教世界観」を脱稿。

6月7日　午前4時、西田幾多郎、鎌倉姥ヶ谷で尿毒症のため急逝、享年75歳。9日、逗子小坪火葬場で荼毘に付する。法名、曠然院明道寸心居士。遺骨は神奈川県北鎌倉東慶寺、石川県河北郡宇ノ気町森長楽寺、京都市右京区花園妙心寺山内霊雲院にそれぞれ埋める。

7月11日　務台理作、東京文理科大学学長、東京高等師範学校長に就任。

8月15日　柳田謙十郎、文学博士の学位を受ける。

8月　西田幾多郎「生命」(続篇)、『思想』第268号に発表される。

9月26日　三木清、豊多摩拘置所で病死。

10月　西田幾多郎「数学の哲学的基礎附」、『哲学研究』第345号に発表される。

12月　西田幾多郎『哲学論文集第六』、岩波書店より刊行される。

昭和21年（1946）

2月12日　木村素衛、上田市の講演先で急逝、享年50歳。

2月　西田幾多郎『哲学論文集第七』、岩波書店より刊行される。

3月8日　高山岩男、京都帝国大学教授に昇任（哲学哲学史第一講座担任）

5月　公職追放命令により、高坂正顕免官。

8月　公職追放命令により、高山岩男免官、山内得立がその後任となる。

10月　『西田幾多郎全集』初版の編集はじまる。

12月　金子武蔵、東京帝国大学教授に昇任。

この年　久松真一、京都帝国大学教授に昇任。

昭和22年（1947）

7月　西谷啓治免官。

11月　柳田謙十郎、『庶民主義』を進路社より刊行。

昭和23年（1948）

10月5日　西田静子、『西田幾多郎の歌』を明善書房より刊行。

昭和24年（1949）

4月1日　学習院大学開学。初代学長には安倍能成が就任。このほか天野貞祐・下村寅太郎・淡野安太郎が文政学部哲学科兼任教授となり、ロベルト・シンチンゲルが文政学部文学科兼担講師となる。

6月　鈴木大拙、ハワイにおける第二回東西哲学者会議に出席し、翌年2月、アメリカ合衆国本土に渡る。

昭和26年（1951）

3月31日　務台理作・金子武蔵、学習院大学文政学部哲学科兼任講師となる。

昭和33年（1958）

4月1日　三宅剛一、学習院大学文学部哲学科教授に就任（～1965年3月）。

昭和37年（1962）

4月29日　田辺元死去、享年77歳。

昭和39年（1964）

10月　高坂正顕、『西田幾多郎と和辻哲郎』を新潮社より刊行。

昭和41年（1966）

4月1日　下村寅太郎、学習院大学文学部哲学科教授に就任（～1973年3月）。

7月12日　鈴木大拙死去、享年95歳。

昭和43年（1968）

11月16日　宇ノ気町立西田記念館開館。

この年　　西田幾久彦、父外彦の蔵書を学習院大学理学部に寄贈。

昭和44年（1969）

12月９日　高坂正顕死去、享年69歳。

昭和48年（1973）

４月19日　西田琴死去、享年89歳。

昭和49年（1974）

７月５日　務台理作死去、享年83歳。

昭和51年（1976）

４月16日　西田静子死去、享年70歳。

昭和52年（1977）

４月16日　鎌倉の西田幾多郎邸、下村寅太郎をつうじて西田幾久彦より学習院に寄贈され、学習院西田幾多郎博士記念館（寸心荘）として開所される。

昭和57年（1982）

９月19日　山内得立死去、享年92歳。

昭和58年（1983）

１月16日　柳田謙十郎死去、享年89歳。

昭和59年（1984）

６月26日　滝沢克己死去、享年75歳。

昭和61年（1986）

１月31日　上田久、『西田幾多郎の妻』を南窓社より刊行。

参考文献

『西田幾多郎全集』（岩波書店、第１版、1947年）
『同』（岩波書店、増補改訂第２版、1965～66年）
『同』（岩波書店、増補改訂第３版、1978～80年）
『同』（岩波書店、増補改訂第４版、1987～89年）
上田久『祖父西田幾多郎』（南窓社、1978年）
上田久『続 祖父西田幾多郎』（南窓社、1983年）
遊佐道子「伝記　西田幾多郎」「年譜」（『西田哲学撰集』別巻１、燈影舎、1998年）
竹田篤司編「西田幾多郎年譜（明治三年―明治十三年）」（『理想』第536号、1978年）
竹田篤司『西田幾多郎』（中央公論社、1979年）
上杉知行『西田幾多郎の生涯』（一燈園燈影舎、1988年）
『「終焉記」と「未発表『序文』」―新資料』（石川近代文学館開館二十五周年記念刊行会、1993年）
松田章一「西田幾多郎と藤岡作太郎　『西田幾多郎全集』未収書簡　藤岡作太郎宛五通」（『北国文華』復刊３号、1999年）
下村寅太郎編『西田幾多郎―同時代の記録―』（岩波書店、1971年）
上田閑照『西田幾多郎を読む』（岩波書店、1991年）
藤田正勝『現代思想としての西田幾多郎』（講談社、1998年）
田中久文『日本の哲学を読み解く　「無」の時代を生き抜くために』（筑摩書房、2000年）
中込忠三『炎の絵』（南江社、1979年）

竹田篤司「下村寅太郎の百年」（下村寅太郎著作集13、みすず書房、1999年）
竹田篤司『物語「京都学派」』（中央公論新社、2001年）

『鈴木大拙全集』第30巻（岩波書店、1970年）
井上禅定・禅文化研究所編『鈴木大拙未公開書簡』（禅文化研究所、1989年）
上田久『山本良吉先生伝　私立七年制武蔵高等学校の創成者』（南窓社、1993年）
『田邊元全集』15（筑摩書房、1964年）
『務台理作著作集』第４～５巻（こぶし書房、2001年）
『高橋里美全集』第７巻（福村出版、1973年）
『三木清の生涯と思想』（霞城館、1998年）
高坂節三『昭和の宿命を見つめた眼　父・高坂正顕と兄・高坂正堯』（PHP研究所、2000年）
高坂正顕『明治思想史』（燈影舎、1999年）
三木達子『働き蜂―ある社会事業家の告白と提言―』（南窓社、1969年）
柳田謙十郎『わが思想の遍歴』（創文社、1951年）

柳田謙十郎『唯物十年　続・わが思想の遍歴』（創文社、1960年）
務台理作『社会存在の論理』（燈影舎、2000年）
張さつき『父・木村素衛からの贈りもの』（未来社、1985年）
木村素衛『美のプラクシス』（燈影舎、2000年）
木村素衛『表現愛』（こぶし書房、1997年）
『瀧澤克己著作集』10（法蔵館、1974年）
滝沢克己追悼記念論文集発行委員会『滝沢克己　人と思想』（新教出版社、1986年）
坂口博編『滝沢克己著作年譜』（創言社、1989年）
『隨眠　山内得立遺墨集』（一燈園燈影舎、1983年）
篠原助市『教育生活五十年　伝記・篠原助市』（大空社、1987年）
『臼井二尚論攷　抄』（臼井光郎発行、1999年）
京都宗教哲学会編『溪聲西谷啓治』上下（一燈園燈影舎、1993年）
高山岩男『京都学派の回想―旧師旧友の追憶とわが思索の軌跡―』（一燈園燈影舎、1995年）
花澤秀文『高山岩男　京都学派哲学の基礎的研究』（人文書院、1999年）
山田邦男編『森本省念老師』上下（一燈園燈影舎、1996年）
杉正俊『郷愁記―若き哲学者の日記―』（一燈園燈影舎、1985年）
久松真一「学究生活の想ひ出」（『思想』第376号、1955年）
藤吉慈海『禅者　久松真一』（法蔵館、1987年）
藤吉慈海編『久松真一の宗教と思想』（禅文化研究所、1983年）
『追想 金子武蔵』（金子伝太郎発行、1989年）
下村寅太郎著作集13『エッセ・ビオグラフィック』（みすず書房、1999年）
『湯川秀樹著作集』別巻（岩波書店、1990年）
日本出版学会編『布川角左衛門事典』（「布川角左衛門事典」刊行会、1998年）

黒田秀俊『昭和言論史への証言』（弘文堂新社、1967年）
大島康正「大東亜戦争と京都学派―知識人の政治参加について―」（『中央公論』1965年８月号）
大橋良介『京都学派と日本海軍　新史料「大島メモ」をめぐって』（PHP研究所、2001年）
高木惣吉「日本陸海軍抗争史」（高木惣吉『聯合艦隊始末記』、文芸春秋新社、1949年）
伊藤隆編『高木惣吉　日記と情報』上下（みすず書房、2000年）
伊藤隆『昭和十年代史断章』（東京大学出版会、1981年）
矢部貞治『近衛文麿』上下（近衛文麿伝記編纂刊行会、1951～52年）
「平和の世紀へ　遺書・遺品展―戦没青年とともに生きる―」（「平和の世紀へ　遺書・遺品展」実行委員会、2001年）
『平成新修　旧華族家系大成』上下（霞会館、1996年）
日本史籍協会編『現代華族譜要』（東京大学出版会、1976年、1929年初刊）
西邑木一『華族大観』（史籍出版、1981年）

戦前期官僚制研究会編　秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（東京大学出版会、1981年）
蓑田胸喜『学術維新　原理日本』（原理日本社、1933年）

『京都大学七十年史』（京都大学、1967年）
『京都大学百年史』部局史編一（京都大学後援会、1997年）
『京都大学百年史』写真集（京都大学後援会、1997年）
『京大百年』（京都大学、1997年）
『京都帝国大学一覧』（1938～41年）
『東京大学百年史』部局史一（東京大学、1986年）
『東京帝国大学一覧』（1942年）
『龍谷大学三百五十年史』（龍谷大学、2000年）
『学習院一覧』（1910年）
『学習院百年史』第一編（1981年）
『学習院大学五十年史』上下（学習院大学、2000～01年）
『東北大学五十年史』上下（東北大学、1960年）
『武蔵六〇年のあゆみ』（学校法人根津育英会、1982年）
『武蔵七〇年のあゆみ』（学校法人根津育英会、1994年）
『写真集　旧制四高青春譜』（第四高等学校同窓会、1986年）
『芝蘭　台北帝国大学予科創立五十周年記念』（台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会、1994年）
『大学村五十年誌』（北軽井沢大学村組合事務所、1980年）

『近代日本総合年表』（岩波書店、1968年）
『現代日本　朝日人物事典』（朝日新聞社、1990年）

煩瑣になるため関連年表にとりあげた著書および論文の掲載誌等はかかげなかった。各解説で注記された文献のうち、ここに掲げなかったものもある。

執筆者紹介

執　筆　者	所　　属	執筆担当部分
酒　井　　潔	学習院大学文学部教授・当館研究員	解説 2
岡　野　　浩	当館客員研究員	解説 3
田　村　　航	学習院大学文学部助手・当館特別研究員	解説 4 ・付録部
長佐古　美奈子	当館嘱託	解説 1 ・翻刻一部

西田幾多郎関係資料－付　全集未収録書簡－
学習院大学史料館収蔵資料目録　第 18 号

平成14年 3 月31日 発行

発行者　　学習院大学史料館
代表者　　鈴　木　　恒　夫

〒171-8588 東京都豊島区目白 1 - 5 - 1
（電話）03－3986－0221〈内線〉6569